

詩歌集

小池辰雄著作集

第八卷

⑧詩歌

詩歌集

小池辰雄著作集

第八卷

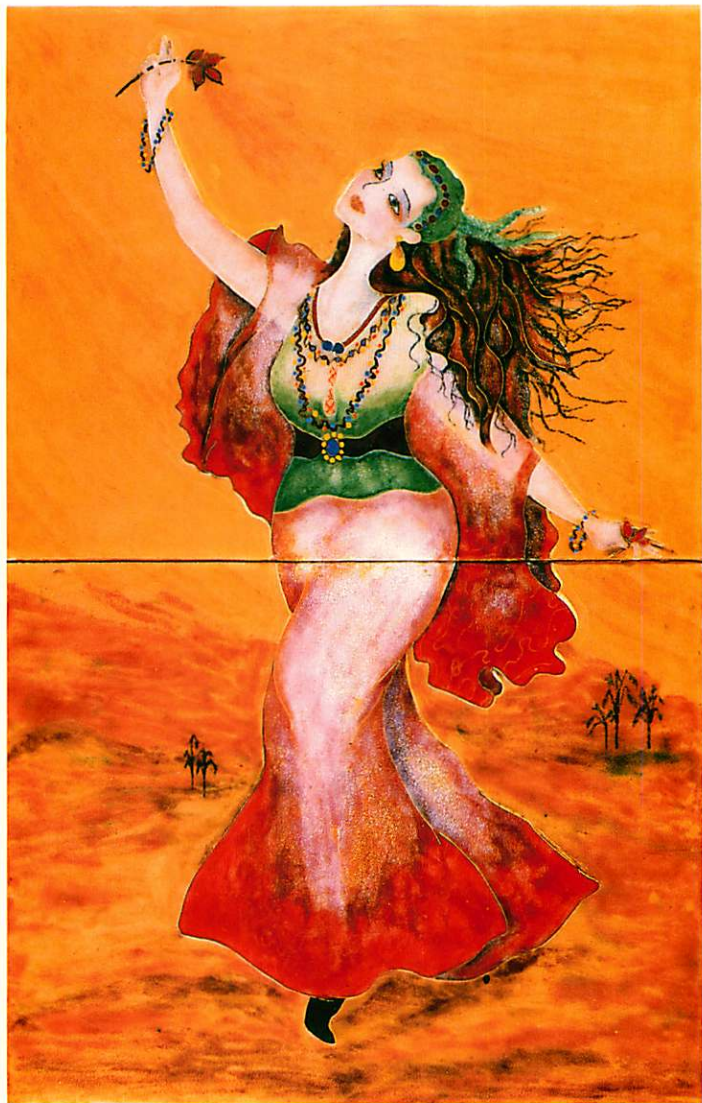
この『詩歌集』を

詩魂ゆたかなる

内村鑑三先生に捧ぐ

一九八六年早春

天韻



サフランの乙女 召団讃歌A31参照(イザヤ35.)
七宝美術家：斎藤桂子作

—— 本卷のころ ——

晝間は実存主その愛を現はし給ふ
夜間は詩歌 われと共にあり
わが生命の神への祈なり

—— 詩篇四二・九（原典私訳） ——

序言

この第八巻『詩歌集』は、著作集発刊の当初は未だ考えていなかった。それで詩歌は各巻に若干散在している。旧稿を集めてみると、案外多いので詩歌一巻を編まねばならぬと思い、茲に『詩歌集』という本巻が編集された。それで本巻の構成上、既載の詩歌もかなり再録した。

目次に配列したように八項目から成っている。

第一項「和歌集」。最初の天淵集は、必ずしも年代順でなく、内容から言ってもさまざまで、概して古いものが多いが、案外近作もある。とにかく一首ごとにそのときの全身的な心境を告白したものである。和歌による私の歴史的な「自然と人生」と言へようか。

「西独ハンブルク生活より」「西独周遊旅行にて」及び「帰路点描」は、『旅に想う』という随筆の中に散在している和歌を集めたものである。一九六一年から六二年にかけてのハンブルク生活と旅行のスナップのようなもので、ドイツへの郷愁の想いも湧いてくる。

第二項「警世詩集」。少青年の教育は教育者が敬天愛人的宗教心を以てこれに臨むのが本道であるとの悲願が、特に、「教育の危機」と「本願道」に叫ばれている。「日本国民に寄す」は日本国への祈りであり、「バリサイ精神と戦う」は観念的キリスト教界一般への警告である。「主の身さながら」は降誕節に因んだものの、「キリストの霊生」は復活節に因んだものである。

第三項「近親・師友篇」（詩集）。私にとっては何といっても「長兄政美」が第一恩人であるので、これを先づ掲げざるを得ないのである。彼なくして今日の内面的な私はない。しかし別な意味で母の恩は特別である。母のことは『随想集』に書いたが、いづれ詩になるにちがいない。「姉」は苦勞した、この短詩の通りであった。孫女「優子」の朝露の如き短命を徒らにしてはならない。「藤井先生」は信仰上の恩師である。その印象はいつまでも消えない。併し私が「手島郁郎兄」と共に天から聖霊のバプテスマに与^{あづか}って、使徒的信仰の次元に突入したら波が立った。内村鑑三先生仆れし時、藤井武先生は、先生の屍を乗り越えて進む、と叫んだ。私は藤井先生の屍を乗り越えて進みつつある。キリスト直結の信に信入して新宗教改革をどのキリスト者もなすべきではないのか。

獨協学園百年史のことに私はここ数年委員長として関係しており、天野貞祐先生の後任としてかつて獨協中学高校の校長も勤めたので、先生は身近かなため、先生の立場から「わが人生」（同名の先生の著書がある）と題して一晩で作詩した。

内村鑑三は人も知る如く、否人は余りわかっていないが、明治・大正・昭和に亘る精神界の眞の王者であつた。眞の預言者であつた。「預言者は故里に容れられざる」のみか、歴史の終末まで大方容れられない。「内村鑑三の生涯」は、先生の召天五十五周年記念に三晩でものした。先生の好きな讃美歌で唱えるように口吟しながら書いた。今までで最長の詩である。

「彗星的人物閑湊」はこの『詩歌集』の自作の中で最も新らしい詩である。独協学園理事長閑湊なくして今日の独協なきことは天野貞祐学園長と軌を同じくする。天野・閑は独協の連星的二巨星である。独協は一九八三年に創立百周年を迎へたが、その前後にこの二存在を失つた。この二存在の理念と実践をいかに受け継ぎ、いかに展開してゆくかに、今後の独協の運命が懸つてゐる。

第四項「即興詩集」。「ツェッペリン飛行船」は本当に美事で今の若者が見たら正に「恰好いい」ものであつた。「井の頭の池」は昔から私にとって思ひ出の深い池である。今も時折散歩に出かける。「晩秋の伊豆の旅」は九州関係の友人達の友情であつた。「櫻よ!」はこの詩の通り、私の中に生きている。「春のいのち」「視よ此の人ぞ!」は自然にメロディーが浮んで来た。それを国立音大作曲科の学生L・Iさんに楽譜にしてもらつた。

第五項「玉髄集」(訳詩集)。私は中学時代から英詩が好きだつた。英詩も、ドイツ語の詩も、訳したのがまだまだあるのだが載せるのを控へた。

第六項「校歌」。四校から作詞をおたのまれしたが、第一と第四番目の「歌はれざる校歌」

となった。夫々の項でことの次第を記した通りである。

第七項「日本キリスト召団讃歌」。知らぬ間に七十余篇の神、キリスト、聖霊讃美の歌ができた。特にイザヤ書の五連歌（A 30—34）と黙示録の四連歌（B 12、A 15、38、39）は注目して下さい。曲は日本基督教団の讃美歌の曲をかなり多く用いさせていただいている。その他の曲についても召団で用いている讃歌集は売物でないから、御諒解を願う次第である。教団で採用されるものがあれば幸である。

第八項「独和対照」。かつて内村先生が「聖書之研究」誌上に「英和対照」を書いておられたので、それに因んだ。全く自己流の独文乃至独詩である。誰か英訳を作ってくださいれば幸である。なお詩歌は私が地上にある限り創作されてゆくであらう。

一九八五年八月二十八日 ゲーテ生誕記念日に

野尻高原の山小屋にて 天韻

〔註〕本著作集に出てくる「彼岸」「悲願」「飛雁」等の号は昔のもの。かなり以前から「天」を冠したいろいろのがある。そのときどきの内容に応じてさまざまに替っているが「天韻」が代表的なものである。

目次

序言	1
一 和歌集	13
天淵集	15
西独ハンブルク生活より	42
西独周遊旅行にて	65
帰路点描	76
二 警世詩集	85
新日本国民に寄す	87
パリサイ精神と戦う	88
靈燈萬里	90

三 近親・師友篇（詩集）

曠野魂……………97

教育の危機……………99

本願道……………109

主の身さながら……………119

キリストの霊生……………127

わが兄に寄す……………141

わが姉に寄す……………144

優子ちゃん……………145

藤井武先生の片影……………150

凱旋……………157

忍従の勝利……………159

太田彼得さん……………165

わが砲兵士官……………169

手島郁郎兄（召天十周年記念に）……………172

「わが人生」（天野貞祐独協学園長）……………173

内村鑑三の生涯（召天五十五周年記念に）……………182

彗星的人物 関 湊（独協学園理事長）……………193

四 即興詩集……………197

獨り坐す……………199

藤棚の朝露……………200

五月のある夕……………201

「エヴァンジェリン」……………202

ツェッペリン飛行船……………204

壮烈なる夕景……………207

自然……………208

井の頭の池……………210

黄昏たそがれの瞑想……………211

虹……………214

大學よ！……………216

七夕の霊夢……………218

春なほ浅き夕日影……………222

晩秋の伊豆の旅……………223

ある秋の京都特別集会……………226

五 玉髓集（訳詩集）

櫻よ！……………230

春のいのち……………233

視よ此の人ぞ！……………234

玉髓集（訳詩集）……………237

「人生の歌」（ロングフェロー）……………239

「貫け」（アイヒェンドルフ）……………241

「虹」（ウォーヅウオース）……………241

「五月の花」（J・G・ホイッチャー）……………242

「アッランド」跋詩（ブラウニング）……………244

「砂洲を過ぎりて」（テニスン）……………245

「旅人の夜のうた」（ゲーテ）……………246

「矢と歌」（ロングフェロー）……………246

「村の鍛冶屋」（〃）……………248

「エクセルシャー」（〃）……………251

「愛蘭の曲調」より（トーマス・ムーア）……………253

「彼、齡二十三に達せしかば」（ミルトン）……………255

「勝利者の墓」（ブライアント）……………257

六

校歌

昭和医科大学豫科校歌……………283

独協大学校歌……………287

独協埼玉高等学校校歌……………293

七

日本キリスト召団讃歌

……………301

A類 日本キリスト召団一般讃歌……………303

B類 日本キリスト召団特有讃歌……………358

BS 各召団讃歌……………361

「我らの神は堅き城なり」(ルター)……………263

「み使の群天降り来りて」(〃)……………268

「歓喜に寄す」(シラー)……………269

「カッサンドラ」(〃)……………273

「舟出」(ヒルテュー)……………278

「愛は一切に勝つ」(〃)……………281

「神は近い」(グスターフ・キューネ)……………282

B	折にふれての特殊讃歌	376
---	------------	-----

八	獨和对照	399
---	------	-----

「エン・クリスト」季刊誌巻頭の詩的散文乃至詩文

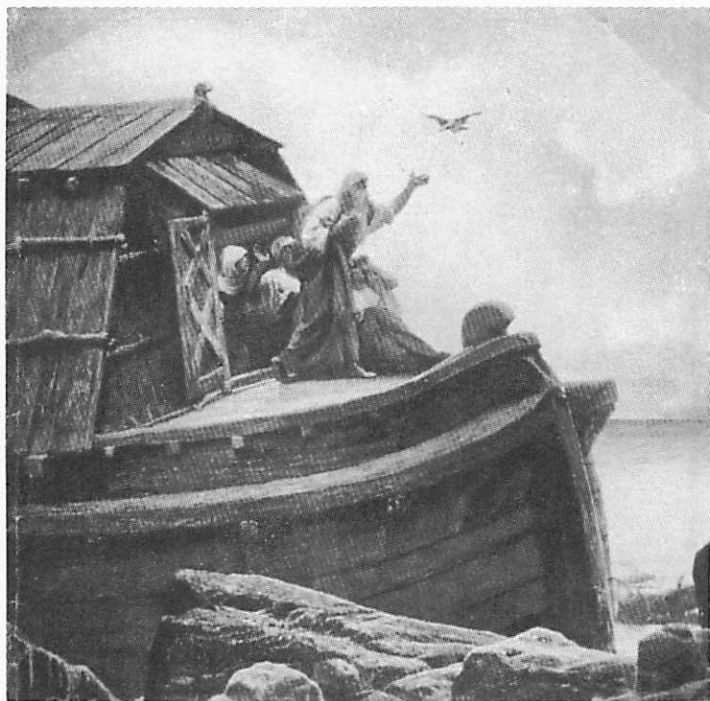
跋		445
---	--	-----

* 表紙の画像はイタリアの世界的詩人ダンテ

詩
歌
集

一

和歌集



鴿暮におよびて彼に還れり
視よその口に橄欖の若葉ありき
(創世記8:11)

天淵集

天淵

是らの歌はわが生命の神に捧ぐる祈なり（詩四二・八現行日本訳）

かの大洪水のあとの寂漠たる天地の間、濁水はいつ退くとも見えわかぬのであったが、ある晨一羽の鴿がノアの希望をその翼に載せて方舟から飛びたった。鴿は待てど待てども還らない。既にして暮色は迫る。すると蒼然たる空に一点の影が映った。鴿がもどつて来たのである。方舟に近づくをみれば、「視よ！ その口には橄欖の若葉があつた」（創八・一二）。此の一片の若葉が如何にノアを喜ばせたことか。ノアの双眸は夕映の中にうるみ光った。ノアの希望は一片の若葉に懸けられた。二十世紀後半の人類の命運が聖書の審判と救済にかかっていることを誰が腸の底から知っているであろうか。

折にふれての感懷、我れなりの三十一文字を以てする告白。若しやそのいづれかが読者にとつて橄欖の若葉ともならば幸である。

天は淵に臨み、淵は天を呼ぶ。最も相隔たるもの、最も近し。いと高き所に住み給う聖者、深淵より呼ぶ者の声に耳傾け、自ら贖主と成りて降り給う（イザヤ五七・一五参照）。かかる神の恩寵に生くる者の歌集、名づけて天淵集と称う。

○わが神よともしつな縄を断ちて漕ぎ出でしこの舟路なり護り給ひね

○舳かましべに碎けては散る波華なみはなとわがむら肝も碎けては散れ

○祭司・学者・パリサイの徒にけな貶されしキリストのもとに我れは馳せ往く

○兄弟姉妹はらうよ、苦しみ多き地路なれど一足ひとあしごとに天路ならずや

○大み神み民と共に住み給ふ「神の幕屋」の成る日をぞ待つ

○教会も無教会をも貫きて聖靈みたまの幕屋ありと知らずや

○兄弟姉妹よ海べ山べに聖名のため集ひて張れよ聖靈の幕屋

○十字架を負ひに負ひてぞ斃れける師の軍立今ぞ偲ばゆ

○若き日に荊棘の野路を草わけて行き斃れたる兄の生涯や

○在りし日の兄の生きざまもなほ愛をとどめて胸底にあり

○夏の夜の星座の相を学びてし片瀬の川の橋の欄

○幼児の吾れを遺して逝きし父よ覧したまへ我れ此処にあり

○ぬばたまの幽闇の三十年を踏み越えて光妙へなる母の心や

○松の木の幹もとに腰をうち据えてわれ聖書読めば松籟の呼ぶ

○自我を張り栗刺を突つ張る世なりとも敵きみ神の審判に耐へじ

○わがダンテ汝が経巡りし地獄こそ此の末の世の故里ならめ

○その靈は涸れ果てにたり今の世の男兒女子の理論を聞けば

○人の智の極限尽くすも罪の世は戦争を産みて亡びゆくのみ

○バトモスの天の顯示を無みしつつ二十世紀は崩れゆくなり

○天を裂き淵を割りてぞ臨みませ聖靈の神よ此の危機の世に

○靈幸ふ神の言を友よ今我れ祈りつつ星に誌せり

○久々に旧き玉梓繙けば誌友らの情漂ひてあり

○泡沫と変る心情の友もあり聖靈よ祈りて執り成し給へ

○十字架の下にし伏して罪を無み祈りてあれば聖靈降り来る

○一切を知り給ふ主にゆだねつつ僕の一路を往きてし果てん

○「今日も我れ汝と偕に歩むべし」み声うれしき旅の寢覚めよ

○車窓に倚り流るる景色を眺めつつ万象流転を想ひてもみる

○現世をたださながらに観るときは空の空なりすべて空なり

○聖靈の根源の相に在る魂は現実の奥の現実をぞ見る

○キリストの愛の聖靈の住みてより懼れを知らぬ愛を知りたり

○赦しつつ此の身を愛し貫き給ふ主の聖靈の熱き生命や

○エレミヤの「天地晦冥」の轟きに世紀の嵐息吹き初むるか
エレミヤ 四・一九―三三

○世界史の一環を負う義の子らよ愛の炉を経て世の光たれ

○たのしみは聴くも語るも同じこと聖霊に在りて聖書学ぶとき

○禪の男児ぞ二人砂浜を韋駄天走りに競ひてみける

○松濤を越えて聳ゆる塔に登りうち眺めけり大灘相模

○路もなき汀の空を鳶は往く翼を張りて風のまにまに

○夕されば西の雲波蹴破りて富士の峰出でつ待ちわびし日に

○水遣りて小庭の草木息づけば母うへ窓にうれしみてあり

○夏の夜の空の真洞の天の川光り霞みてそこひも知れず

○年ごとに害はれゆく武蔵野の水と林と畠と野の影

○新しき天地来なばわれはまたその武蔵野に還り往かまし

○聖手により五百重波風乗り切りて到り着かなんみ国の港

○人は寝ね夜は更けにけりわれ独り兄を偲びて聖書に涙す

○語るべき友のなければ筆執りて何ごとか書く祈りに寄せて

——一九三三年入信後問もなき頃

——九月二日政美兄上の一周年

○月の夜や母思ふこの心には秋のあはれぞいよよ身に泌む

——失明の母を想ひて

○酒槽さかぶねを独りにて踏む「羔」の此の雄篇を繰返し読む

——藤井武先生の「羔の婚姻」の中の「羔」という一篇のこと

○むらさきに空の匂へばその面に輝き著るき星一つ澄む

○独り坐し天を仰ぎてもものすなりわが歌心秋空よ知れ

○池の端はに傘さし見ればその面に雨脚躍りて玉走りたり

○夕暮れて森の細路はそじを辿るわれ散歩を好みし兄をし偲ぶ

○二羽の鴿隣家の屋根に舞ひ降りぬその翼の色真白なりけり

○夕まぐれ森さはがせて白雨の近よる気配風かとも思ふ

○夜もすがらガラス扉越しに見えし月我に何をか語らんとせし

○ドイツ語をいのちがけにて学びける武士の子ら今日ぞ去りぬる

——東京陸軍幼年学校第三十四期卒業生を見送りて（昭和八年三月十七日）

○とく起きて幾朝われは星を見しまたとなからん預言書の秋

——藤井先生が「預言書」をこの秋（一九二七）大観的に講じた

○曙の明星を見て偲びしはこれに類ひし兄の相よ

——藤井先生が舎兄政美を曙の明星の如き人であったと申した

○戦ひて完膚なきまで傷くも戦避くるな男児にしあれば

○わがために勞せし母の来し方をみ顔の小皺に見るこの胸よ

○ 生きながら再^{また}た子らの顔見得ずして去りゆく母を想ふこの胸

○ 言ひ難きこと多からん母君の胸中^{みち}偲^{おも}へば悔ひぞ多かる

○ コスモスよ聖国来たらば母上を心ゆくまで咲きて迎へよ

○ ただ一つわが歩むべき道ぞある天地を貫く愛の靈道

○ 亡き兄と光失せたる母君を思へばわれに闘志湧き立つ

○ わが師をばなほ幾年^{いくとせ}も苦しめん詩篇^{うた}を思ひて聖名をし呼ばふ

○ 読みさしの書^{かき}そのままに杖を執り夕陽を追ひてわれ立ち出でつ

—— 小庭のコスモスを見て

—— 「燕の婚姻」のために祈る

○たそがれにしづけさ深みゆくりなく木ぬれ騒がす音のあやしき

○わが兄の辿りし路の途絶えたる峠を今ぞまのあたり見る

——兄と同年輩二七歳を迎へて

○丘の上は今日も寂しや野の人は病みつき給ひて八十日に余る

——藤井先生のこと

○燈火を断たれて我れは母君のあやめもわかぬながき夜に泣く

——停電したとき、一九三〇・二・二二

○父君の病の床を訪ねんと起き立つ人は劣らぬ病者

——父君も藤井先生も胃潰瘍

○師の傘に雨を凌ぎて帰りける秋のひと夜をわれは忘れじ

○名にし負ふ沙漠の原ゆうち見ればいや白きかな山の息吹は

○白煙をみ空にのぼらす火の山の心にも似たりわが胸の中

○暗黒の夜に何処いづくともなく吹く風に泣く松籟の言をぞ聴く

○音もなく雪の降りしくあかときに旅立ちにけり嬰兒みどりこの魂たま

○無辜つみなもの心はいかでいたつきに患なやむべかりしわれは悲しむ

○小さき花茶毘なびの煙と立ち昇り天つ聖国みに咲き甦かへるらむ

○『ヨハネ号』読みゆくうちに人知れず涙するかな新町の丘

○『カント号』水茎の跡は変らねど光の源はいたつきの床

——この二首藤井先生の月刊誌のこと

○流れたる歳月すでに十四年去りにし彼女をあはれと思ふ

——妹愛子の命日六月五日に

○わがためか奮の生命捧げたる彼女の愛はわがうちに生く

——妹は九歳で仆れた

○わが旅路の易らぬ友は新町の丘にて見たる詩の世の星

——ダンテを野原でF先生とよむ

○乙女子は地震はいかほど怒るとも父兄の死ゆえ動かじと曰ふ

——大震災で父と兄とを失つた乙女の心！

○在りし日の面影しるく今もなほわがまなかひにありありとあり

○武蔵野に生ひ立ちし日の縦の影雄々しくもあり寂しくもあり

——縦とは長兄政美のこと

○三伏の暑さも何かみ恵の蔭に憩ひて聖書よむ我は

○白鳥^{シゲノス}を共に仰ぎしわが兄は今や聖国の庭に見るらん

——白鳥座、北十字星座のこと

○白銀^{しろがね}の彗星を見るその昔螢^{へい}趁^せひにし橋のたもとに

——ツェッペリン飛行船を新宿の橋上でみた。一九二九年八月十九日

○送るべき絵ハガキの葉の一つだに無ければゆるせつたなきわが絵

○白百合に赤き薔薇^{さうび}をうち交^{まじ}へ十四となせり師の日数へて

——一九三二、七、一四、F先生二周年の日に

○夏雲の真白き此の日思ひ立ち片瀬に遊べり我ら三人は

○空を飛ぶ鳥うらやましもしこの身人に非ずば鳥とならまし

○聖名の故永遠に易らぬ伴侶を得し友の幸深からんことを

○草も木も渴き果てたる午さがり真清水うてば涼風ぞ立つ

○諸星の順ふ星をうち仰ぎ陸奥の旅の佳耦をしぞ想ふ

○みちのくの伴侶の旅寝に鵲の翼や伸びん七夕の空

○満天の星をいただきて灌木の林のかげにわれら祈れり

——友人の結婚を寿ぎて

○大鷲のひとり翔けゆく天空の雲海やげに雄大ならん

○来るたびに心は昔を慕ふかな江の島の西片瀬の浜へ

○浜沿ひに走る砂丘と足もとの蟹の小穴に昔しのぼる

○見渡せば汀に散れるもみじ葉よ何かと想へば蟹の群なり

○磯に立ち六年の昔を偲ぶれば想ひはるけく西空に飛ぶ

○山かげの暮れゆく浦に揺ぐめり僚船なき舟の櫓の影

——片瀬の西浜で一夏を送った

——千本浜にて北京を想ふ

○主なき片丘の辺は春寂し友寄り会ひて夕陽に語る

○海越えの南の島に友ありて玉づさを賜ふ祈りに寄せて

○小庭べの初もみち葉に光さし縁滴る夕ひと時

○大空も陸も諸共にゆらげかし諸国びとの魂醒めんため

○乱れたる麻も愚かや今の世は夢にも知らず神さばくとは

○ひるさがり櫟林に立ち入りて憩ふ袂にそよ風の吹く

○涯しなき宇宙を想へばわが魂は身を離れてか飛ぶや片時

○うららなる春の日花をよそにして専らに審ふ答案の跡

——藤井先生すでに亡し

○むら肝の心の美しき人ゆえに現世ゆかし聖名をし讃ふ

○朝風のそよぐまにまに藤棚のみどり葉の端に小蔓ゆるぐも

○五月空もみぢ葉は今庭のべに葉かげつくりてあをあをと萌ゆ

○蜂一つ曇硝子戸につきあたり出づべき隙のなきに羽ばたく

○春深き夕の光にちらちらと揺ぐ葉うらに緑こぼるる

○定めなくい行けば途にゆくりなく牛立ち居りて目を瞠らしむ

○岩かげの日暮れて黒き海づらにあやしく光る海の螢火

○ほのぼのと空明けゆくに目醒れば松生ふる峰蚊帳越しに見ゆ

○その昔還らぬ兄を送りたる母はも明日は次兄を遣るなり

○昨日今日吹きては易る風なれど風に揉まれて樹は生ふるなり

○家に居て孟夏と競ふおのこ我れ机に寄る額に火花や散らん

○おのがじし学びの道を歩みなば再た語らなん満月の頃

○ゆくりなき旅こそ善けれ叔父上と温泉の裏の山にのぼれり

○溪川のさやぐ小径をゆくなべに峰渡る雲の真白きを見る

——次兄龍二の渡歌

——ねじり鉢巻きで猛勉

○草茂きつづら折りなる山路を尽して叫ぶ子らの声はも

○心なき雲とは想へど見渡せば浅間アルプス戸隠の山

○路の辺の青草の間に咲く芒花秋風の音を見ると言はまし

○草あひに湧き立つ水を渴きたる喉は掬みて神酒とし味はふ

○人声を樹の間に聞きてか知らねども歌を消したる山の鶯

○夜もすがら雨風あれにし朝ぼらけ虹は立ちたり大空高く

○中空を蹴りて立てる大虹の半を呑むか武蔵野の土

○澄み渡る秋のみ空を匂はせて乙女は応へりわれ往かましと

○奇^くしかる神の摂理に胸うちて今ぞ立ちたり新しき路に

○羔の聖名を我らは讃へつつ進みゆかなん峠の道を

○十字架の恩恵^{めぐみ}に結はれし心には羔の日の夢のみぞある

○朝ごとに西の小窓^{まど}ゆ目を遣^やるにわが山の峰^ねの白さ増しゆく

○あれくるふ暴風雨^{あらし}も何か聖言のかげに安らふ眠りありけり

○幾年^{いくとせ}も愛^めで育^{はぐ}みし独娘^{ひとりこ}と別れん嫗^{おきな}の胸中^{みち}思へば

○母と娘は離別^{わかかれ}の期の備へして室をわがちていね給ふとは

—— 黙示録十九、二十一章

—— わが山とは富士のこと

○ 神の賜^{たま}ぶいのちの智慧を喰^たひてぞわれは活くらめ塩なむるとも

○ 白がねの眉にも似たる月の華^{はな}くれなる残る西空に出づ

○ 慕はしき主の道慕ひてわれは往くみ脚の跡は今も消えせず

○ 進み往くわが峠路はこごしけれど七転び八起き撓^{たが}まずい往く

○ ひたぶるに今日一日に生命賭けわれ生くるなり仔細は知らず

○ キリストの愛の聖^み霊のこの灯影交る友の胸に映^{うつ}らん

○ 教皇に決定^{きだめ}の否^{ナイシ}を叫びけるルターの声今も木^こ霊^{だま}す

○ その昔聖書^みを訳せしルッターのワルトブルクに二夜明かしぬ

○わが国の精神史をば顧みて今こそ危機なれ突破せん哉

○聖霊の幕屋の自覚新たなれ各召団よ地道の伝道！

○いのちなる聖霊みの法のりは真理まことなり霊言一如信行一貫

○十字架の死線を越えてぞ福音は身につきてあり聖霊みに在りて

○十字架に先づ無とされて聖霊に生命づけられ鍛えられゆく

○われもまた罪びとなればわが友ら離れゆくともただ祈るのみ

○信愛を裏ざられしは幾度びぞ涙の中よりゆるすこの胸

○十字架の下にて解けぬ事あらばそはバリサイの心根と知れ

○十字架のゆるしを受けてとやかくと友をなじらばサタンの手中

○十字架の碎け賜りわが衷に聖霊の愛の泉湧き立つ

○イエスこそ福音の原始なれば原始福音と吾れは呼ぶなり

○わが慕ふ原始の靈山極むべく五十路の峠今日ぞ越えゆく

○「キリストの福音の原始」告げ知らすマルコス伝のところにぞ通ふ

○使徒たちの原始福音に殉ずべく心定めたり峠の祈り

○原始なる福音のしらべ豊けくも九天に響動み九地に震撼ふ

○教会史の底を流るる原始なる福音の泉全世界に湧け

○聖靈の身証に神の栄光ありし使徒の昔を今日も明日も

(以上七首は原始福音を謡ったもの)

○久方の靈火を点じて冷闇の世に煖炉とならん燈火とならん

○主と共に十字架されて甦りみ霊を宿す三相一貫

○すさまじ聖劇なる聖書なればその現実に投身して読む

○贖はれし五臓六腑に注がるるみ霊の生命限りあらず

○主に在れば信行一如の生命なり観念に非ず御利益に非ず

○キリストは我れをゆるして限りなしこの福音に生命を賭けむ

○思ひ譴り深きイエスの愛を浴び荷ひの力わがうちに湧く

○キリストの白光ひかりを浴びてわが軀むくろ無色透明光風霽月

○十字架を口にしながらみ霊なく我をば審くバリサイ多し

○良寛よくぞ大愚と申したり我れなつかしむ僧の心を

○大空を裂きて閃めき轟きて地軸震はす山の雷

○山々に轟き落ちて大空へどよもし返す雷霆いかずちの声

○末の日の審判さいはんの期きにいかづちの怒りやあらん畏れざらめや

○いかづちの怒りつづくるさ中なかつには深山も人もただ戦おのけり

○稲妻のきらめくなべに白銀しろがねの波漂ただよはす相模大灘

(昭和十七年八月三日夜)

(以上五首は大雷雨を詠じたもの)



大磯海岸の夕照

西独ハンブルク生活より

自 一九六一年四月二十九日
至 一九六二年三月十六日

○鹿島立ちあわただしかりくさぐさのこと仕事も棄てて出でけり

○旧き友われと妻子を自家用くもにて羽田空港へ道しるべせり

(望月健一君の好意)

○武蔵野の幕屋の友らの歌ひてし「神はわがやぐら」に我れ勇みたり

○樓上の一角に湧き起りたる「神はわがやぐら」歌声強し

○飛行機の梯きざはしの上ゆ振り向けば陸橋さんばしよりの声ぞ身に沁む

○飛行機の窓へによれど見えわかず誰そ彼れよりも暗き宵闇

○見送りの人の姿の見えわかぬ離別の瞬間より情なきはなし

○離陸せりわが人生の前篇に訣別を告げし出日本なり

○わが路を知り給ふ神にゆだねまつる右も左も見えわかぬ我れ

○見え始めぬ白き山々と針葉の林まだらのアラスカの原

○北極の方へ飛びゆく雲の上馬手に満月あり弓手に陽あり

○東西の文化を徴すや月と陽よその融合を黙示すとぞ知る

○瞰下せば陸の影あり白衣の緑陸とはあやしきことぞ

○高々度三万七千呎フイットより降りくだりて雲海くもに突き入る

○エア・フランス指しかかりたり北ドイツ海岸線は地図さながらに

○低空の飛行に入れば赤屋根と緑の森のドイツなりけり

○幾年いくとせも音には聞きしドイツ国始めて見たるこの一瞬ひとときや

○ジェット機きの車輪が大地に触れしとき吾が人生の後篇に入る

○機上にて親しくなりし隣人が「先生おめでとう」とことほぎくれし

○外とつ国に降り立ちて見れば有難しバウルス一家の出迎むかうるあり

○一年ひととせをここに過さむわが部屋の卓つくえに寄れば万感の迫る

○過ぐる年ワグナー・安藤暮しける卓と椅子と取りつけベッド

（先任の交換教授高木卓兄〔筆名〕はワグナー研究の第一人者）

○み霊なる主のみふところに身をゆだね夢路安けく今宵も寝ねん

○快き獣医の家の客の間にロダンの傑作「接吻」を見る

○しののめの空に流るるアムゼルの歌にはのぼの旅寝めさむる

○庭さきの林檎二本咲き匂ひ小鳥も歌ふ外国の春

○日本語を学ばんとするゼミナールの若き友らの手びきうれしき

○教会の鐘の音調に導かれ道を辿りし初つの礼拝

（ハンブルク市東北部のウェリグスビュッテルのルター教会、一九六一年五月七日）

○アルスターの湖に揺れ往く白帆影冴え冴えと映ゆ緑の丘に

○八千重波船路はるけく来りけり旅に備へし三包の本

○樺色の嘴しるきアムゼルが芝生に降りて蚯蚓喰ひおり

○五月雨のそぼ降るなかを配り来る新聞売りの乙女に遭えり

○気まぐれの五月空なり今晴れてはやくも曇りまた降りきたる

(これは四月から始まるのでハンプルクではこれをアブリル・ヴェッターという)

○外出に雨衣か雨傘を忘れなば一度や二度の洗礼欠かさず

○学舎ゆ帰る路々たはむるる金髪の見らげに愛しけやし

○理髮屋髪刈り洗ひ髭剃らせ幾らと問へば五マルクを越ゆ

(当時日本では百円二百円程度だったから驚いた)

○芝生にてクロケットに興じけりところ変れば遊戯も変る

○林なす墓の標に偲びたり苛烈なりけん空襲の弾雨

○黒石に黄全の横文字刻みたる墓碑は惹きけり旅人の目を

○多摩よりも広くあるらん浅緑かがやふ墓地哉オールスドルフ

○逞しき榎の巨木をうち仰ぎ樹齡に偲ぶ宗教改革

○そそりたつ榎の葉蔭に咲く小花宇宙の心ここにこぼるる

○朝陽さし緑したたる山毛櫨の樹の下路を踏みしめて往く

○路の辺の草に交りて咲く花に瞳の如きはは笑みのあり

○牧場にてのんびり草喰む牛どものただ中を今日は始めて通る

○林間に蜂の働車をすておきて翁ただひとり昼食に憩ふ

○ぶんぶんと飛び交ふ蜂を子らの如愛で飼ふ翁の心嬉しむ

○畠間ひをゆく路をなみ踏み迷ひ草わけ柵越え牧場よこぎる

○胡月亭の夕の窓うち見れば虹は二重に空を彩る

○たのしみはみ空はるけく東より飛びて舞ひ込む文をよむとき

○たのしみは仕事を終へてはるかなる親しき友らに文を書くとき

○たのしみは古書店歩きで念願の古書を見出でて手にしたる時

○ヘブル語とルタードイツ語対照の聖書見出でし古書店帰り

○観念の壁を破りて語りてし真理に異郷の友ら欣ぶ

○ゆくところいづこなりとも胸襟を開きて語れば主の愛は勝つ

○路のべに乙女ごごみて何すらん手負ひの鶴をいたはりており

○朝日かげ匂ふ緑葉瑞々し底ひもあらず澄めるみ空に

○出日本使命は重し祈り入りキリストに生きん真理に生きん

○「一切の秘訣を得たり」と語りけるパウロの心は旅の身に沁む

○力ある愛のわが主に身を托し愛の化身と我れならまほし

○旅に来てつらつら知れり二十年の幕屋の路の真理なりしを

○賜りしこの一年を限りなく価値あらしめん聖力に頼らん

○聖靈よわれを火となせ風となせいのちのみ靈の証身たらん

○焦点は十字架されて聖靈のバプテスマ受くる信仰にあり

○恙なく五十路の峠を迎へたる妹がこの日を此処に憶ゆる

○まめやかに励みて迎へしこの峠くつろぎ憩めよ子らと睦みて

(順子五十歳の五月二十五日に)

○聖手により旅路つづけん相助け幕屋張りつつ神の山まで

○ただ独り街を巡りてゆく我れの旅の心の影は映らず

○わびしらの旅の生活もありがたしみたまの温泉胸中にぞ湧く

○破れ易きこの現身よみ霊なるいのち宿さでなどか生き得ん

○われはげに八方破れの幕屋なり扉無ければ霊光のさす

○武蔵野の幕屋の友らよひたぶるにわれらに賜びしこの道を往け

○武蔵野のペンテコステを想ひつつ時空を越えて祈りてありし

○栄光のみ霊臨みて武蔵野のペンテコステにめぐみ満ちけん

○贖罪の十字架の主に身をまかせ聖霊のバプテスマ受くるうれしさ

○使徒たちのみ霊の道は杜絶えたり草を分けつつ路を開かん

○わが涙神のみぞ知る思ひやり深きみ胸に祈り入りて泣く

○半世紀経ちにけるかも「愛ちゃん」のみまかりし日よ星夜に祈る

(高師附属小学二年生のとき地を去りし妹愛子の日、六月五日に)

○愛こそはいのちのいのち我れはただ愛のいのちを願たんと念ふ

○愛は勝つ愛のみぞ勝つ我はただ曠野に愛の花を咲かせむ

○いつにても祈り心に帰り伏し主を念ずれば路の開かる

○主にありて愛する友らよ祈りせよ祈りは胸の灯にてこそあれ

○祈らずば心曇らん祈らずばいのち濁れなん祈らでやはある

○「義」なる字は羊の我と書くなれば主命信徒を義とはいふなり

○みたまなるイエスを胸に宿さではいかでか生命の身証をなし得ん

○この身には仔細はあらずあるがまま往かざるを得ず無碍の一路を

○言とはいかなるものと厳密に限定めんとする「神学」やあはれ

○「神学」は細筆をもて緻密なる画を描くに似たり生命通はず

○血の通ふ神学ぞ在るいつの日かわれ書きて見ん太き筆にて

○「無教会神学論」はその緒なり我には教会・無教会も無し

○キリストの使徒らの次元に突き進み聖霊の神学を告白すべし

○使徒的な霊信失せたる教界なればわれは祈身、証身たらむ

○驚けり千数百の会衆は早くも堂に時刻を待ち居り

(一九六一・六・一八ミカエリス教会に於けるティリッケ教授の日曜講演)

○壇上の月の輪と縋衣のティリッケ教授の姿ものめづらしや

○渾身の力と智慧を濺ぎ出だし聖言を説く相貌勇まし

○ルターの「良心宗教」をうけ継ぎて頻りに「決意」を説きてありけり

○パウロなりパウロの霊信いづくにかあるパウロを相手にわれは往くなり

○カイザルの貨幣は彼に返しつつ神のものなるこの身は神に

○ミリエルの僧の心に通ひ来てわが胸かろし神の有なり

○我れを無み現し世を無みひたぶるに祈りぬく身に靈泉の湧く

○われはただ主のふところに眠るなり目さむる朝けの力うれしき

○終末の愛に生きてぞ貫かん生涯一つの旅の果てまで

○わが心今や決せり情熱を傾け尽くして大詩ものせん

○天来のみ靈よわれを貫きて一大叙事詩を世に投ぜしめよ

(一九六一年六月二十五日)

○さるにても準備は永しカイロスの迫るときまで筆は執らざり

○マタイなる福音の書読み貫けば主と一つなりみ霊の現実

○夕暮れて集ひ来れる学徒らに「わが福音」の粹を聴かせぬ

○靈風を腹に孕みて語りける「わが福音」に驚きあへり

○証言語るまにまに形式の礼拝に飽きたる顔綻びぬ

○カトリック、プロテスタントのわかなきわが証言に胸うたれしか

○観念か御利益の信かパリサイか靈徴か否主に在らんのみ

○「われに居れさらば祈りは成るべし」とげにありがたし心安けし

○沈黙の雄叫びをあげて聖名をよび主の聖力に満つる歓び

○小夜更けて冥目しつつはるかなる友ら慕ひて祈るひと時

○船ならば羅針盤なり飛行機のリーダーなるぞ人間の祈りは

○夏学期終るや否や学生と白帆にかけて乗り出でにけり

○夏雲に映えて美はし湖のヨットの帆影夢の如くに

○湖面をかすむる疾風を帆に孕み飛沫あげつつ波わけてゆく

○ゆくりなく友の来りて自動車馳せエルベ河畔の眺望たのしむ

○デンマーク、ドイツは北部、オランダの連なるあたりは果てなき原野

○「な懼れそ我は汝と共に在り」会唱の奥に聖声の聞こゆ

(ニコライ聖歌隊合唱、イザヤ四一・一〇、四三・一)

○いやはてに耳朵をうちたるみ言にわれ抱かれぬ「汝れはわが有」

○降りしきる夜更けの路をすべを無み帰り来たればぬれ鼠なり

○七夕の夕なりけり四人にてヘルマン夫妻を訪ひけるは

○七夕の夜路を独り辿りつつ棚機つ女をじつと仰ぎし

○ドイツには美人居らずと誰の言ふやよたまさかに生きヴェヌス居り

○五匹の犬を両手にあやつりて街道ゆく翁の影おもしろや

○ゆくりなく紅燈の巷に出でし夜に遊女と語りし主をば想へり

○あさまだき夢路往きつつ若人に終末論を説き証^{あか}したり

○湖^{うみ}ぞひの芝生の上の鴨の仔ら親に追はれて跳び込みにけり

○教会の聖餐式にある朝けつらなりたりき心ひらきて

○照りつくる初夏^び日和^ひめづらしやエルベ河畔に天幕の村

○初夏の光を浴びて砂浜に横たふ人魚の水衣のすがた

○あどけなし汀に遊ぶ子供らの裸^{はだか}体のすがたはパラダイス

○大いなる汽船の上り下りするエルベの流れにじっと見入りし

○帆船も汽船のかげを滑りゆくエルベの船路賑はしきかな

○鉄骨のドックの姿いかめしきドイツの玄関ハンプルク港

○夕映の原野に群れて三葉喰む羊群を守る牧人の影

○野の草を喰みてありけん仔鹿二頭人聲を聞きて林にかくる

○紫の匂ふエーリカの咲く曠野^{ハイデ}野趣ゆたかなり立ち去り難し

○建築の大設計に余念なくたのしみいそしむシュタイン技師かな

○一流の建築技師にふさはしき設計室に感服しけり

○ミヒャエリス教会塔の上に立ち霧雨^{きり}煙る港市を眺む

○天つ風吹きくるなべに魂^{たまは}極る^{いのち}靈生の曲調^{くるべ}を伝へしパッハ

○年若きヴィオリニストのブランデイスその精魂を傾けて弾く

○散るよ散る山毛櫸^{もみぢ}の葉衣^{はのえ}綻びてさらさらひらひら秋の風情よ

○たらちねの母は在まさず異国にて「母の日」迎へて昔偲^{おもひ}ばゆ

(母は米壽を迎へてのち一九五七・一・一九に召天)

○母上のみまかりてより五星霜この日迎へて独り涙す

(一九六二年一月二十九日)

○人の世の無常にうたた思ひ侘^わぶ帰り来らぬ過ぎし現実^{げんじつ}よ

○母上の形見はいづこにとどむらんわが胸中^{みみちう}なる「精神一到!」

○失明の後半生を偲^{おもひ}ぶれば断腸の念また新たなり

○ほかほかと冬の陽ざしのやわらかき障子のかげに永眠り給ひき

○あたたかく光耀かがやふ日なりけり母の告別わかれを営みし日は

(一九五七年一月二日を偲びて)

○母上よ御照覧あれ母上よ我必ずや御恩に応へん

(以上八首母の命日に異国にて五年前の母の召天を偲びて)

○父上よ想ひ出はげに乏しかれど父の情感わが衷に生く

○父母ちちははと兄姉妹あにあねいしとは彼岸なり此岸に遯るは風雲の二龍

○血をわかつ兄弟姉妹はちちあにの恩愛忘れでやはある恵まれし我れ

○相共に遯れる次兄あにの恩義にも応へてやはある使命ある我

○キリストのみ言み業いづれにも燃えて尽きざるはみ霊の生命

○わが胸に燃ゆるみ霊のこの炎暴風吹くとも消ゆることなし

○み霊なる主はこの胸に在ますなりいかでか道を伝へてやはある

○節分に「汝は我に従ひてわが群を牧へ」主は宣たまへり

○日の本の精神の歴史の此の危機を突破せよと主は宣たまひぬ

(一九六二・二・七誕生日ハンブルクにて)

○かがなべて五十と八つの生誕をここに迎へて大望の湧く

○わが神よなほ藉し給へ三十年を三つの使命貫徹すべし

○伝道と神学論文、大詩篇三相一如のわが使命なり



峠の眺め：水天一如
著 者
(召団讃歌A1参照)

西独周遊旅行にて

自 一九六一年八月七日
至 一九六一年八月二十六日

○旅人のわびしき胸をやはらしリューネブルクのエーリカの波

○広場には泉ありけりその中におとぎの国の乙女見出でつ

○なつかしや「ハルツ紀行」^{ライゼ}に読みたりし月沈原^{グッテンゲン}をそぞろあるきぬ

○河沿ひに弧を描きゆく列車よりあかず眺めし変転の景

○学問の歴史を誇る市々にドイツの好さ^よをしみじみと知る



ERIKA（エーリカまたはエリーカ）の原にて
著 者

○聖餐をル・ツの二人の諍ひし城の室にて吐息つきたり

——マールブルクの城中のルター・ツヴィングリの聖餐論評

○その昔水戸高校に学びてし「ウェルテル」の里を車窓[＊]べに想ふ

○カンパニアの廃墟に憩ふゲーテなりゲーテに憩ひて去りがてなりし

——フランクフルト美術館にて

○万象をじっと見詰めて本質をつかみしゲーテの眼差[＊]に見入る

○オランダの巨匠の描きしサムソンの劇的捕縛に息をこらしぬ

○若人の教会連合の集りに証しの言ぶちまけたりき

○半円に夏草をいだく城壁の中に苔むす望樓のあり

○城址は包字形なり城樓と望樓一つ夏草の中

○城山の横穴深くまさぐれば城の真下の真洞の泉

○美しき自然の中にも攻防の城跡はあり嗚呼人の世や

○名にし負ふ城の地下なるあなぐらの大酒樽に瞠目しけり

○青春の日より久しくあこがれしハイデルベルク夕景かなし

○羊腸たるネッカー沿ひの街道を上り上りてウィンペンに着く

○僧院の小暗き土間に佇めば修道の壁神さびてあり

○僧院の中を巡ればいにしへの修道の靈気ひたひたと寄す

○獄中に靈想しつつ筆を執るパウロの背びらに靈光のさす

——シュツットガルトの美術館にて

○信仰の使徒の徴の靈刀は生靈の如く並びて立てり

○南独の人情あつきもてなしに一夜の眠り安けかりしも

○貧しかるシラーの生家のゆかしさよ自由の灯火ここに点火れり

○ドナウ河畔世界最高の塔そびゆノイウルムなる大聖堂の

○その年齢八十路を越ゆる師の君が杖を曳きつつ出迎へ給ふ

——日本学の泰斗ウィルヘルム・グンデルト博士

○主の中に生くる現実の乏しかるキリスト界を師も嘆きたり

○食前の祈りの言は慕はしきテルシュテーゲンの讃歌なりけり

○ひたぶるに『碧巖録』に明け暮るる師の訳業のすがた貴し

○『碧巖録』第一巻と『讚美歌集』記念に賜ふ感涙のわれ

○師の君と語り交せばはてしなし三十路あまりの語り草なれば

○駅頭に帽子振り振りいつまでも見送り給ふ「再アウフ・ウィーゲー・ゼンた会ふ日まで」

○この別れ再た会ふ日までは彼岸まで延期されたり噫人生！

○東西に遠く伸びゆく湖の真ただ中を中字に横ぎる

○西陽さすボーデン湖^{ゼー}を横^よぎりて往^ゆく船^{ふね}舷^{へり}に鷗^う飛^とび交^まふ

○少年をいたはる姿の銅像は愛の権化のベスタロッチぞ

○清^きらけき自然の胸に育^{そだ}ちたる賢者の心は神に通^とへり

○ブルンナー博士の書齋に招かれてヴァイマル版の「ルター」に会^あふ

○「アルプスの乙女」にゆかり浅^あからぬ湖畔に詩情を味^{あじ}はひてけり

○スピリーがしばし住^すまひし湖市なればなつかしみつつ橋^{はし}を渡^{わた}れり

○湖^{うみ}沿^えひの町々の灯に人の世の有情しのびし船路^{せんろ}かなしも

—— スイスのヒルテューのこと

○雷鳴は山に湖面に飢^{くだま}して白雨^{しらさめ}走る湖^{うみ}の上かな

— 正にウィルム・ヘルム・テルの序曲の如し

○日本とは勝手^{こと}異なる発車ゆえふとまちがへし汽車はベルンへ！

○溪川のせせらぐ谷間をのぼりつつ水郡線の眺め偲^{おも}ひし

○ヴェンゲンの崖ゆ東西眺むれば雲払ひたりメンヒの高峯^{たかね}

○憧^{もよお}れし乙女^{ユングフラウ}山は白雲の衣^{きぬ}をかい巻き垣間見えしも

○山かげを流るる川は音^{おと}を無み夕映雲の色に溶けたり

○ヴェンゲンもルツェルンにも宿はなく辿りつきしはメンツインゲン

○料亭の扉を叩き入りぬれば今^{いま}し酣^{たけなわ}ビールの円陣

○夜更けて突然訪ねし旅人は「オー・ヤバナー」と迎へられたり

——「ヤバナー」とは日本人のこと

○子の刻に夜食をとればこは如何ブルドッグ侍りて咽喉を鳴らす

○ラテン語の古書の宝庫と謂はん哉ザンクトガレンの図書館

○キリストの四本柱なり集ひ立つ使徒の面目げに躍如たり

——ピナコテーク美術館のデューラーの四使徒

○祭壇を縁の下より双肩に荷ふ巨匠の不動の自像

○美しき森にそびえて今もなほ昔を語るコーブルク城

○朝毎に三時間ほど祈りして「詩篇」と「預言者」訳せし城ぞ

——ルターはこの城で旧約の翻訳をつづけていた

○ゆくりなく森に出遇ひし二少年慕ひまとひて遂に駅まで

○鳥籠や時計や蝦夷を相手どり独り演ずる劇を見てけり

——ドイツ最小の門塔劇場にて女優アントニア・シュタインの独り芝居

○きよらけき愛のこぼるる眸にて祈るマリアの木彫かぐはし

——ヘルゴッツキルへのリーメンシュナイダーの傑作

○中世の相さながらとどめてぞ旅人を呼ぶローテンブルク

○くさぐさの伝説をもつ兩岸の城址さびたりラインの流れ

○若き日のあこがれなりしローレライを目のあたり見るこの船路かな

○屋根裏の小部屋に生れし楽聖のつらだましひをじつと偲びき

——ボンのベーターヴェン・ハウスにて

○岩山のドライブたのしその心優しき二人の婦人と共に

○岩山の上に昼餉のひと時を味はひながらラインを眺む

——ベーター・ベルクにて

○来て見れば聞きしに優り巨大なりケルンのドーム天そそり立つ

○天を指すケルン・ドームの相こそ今世紀への警告なれや

○旅の果てにエルベの上を渡りつつ夕陽に語る旅情果てなし

歸路点描（和歌）

自 一九六二年三月十六日
至 一九六二年四月十九日

飛雁

コペンハーゲン

○勤務終へ今日は父の日に飛び立てりああハンブルク、アルスター湖よ

——一年間のハンブルク大学での日本学講義を終えて

○パウルのロッテ小母さんありがたう一年のお世話忘れませんよ

○人魚姫お伽の波間の岩の上恋の王子はアンデルセン！

○日航の人魚の如き社員らと旅は道伴れクロンボーへ

ハムレット伝説のクロンボー城へ

○キリストと十二使徒らの立像はトルワルゼンの傑作と見し

○ヴィーナスと三人の女神美しや愛の薫の漂ふすがた

オランダ

○オランダは風車ふうしゃの国よその中に入りて見れば木の齒車よ

○人々のあるがままなるすがたをば描えがきて妙へなりレンブラント

○民衆に道を説く主のみすがたに漂ふ光画面より出づ

○明闇のコントラストの現実を神秘に描く巨匠なる哉

○日曜日晴すがたの乙女らとスナップ撮れり旅のなぐさみ

○外海を限りて走る長堤の真中に立てば夕景の中

○北海に沈みゆく陽を眺めつつ日本海の夕陽偲べり

ロンドン

○漱石の「ロンドン塔」を偲びつつ忍び歩きし亡霊の廓

○名にし負ふウェストミンスターに踏み入れば星と輝く魂の殿なり

○宮殿の衛兵交替その影はお伽の国の兵隊さんか

○ブリテンの博物館の古文書のシナイ写本に魅せられし哉

パリー

○エトアール凱旋門はナポレオンの象徴なるか歴史は語る

○歓楽の夜のパリーを経めぐればムーラン・ルージュの翼もめぐれり

○ルーヴルの博物館は美の国よわが眼も心もただ魅せられぬ

ウィーン

○音楽の都ウィーンに来て見れば自然も人も春景色かな

○名にし負ふブルク・テアートル訪へば舞台も棧敷も美人ばかりぞ

○「美泉」てふ名をもつ城を訪ぬればパラダイスかとあやしむばかり

○ シューベルト、ベートーヴェンとモーツァルト彼らの遺跡に魂奪はれぬ

ツューリヒ

○ すぐる夏見物したるスイスなればツューリヒ湖畔をそぞろ歩けり

ローマ

○ 空路にて首都より首都へ渡り来て今日は七度目ローマに降りぬ

○ 古都ローマ名所旧跡数あれど圧倒されしはミケランジェロぞ

○ 天井画、最後の審判のカペラにて魂も身体も吸ひつけられぬ

(カペラ・システイーナの中にて)

○カタコンベ迷宮の如き地下道の洞に消えせぬ信徒の生涯

○地上にて迫害したる権力者今は地獄の洞の鉄鎖に

ナポリ

○機上よりナポリ・ヴェスヴィオ瞰下せば靴のイタリヤ地図さながらに

ギリシャ

○紺碧のエーゲ海の上を飛び残照美しきアテネに着けり

○ヴィーナスの末裔かとも思ふ美女の影ギリシャ神話を現となせり

○碧空に神然と立つパルテノン、ギリシャ文化の象徴と見る

○半島の南の岬スニオンの夕焼けの眺め絶景なりし

○「神の中に生き動きたる在るなり」のアレオバゴスに我れは立ちたり

(使徒行伝一七・二八参照)

○コリントの伝道の遺跡に佇みて大使徒パウロの心偲びぬ

イスラエル

○キリストが乾坤兩断の祈りせし橄欖山をまなかひに見る

○キリストが十字架されしゴルゴタを指呼の間にじっと見つめて

○キリストの本願を胆に受けまつりみ霊の力現身に満つ

○ガリラヤの湖に孤舟を乗り出し昔を今の波にささやく

○ガリラヤの湖心に舟の舟板を枕して見れば月天心にあり

○そのかみのペテロもかくやと思はるる漁夫のありけり網を繕ふ

○キリストが大告白をし給ひし丘にのぼりて草に端坐す

○み声あり「魂食しかれわが僕われは親しく汝がうちに在り」

香港

○一月の帰路の旅路のいやはてに香港に寄り友に迎へらる

○浦島の太郎にあらねど海の幸ゆたけき夕餉に飲を交はせり

（一九六二年四月）

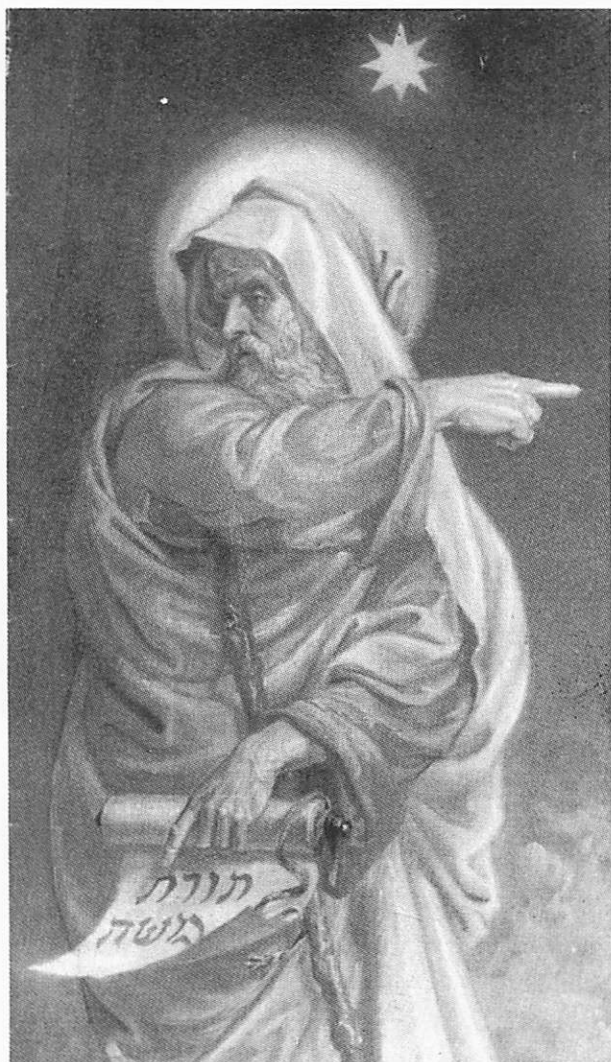
羽田空港

○新鋭のルフト・ハンザにうち乗りて最後のコースを快翔したり

○たそがれて羽田空港に降り立てば無量の感謝全身に満つ

(一九六二年四月十九日夕暮)

二
警
世
詩
集



「我らを創造せし神は同一なるに非ずや（マラキ書二、一〇）」

新日本国民に寄す

——一九五三年六月九日

——「ああ玉杯」の歌詞にて——

一 秋津島根の民草よ、

能力を現はす期は来ぬ。

思想百鍊、社会も個人も

文明文化の創造の

生業多に産み成さん。

祖国の前途に栄光あれ！

二 大和島根の国民よ、

愛を生くべき期は来ぬ。

噴煙絶えせぬ火山国、

愛の靈火を明々と

万民の胸に点さん。

祖国と世界に歓喜あれ！

三 絶対界の神仏の

天啓具現の期は来ぬ

天賦豊けき国民よ、

おのが天職生きぬけよ。

自由独立、融合の

大和の道に救済あり。

パリサイ精神と戦う

彼岸

——一九五一年十月二十六日

二十世紀は神を無視する。

サタンに奔弄されてもわからない。

罪と死と地獄とサタンから、

ローマの「バビロン捕囚」から、

十六世紀を解放し

神の自由の世界へと

道を拓いたルツターよ！

汝の勝ち得たキリストの自由は

はやくも罪びとの自主の自由に

墮してしまった、禍なる哉！

十字架のあがないに感泣し、

キリストの生命に歓喜し、

聖霊のみなぎりに躍動しつつ

時のパリサイ精神と烈しく戦い

ウォルムス議場でNEIN！と雄叫びせし

わが自由の戦士ルツターよ！

天上にて祈れかし。

我らの主イエス・キリストの敵

「偽善なる学者パリサイ人」は

預言者の昔からこの末の世に至るまで

神の国の躓きものぞ！

観念信仰に枯死せんとするエクレシヤを

「恩恵」の光で復活せしめんと

神は今愛憐あはれみを起し給う。

聖靈の此の啓示に従って

我ら小さき群の動けば、

パリサイ的な人々はみな

我らを「異端」として斥ける。

聖名のためかく謗られることが

預言者・使徒らの靈統ならば

我ら何をか憂えよう。

パリサイ精神の諸々の敵に向って

かのステパノは叫んでいった、

「汝らはつねに聖靈に逆ろう」と。

この殉教の先駆者の死を目撃した

パリサイ人サウロが、「復活の主」の

聖光に打たれてパリサイに死し、

福音の使徒となつた

あの鮮かな事実こそ、

我らがパリサイ精神と戦つて

ステパノの祈りと共に
敵を救はん悲願がやどる。

靈燈萬里

——一九五三年九月一日、関東大震災三十周年の夜作

「こはわが愛しむ子なり、我これを悦ぶ」
汝らこの目を暗き処に輝く燈火として夜明け、
明星の汝らの心の中にいづるまで願みは善し。

(第二ペテロー・一九)

相模灘地震に逆捲けば、
東の都は紅炎うづまき、
焦熱地獄たちまち現じ、
ものみなは焼けただれたり。
噫、そのかみを願ひみて

わが衷に痛みはうづく、
犠牲となりし同胞のゆえ。
時は移りて東亜の空に
咆え猛けりける戦乱の嵐に、
大八洲の花綵は散りて、

秋津島紅に染まりぬ。

近くはまた幾度びとなく

襲ひ来たれる風伯雨師に、

山つなみ大地を襲へば

市邑も田畠も潰えゆきたり。

水と火と血のバプテスマ、

震はれたるかな神州日本。

噫、三十年の没落の跡。

背後に働く聖手の動きに

わが魂はただ塵に額伏す

腸の祈りささげて。

わが愛よ、秋津島根よ！

アメリカの鷲の翼も、

シベリアの熊の力も、

信頼にも疑懼にも働せず、

禍害は汝が腹中にこそ在れ。

われらの志操はゆらめく葦か、

われらの思想はただよふ雲か。

北に飛び、東になびく

頼みなき民の心や。

バチンコの球丸のひびきの

鳴りやまぬ奇怪の国よ。

華ネオン灯かげあやしき

淫楽の虚栄の市巷よ。

青年の魂は眠りて、

理智のみぞ目さとく動く。

乙女子の優情は荒れて、

ゆかしかる芳香失せたり。

人の世の道徳は地に落ち、

政治に合理乏しく、

学問の權威かよはく、

世の闇は陰を増しゆく。

感覚えずや、大和の民よ、

島根貫く火の動脈を、

胸に通ふ大地の情熱を！

我らは情愛深き民、

火山国大和島根の。

人よ知らずや、肉体を照らす

日輪の光熱なくば

万象自然の生なき如く、

靈魂のいのちは靈界の

神の光に浴するなくば

永遠のいのち欠くるを。

靈光に輝くイエスは

聖靈の愛の燈火を

罪びとの胸にともさんと

地に在りし時叫びて曰く、

「火をわれは、げにわれ火を

投ぜんために来たりしぞ。

此の火全く燃えたらんには

また何をか望まん。

されどわれには受くべきの

バプテスマあり。

これを成し遂ぐるまで、

思ひ迫ること如何ばかりぞや！」

十字架の贖罪なくば

靈火を完全く与ふるに

よしなき旨を示したり。

その靈愛を胸に秘めつつ、

十字架に彼は懸りて、

贖罪の血潮を尽くし、

死に勝ちて墓を蹴破る！

霊体新たに光り輝き、

霊界のみ空に昇り

神の聖座^{みざ}近く侍りて、

今こそ彼処^{かしこ}王座に坐^います。

オリヴの接木^{つぎぎ}の臂を

かの使徒の語りし如く、

情愛の民よ、今こそ

われら自ら盃となり

キリストの靈血を飲み、

われら自ら皿となり

キリストの靈肉を喰はん。

かくて生來の愛を淨化し

天來の愛に生くべき

期^きは今なり！

眠りより醒むべきの時、

恩恵の今をはづさば、

悔いの涙は地獄も受けじ。

キリストの贖罪^{あがなひ}を受け、

キリストの聖靈^{みたま}を浴びて

パウロの如く転倒すれば、

驚くばかりの生命漲り、

胸三寸の衷^{うち}なる世界に

コペルニクスの逆転起り

主の聖靈^{みたま}に權威は置かれ、

聖意^{みじめ}にありて自由は臨み、

聖愛を受けて歓喜はあふれ、

主への愛の火柱は立ち、

愛はここに転向し、

愛はここに変質し、

愛はここに変貌す。

讀むべき哉、聖靈の愛、

わが一切の動力源！

武器を棄て狡智を去りて、
鍬を執り、鎚をかざして
いそしまん平和のわざに。

憎しみの暗黒の世界に

明々と愛しみの灯を

点しつゝ懼れを知らず、

進み往け、胸うち開き！

三界を経めぐりし詩人が、

「聖霊の歓喜にのみ焰を挙ぐる

われらの情愛は、神の秩序により

形どらるるままに悦ぶ」

とうたひし如くに、み霊の子らよ、

その器と霊賜にしたがひ

おのがじし業をいとなみ、

村より村へ、里より里へ、

福音の灯を運び往け！

天来の愛の炬火

不滅なり、時世の風に。

日の本の民の活路は

瞭かにこの一途なり。

キリストの霊生一路！

キリストの霊燈万里！

霊生を此処に証し、

霊燈を彼処に掲げ、

野路往かば草に枕し、

山路辿らば岩根を枕。

伝燈の悲願絶えせず、

伝道の靈願尽きせじ、

聖霊の幕屋張りつつ。

旅人よ！

岐路に掲ぐるこの祈り、

心に留めよ。

君が胸中に火とならん、

歡喜の花と咲かなん、

永遠の生命とならん。

君が口より讃歌は躍らん。

旅人よ！

岐路に掲ぐるこの詩を

君若し拒みたまひなば、

路傍の石は叫ばん、

空をゆく鶴は鳴くらん。

幾千歳青史の絵巻を

映してし琵琶の月影。

叡山に法燈の燃えてより

仏教の伝統は久しけれど、

かの高僧どもの達したる

靈的次元今何処ぞや。

湖畔に学燈を点しける

近江の聖人は慕はしけれど、

儒教の世界にいのち欠けたり。

全日本、道は乱れぬ。

唯だ一角、天開けたり。

「われは道なり、真理なり、生命なり。」

かく告げたまふ主の道に

躍り入れ、ためらはず大胆に！

キリストの使徒らの道に。

主の道を備へせし預言者の野に。

噫、キリストの原始福音！

慕はしき原始の生命！

不滅なる永遠の真理！

「わが言は靈なり生命なり。」

然り、主よ、聖書一卷、

身読以て我らは生きん。

「神の国は力なり」、

彼の使徒の言や真なり。

受靈せよキリスト教界！

脚踏するは聖意に非ず。

墨守するは道にあらず。

青年よ！ 今こそ醒めて、

身に受けよ、

聖靈のバプテスマ！

進み往け！

キリストに在りて。

かの使徒の叫びし如く

歓呼して我ら進まん、

キリストの愛の生命に、

身を挺し幕屋を張りて

愛の灯を

地の極までも点さん。

いざ兄弟姉妹よ、

愛のいのちを

世の末かけて祈らなん。

み靈の子らよ！

生命を賭けてみ靈に生きよ！

キリストの勝戦なり。

聖意よ、此の土器に成りたまへ。

終末の希望さやかに

現実の愛の灯に映え、

栄光の聖國輝ふ。

曠^{あら}野^の魂^{だましひ}

——一九五三年十一月十八日

顔に泪のあとが絶えない。

でもこの熱き滴りを、

ホセアよ、エレミヤよ、

汝らは流したのだ。

私のなぐさめはそこに在る。

胸に炎が燃えている。

まことにこのきらめきは、

エリヤよ、アモスよ、

汝らに烈しく燃えていた。

それが私のはげましである。

魂の奥に光がさしている。

聖なる熱き光である。

イザヤよ、汝はこの光の神に

あがなはれて雄々しく立つた。

ここにこそ私のいのちがある。

聖^{みたま}霊に在つて祈りつつ、

聖^{みことば}言を受けて語りつつ、

聖意^{みこころ}を体して行じつつ、

まことの実存を貫いた

曠^{あら}野^{のだましひ}魂の慕はしき哉！

預言者の祈は今も

天地に深く反響^{こだま}する。

カルメルに現ぜし神の力よ、

ペテルを振はせし神の義よ、

エフライムを抱きし神の愛よ、
ユダに泌みわたれる神の心よ、
シオンを照らせし神の靈よ！

この国の野に山に町に臨みて、

汝の僕らを強く捕へて、

汝の婢らを深く抱きて、

歴史の実存を体現せしめ、

幕屋的展開を進めしめたまへ！

教育の危機

——一九六九年晩秋

第二次大戦、敗戦日本！

日本は米蘇にうちのめされた。

無条件降伏！

何者に対してだったか。

米蘇にか。然り、然らず。

本当は——神の御前に。

この自覚と回心と覚醒が

本当であつたならば、

復興日本は地味な

素晴らしい内実をもつた

日本となつたはずである。

しかし神を畏れずして

復興を始めた大欠陥が

四半世紀後の今日歴然！

自己中心の自由主義、

悪平等の民主主義。

都会中心の復興日本、

物価騰貴の繁栄日本。

自由とは、

靈法道義に即しつつ、

責任と使命を自覚するところ、

そこに伸びゆく生命の態！

民主とは、

信愛を血となし肉となし、

信義を骨髓となすところ、
そこに栄える協同の相！

日本人よ！

大空を仰ぎ見ないか。

あの赫々たる太陽は

われらが国旗の実体ではないか。

地上の万物を生かしている。

あの光源体は何のしるしか。

暗黒を照破する義の光、

冷酷を除去する愛の光、

創造してやまぬ生命の光。

義と愛と生命の象徴！

日本が世界に貢献すべき

その徴を国旗は語る。

さらば我ら自らが

国旗の具現体となることか

おのづから世界を愛する
大らかな道ではないか。

日本人よ！

霊界の絶対者を仰ぎ見よ。

キリストが「父」と呼んだ絶対者。

神か、如来か。無量の名！

その絶対者を畏敬する、

この一事を拒むならば、

いかなる結果を招来するか、

それは自ら味はい知ろう。

私は信ずる、

文化の根底は宗教である。

私は信ずる、

万人は本来宗教人である。

たましいのない人があるか。

たましいは宗教界のものである。

人よ、目醒めよ！

畏るべき者を畏れよ。

一切はここから始まる。

まちがった自由主義を、

紛^がいの民主主義を、

お題目として旗印として、

戦後の教育は進められた。

その揚句、

そこに畏敬の念は失せ、

信愛の情は消え去り、

師弟の道は地に堕ちた。

そこに蔓延跋扈したのは、

自己主張と闘争意識。

家庭では親が子を憚り、

学校では先生の威信うすらぐ。

何たる秩序の乱れぞや。

何たる自信の喪失か。

学校制度はむしろ改悪。

新制大学矢鱈に続出。

人口世界無比の都に

蜚集するは受験の大群。

徒らに大学出身を嘉しとする

社会と家庭の判断の

この大錯誤をあらためよ！

個人には天賦の資質才能がある。

天賦あるところに天職がある。

人よ、若き人々よ、

おのが資質にふさわしき

職業を選んで打ち込めよ。

そこに生き甲斐と栄光がある。

これをしも深く自覚し、

おのが天賦を中心に

学業や技芸にいそしみ、

実力を地みちに鍛え、

欣然として天職に生きよ！

さらば苦難の中にも歓喜あり。

失敗も挫折も希望の拍車。

悲嘆に遭うとも耐え抜こう。

もろもろの艱難を突破して

人生の目的を貫徹し、

おのづから社会に対し、

不可欠の貢献を果し得よう。

花も百花繚乱、多種多彩。

そこに大自然の調和ある如く、

人も天賦即天職、千態万様、

そこにこそ有機体的社会が成るのだ。

このような人間の本質と使命に

応ずべく今こそ国家は、

その教育機関に、学校制度に、

はたまた施設にカリキュラムに、

新たに哲学的見地から

大改革をなすべきの期！

そして何より肝腎な焦点は、

教育者自らが

神霊の世界と交りをなし、

神霊の止どまる霊止ひとという

人間の原点にこそ

立ち帰らんことである。

煙草一本の吸殻も

大火の火種となるように、

大学の一角に発火した問題が

狼火となって、

紛争は複雑怪奇な様相を

次から次へと惹き起こし、

学問の府、理性の所在たる

大学に暴力横行！

暴力は談議を窒息せしめ、

ルールを無視して「大衆団交」。

教育陣は疲労困憊、倒れゆく。

おぞましきこの現象は、

伝染病か、燎原の火か。

たちまち拡まり、

南は九州、北は北海道、

日本全土にはびこった。

無責任極まる破壊行為が

「自治」や「自由」に名を借りて

荒れ狂うとは何ごとか。

暴力的政治活動が、

学生の暴力のみならず、

教員の策謀も加わって、

みにくい交錯を成し、

白昼行なわれゆく。

教授会の権威は失墜し、

一般学生に学問を守らんとする

意志的団結の力なし。

今や良心も理性も沈黙し、

道義的憤怒も起こらず、

ゲバ学生の天下の如し。

物狂おしい赤字立看板の乱立。

ヘルメット、ゲバ棒の専横。

男女デモ隊に「外人部隊」、

火災ビンの鬼火の乱舞。

バリ、スト、大学封鎖。

警察機動隊の導入あれば、

一般学生に動揺の波。

ロック・アウト、休校。

ああ荒れ果てたり大学界。

大学の面目今いづこ。

大学は牢獄の如く、屍の如し。

大学はここに喪失。

日本の精神的頹落の徴！

そもそも学内に

ゲバ棒、ヘルメットとは何ごとか。

暴力行為を徹底的に排除するのが

法治国家の責務でないか。

何たる政治力の無気力さか。

小学校から大学に至るまで、

教育の未来いづこにあらう。

教育の希望を何にかけよう。

現体制も反体制も

右翼も左翼も中間も

教育の根源に触れ得ない。

教育は政治に左右されてはならない。

教育は文化活動の主体たる

人間そのものの形成にあづかる

根本使命のいとなみである。

それゆえ教育の根底には

高次な宗教性を必要とする。

然らば教育の主体たる

教育者自身が、例えば、

或は曠野に出でて瞑想し、

或は深山にわけ入って祈願し、

霊的革命をおのが心魂に

自ら起こすに非ずんば、

この教育の逸脱と喪失を、

正道と回生に齎らし、

この教育の危機を

救済する道はなからう。

願みよ、曠野の宗教！

アジア、アフリカ、ヨーロッパの

枢要の地ユダヤの曠野に

啓示された偉大な宗教！

神命にこれ従って家郷をあとに、

出いっウルを敢行、往く手を知らに、

信従一貫これ人生なりと

身証した信仰の祖アブラハム。

旅寝の石枕に夢を授かり、

人生到るところ天門開くと

啓示を受けた旅人ヤコブ、

帰路にはヤボクの渡し場で

夜をこめて神の使と角力をとれば、

髀の枢骨はづされながらしがみつぎ、

「汝われを祝せずば去らしめじ」と。

切願聴かれて「イスラエル」と改名された。

その名のこころは「神戦い給う」！

はらからに棄てられ、神に拾われ、

父祖の靈統を守ったヨセフ。

ホレブの山で靈火に出遭い、

「我は在りて在らしむる者」と

名乗り給うた神を発見！

その牧人は預言者モーセ。

神ヤハウェーの御力により、

虐げられたヨセフの族を

エジプトから脱出せしめて、

シナイの山で靈雲の中、

千古不滅の「十言」を賜る。

縦の倫理たる宗教と

横の倫理たる道徳が、

十言にこもる十字の構造！

「汝は殺人せじ」と信じ給う

神の信に應える信愛！

そこに人倫の基礎がある。

そこに福音が隠されていた。

パールの預言者らと靈闘をなし、

ヤハウエーの靈火に應えられた

白熱の祈りの預言者エリヤ。

その靈統を受け継いだ

カリスマ的預言者エリシヤ。

神の義を叫び抜いたアモス。

神の愛を生き抜いたホセア。

神と共に歩き貫いたミカ。

神に信頼を貫いたイザヤ。

神の心を心となした

涙の預言者エレミヤ。

枯骨の復活の靈幻に

希望をかけたエゼキエル。

世の罪を担う羔のすがたに

「神の僕」の相を見て、

雄大深刻無比の預言詩を

書き遺した無名の預言者。

期満つるまでになお五百年！

イスラエル民族は、

国破れて神殿があり、

預言者と祭司があつて、

「律法・預言者・諸書」と呼ばれる

旧約聖書一巻が

民族の燈台、魂の道標。

とき満ちて天降りし受肉した

ナザレ人、イエス・キリスト！

ヨルダンに受洗すれば、

見よ、聖霊鳩の如く降り、

聖霊のバプテスマを

決定的に受けたこの人！

聖意体現を身証し抜き、

十字架にのぼり贖罪を遂げ、

墓を蹴破り、復活し、

聖霊を約束して、昇天した

此の人こそは人間の

霊的癌疾我執の罪を

贖いとして霊生を与え得る

唯だ独りの神の人！

一九七〇年を迎えんとし、

思えば二十世紀はあと三十年。

問題の問題はたましいの問題！

終末的な危機の迫りよ。

キリストに帰れ、福音の原始に還れ！

仏陀に帰れ、仏道の根源に還れ！

神仏にたましいの平安を得ずして

平和を叫ぶとも空の空なり。

神仏にたましいの安らうところ、

そこに人間相互の信愛生じ、

隣邦相互の平和成り立ち、

大和は世界に遍く及ぼう。

教育の大願はここにこそ成れ。



天使とエリヤ（列王上一九、五、六）

本願道

—一九七〇年頭

曙よ！ 汝がバラ色の大氣に

キリストの香氣が匂う。

旭日よ！ 汝が金色の翼に

神の義が照り初めた。

彩雲よ！ 汝が妙えなる姿に

聖靈の息吹が漂う。

一九七〇年の元旦は

おごそかにかくぞ明けた。

仰ぎ見る雲外の一角を。

見よ、天裂けて靈光閃く。

轟くはいかつちか神のみ声か。

山べに、海べに働く人よ。

野らに、市井に働く人よ。

会社、官庁に勤める人よ。

私塾に、学舎に教える人よ。

週日はこれ働く相対界。

七日目ごとの日曜は

たましいのための絶対界。

例えば曠野の旅人が

オアシスに英氣を養う如く、

人々よ！ 聖典の世界に躍り入れ。

聖光、無量寿、永遠界を

たましひの現実とせんがため。

「神は死んだ」と叫んだ哲人の

逆説の言はうそかまことか。

現代人よ、実存で答えるがいい。

現実の中の現実、相対即絶対、

永遠も無限も無量も絶対も

秘められてあるを知らないか。

超在、遍在、貫在、内在の

神の妙なる実存を知れ！

山積の政治問題、

迷宮の経済活路、

混沌の社会状況、

危機をはらむ生活事情。

要求の、闘争の、

不満の、紛争の、と

ものぐるおしき現実よ。

テレビの、映画の、

パチンコの、漫画の、

週刊誌の、エロ雑誌の、

バーの、キャバレーの、

百貨店の、くるまの、と

めまぐるしき現実よ。

現実は八方塞がり。

現実は八方破れ。

人々よ、時にして文明の夢幻をのがれ、

大自然のふところにて瞑想せずや。

仰ぎ見よ、霊界の天！

見よ、天は裂けたり。

見よ、靈光は閃く。

聞け、いかづちの声を。

聞け、神のみ声を。

平伏せよ、神の聖前に！

為政者も、民衆も

今にして平伏さないなら、

今にして神を畏れないなら、

妖雲は全地を蔽い、

闇黒の翼に乗って

サタンの使者は為政者の腹に、

地を這う蛇は民衆の胸に、

詭計をかもし、謀略を囁き、

闘争は巷に、擾乱は国に、

千態万様の蠢きを示し、

おぞましき現実と化しゆこう。

嘗てイスラエル民族が

アッシリア、バビロニア、エジプトの

三大国に囲まれて

国家存亡の危機に陥ったとき、

輩出した預言者たちは、

為政者と民族の不信不倫暴虐のゆえ、

神の審判を告げ知らせ、

国民の悔改めをうながしたが、

その警告徒らに曠野に木霊し、

北イスラエル南ユダの両国は

相前後して驚と獅子の強国に

餌食の如くに蹂躪されて、

涙は涸れ果て血は大地が吸った。

アメリカ、ソ連、中国の

三大国に介在する日本人よ！

「安保」にも「安保反対」にも非ず、

第三の道が汝の道であると

啓示し給う天来の声に聴かずや。

東なるイデオロギーにも、

西なるイデオロギーにも、

夫々の意義と役割はある。

さはれイデオロギーを

固執し絶対化するところ、

そこにイデオロギーの

パリサイ性ありと知らずや。

人よ知れ、理念には限界ありと。

まことの平和の所在はいづこ。

たがいに理念を尊重しつつ、

超理念の世界を、

各国の、各社会相の、各人が、

確かと胸中に開示するところ！

そこにこそ全人類の

平和への天道が開かれてある。

超理念の世界とは何か。

神か如来か、

アラーか梵か、

天か無か。

名称はいかにもあれ、

人のたましひの志向する絶対界に

超理念の根源はある。

人間の心魂を呼ぶ本願者！

人間の実存を担う実在者！

その声を寂聴し、

その光を靈視し、

その靈源を体受せよ！

たましひはかかる本願の実在に

豁然と気がつくまでは平安がない。

この平安あつての平和、

この絶対心あつての理念。

さればこの第三の道、本願道を

為政者も民衆も身心に体得し、

人らしき人に回生し、

天来の靈に心を燃やすなら、

隣人に、隣国に、

渾き握手の手を伸ばし、

社会の中に、国際間に、

信義、信愛の実は結ぶ。

人間愛は溢れゆく！

「幾百万の人々よ、相抱けよや！

この接吻をあまねく世界に！

はらからよ、星の幕屋の彼方には

愛の御父ぞ在ますなる。」

シラー、ベートーヴェンの

第九交響曲の大悲願を

胸に確かと受け留めよ。

またヘンデルの大合唱曲の

「ハレルヤ！」をして

胸底深く響かしめよ！

嘗てヤコブの泉のほとりて

愛の靈泉をもった人に、

出会ったサマリヤの女のように、

私も叫ぶ、「来てごらん！」と。

人々よ、福音書のイエスの許に

あるがままの姿で来たれ！

「我は道なり、真理なり、生命なり」

かく告白した実存者に

体あたりして降参すれば、

キリストという十字の門が

開かれてあるを見出す。

この無門の門を透得すれば

復活の主が「よくぞ来た！」と

必ずや欣び迎える。

見よ、そこに靈光溢れ、靈氣漂う。

その靈光を浴び、靈氣を吸って、

聖靈のバプテスマにあづかれよ。

かくてキリストに全身全靈を投入すれば、

かの「正氣の歌」に謳はれた

天地正大の氣はおのづから

五臓六腑をかけめぐる。――

秀でては富士の靈峯となり、

発いては万朶の桜花となり、

凝っては百鍊の鉄となり、

注いでは大洋の水となる、――

創造の靈氣この身に通う。

この氣粹然として神州に鍾まる

日本本然の相を胸に抱かん！

一九七〇年、日本の道は

儒教仏教綾なせる

日本精神文化の旧道に

福音の靈石を新たに鋪いて

第三の大道を開拓するにある。

願みれば最澄は諸法実相を

一念三千の裡に把握した。

空海は真言の本質を

「阿字是一切法教本也」と喝破した、

その直観のあざやかさ。

源信は「往生要集」をもって

「夫れ往生極樂の教行は

濁世末代の目足なり」と指示して

救済の道を拓いた。

法然上人源空は仏法を、

「一枚起請文」に集約し、

南無阿弥陀仏の一向念仏に

魂の安住、実存の道を開示した。

親鸞は改革者ルターの

「キリスト者の自由」に優るとも

劣らぬ名篇『歎異抄』にて

哲願・名号の不思議な一如の

いみじきおとづれを道破した。

栄西禅師の「大いなるかな心や」の

大文字にはフィヒテも敵せず。

道元は「参禅身心脱落也」と断じ、

「一草一木俱身心也」と観じ、

無即万象の妙境を語った。

大洋にさし昇る朝日に合掌、

「南無妙法蓮華經」を誦した

日蓮上人。その愛国の気魄、

「日本の柱」は今もなほ立っている。

白隠禅師の身心一如は到る処

色心不離の達観に通い、

隻手の声を寂聴し、

闇の夜に鳴かぬ鳥なぐさの声を聴く。

蓮如上人は妻帯幾たび、

聖俗一如を子宝に現はした。

良寛は愛の仙人、

「慈念衆生猶如赤子」と。

ああ慕はしき霊的人物、

歴史の夜空に輝きわたる。

これら幾流の霊統を継いで

この精神的危機の日本に

霊的一大革命を起こさん者は、

福音の原体キリストの許に

帰入し帰命し、南無キリスト！

キリストと一如・一体とならん哉。」

キリストの福音、原始の福音、

使徒的信仰を体现せんとする
遣れる民、選びの器ぞ。

教会の内外を問はず、到る処に、

幕屋に、召団に、野人の中に、

隠された福音の戦士はあらん。

起てよ、福音の兄弟姉妹よ！

キリストの霊的な体、エレクトシアよ！

キリストはねんごろに

われらの心胆に呼びかけ給う。

「汝わが十字架に贖はれて、

霊貧しく、無者とされた者よ！

天国、聖霊の我れ汝の中にあり。

無者よ、無限無量を宿す者よ、

わが霊による汝、白熱の魂よ、

祈りせよ、汝が悲願霊願をもて

わが本願に祈り入れよ！

わが霊言、わが聖霊汝の中に
化体して力となり、生命となれ。

使徒らの如き聖霊の器を

我は全地の此処彼処に起こす。

み霊の群が日本全土に

霊燈をかかげて道を拓こう。

わが本願を身証せよ、汝！」

一九四〇年、武蔵野に幕屋を開いて

茲に三十周年を迎へんとする。

一九五〇年、阿蘇火山のふところ

キリストは私に聖霊の火で

バプテスマを施し給うた。

そのために私は期せずして

イズムやセクトと袂を別った。

福音の源泉に、源流に、

「使徒的信仰に立ち帰れ！」の
旗幟を掲げて二十年。

「遣れる民」の一環をなす

都の西北、武蔵野の幕屋、

キリスト召団、小さき群よ！

破れ幕屋を張りながら、

ただキリストの本願道を

今日も明日も踏み往かん！

—完—



1954年 第一回夏期福音特別集会

小諸の高原にて

著者：左から三人目



1942年 晩秋：武蔵野福音集会
著者：前列左端和服袴すがた

主の身さながら

——一九六九年 降誕節に 天 鐘

勝利の天使のガブリエル

ガリラヤの山里ナザレの

乙女マリヤに現はれていう、

「めでたし恵まれたる者よ、

主が汝とともに在ます」。

マリヤの心はいたく騒いだ。

そこでみ使は再び言った、

「マリヤよ、恐れるな。

汝は神のみ前に恵を受けた。

視よ、汝孕みて男子を生もう。

その名をイエスと名づけよ。

彼は至高者の子と称はれる。」

マリヤはあやしんで言った、

「私は未だ人を知らないのに

どうしてそんなことが！」

御使はしづかに告知した、

「聖霊が汝に臨み、

至高者の霊能が汝を被う。

汝の生む聖者は神の子である。

神の靈言に能はぬ所はない。」

マリヤは平れ伏して言った、

「視よ、私は主の婢女^{はしため}。

あなたの言の如く私に成れよ！」

主の母マリヤのこの一言！

ここに信仰の奥義がこもる。

常識を越え、おのが判断を破り、

空前の事象を即座に信受し、

聖意の体現を念願し、

身心を聖霊にゆだねた瞬間！

見よ、聖霊の種マリヤに宿り、

神の子の霊核はそこに成った。

「われはアブラハムより先に

父のみ許にあつた」と言つた

ロゴス・クリストスが今や

サルクス・クリストスとして

出現せんとするスベルマゾ！

やがて時の世界帝国ローマの

カイザル・アウグストの

詔令により戸籍登録のため、

ダビデの後裔ヨセフは

孕める許嫁マリヤを伴れて

ナザレを出てはるか南

ベツレヘムへの旅につく

このダビデの町でマリヤ月満ち、

旅舎をさがしたがどれも満員。

やむなく石室いしむろの驢馬小屋を宿とした。

そこに生あれいでた初子を

布に包んだがおくに所なく

馬槽うまなわの中に臥ふせたとはい！

キリストはかく人の世の

貧しさの中のどん底に、

枕する所なく生れ給うた。

地の第一人者アウグストの世に

天上天下唯一者たるイエスが

かく降誕したコントラストの

奇しきよ、世にはまたとなき。

奇しき星がこれを黙示し、

天使の群がこれを告知した。

寒空に野宿していた牧人を

忽然主の栄光が包み照らした。

何の光か、牧者らもうろたえた。

すると天使の力強い声、

「恐れるな、み民すべてに

今や大歓喜を福音する！

今日ダビデの町に汝らのため

救主キリストが生れ給うた！

馬槽のみどり児がその徴！」

すると天の軍勢、み使に加わり、

「いと高きところには栄光神に、

地には平和、み旨にかなう人々に！」

かく大讚美が星空に木霊した。

ヨセフとマリヤが乳児を伴れて

エルサレムにのぼる時が来た、

それは初子献身の儀のために。

聖霊に導かれてシメオンは、

神殿を訪ねてキリストを抱き、

神を讚美し、預言という、

「主よ、今こそみ言の如く、

僕を安らかに逝かしめ給へ！

わが目ははや主の救を見た。

これ万民の前に備え給うた者、

異邦人を照す光、

み民イスラエルの栄光である。」

更に両親を祝してマリヤに、

「視よ、この幼児はイスラエルの

人人の或は倒れ或は起たんため。

また言い逆らいを受ける徴ぞ！

マリヤよ剣^や汝が心を刺し貫^つこう。」

おどろくべきこの預言！

万人に死か生かを迫る

天来の靈劍と閃く。

「言い逆らいの徴」なるイエスは

その現実を十字架で示し給うた。

ああ十字架への道、

それは十字架を負う者の！

ああ慕はしき主イエスよ！

あなたを慕う者は十字架を負う。

あなたに愛される者も亦然り。

十字架を負はずして、

天国への門は通れない。

しかし恐れるな、十字架の主は

「あるがまゝわが許に来よ」と。

言下に十字架の門前に平伏せば、

主はこの身このまゝ入れ給う。

門をくぐれば、見よ、聖霊の主が

みたまを以てバプテスマし給う。

ああ聖霊のバプテスマ！

徹底的に主と共に十字架せられ

徹底的に主の聖霊を賜はる。

ここにのみ新生の体験がある。

ここにのみ一切に勝つ力がある。

誰が何と言うともこの事実を

否定することは全くできない。

聖書の言は躍動し始め、

紙背よりひびき来たるは

神の根源語の呻きと叫び！

「わが言は靈なり生命なり」の

主のみ言はそのまま誠！

聖霊聖言一如のひびき！

わが身心に貫流し、

生命と歓喜と光と愛が

ほとばしり流れてやまず。

主の身さながら現実ぞ！

このみ霊み言の現実が

十字架を負はせて下さる。

友らよ、愛する友よ！

今こそ共に十字架を負い

一九七〇年から迎へんとする

日本の危機のたゞ中を

み霊の光身におびて

人の世の闇をあからめ、

希望なき人々の胸に

天来の希望を与へ

さまよへる青年どもに

たましひの故里を示し、

たましひの突破を勧めん。

ああその昔使徒たちですら

願いたイエスの言に業に。

そは次元のちがいのために。

しかしマグダラのマリヤは、

深い罪をあつくゆるされ、

身心をかたむけつくして

イエスを慕い感謝にみちて、

ある夕、その心、

おのれ自身をうち割る如く、

石臼の壺をうち割り、

馥郁たるナルドの香油を

惜しみなくイエスに注いだ。

イエスの十字架の死を予見して

彼女はかくおのれを献げた！

ただ独り十字架されようとする

イエスにとってこの愛こそは

全世界の何ものにも変え難き

なぐさめの極みであった！

このイエスとこのマリヤ！

ロダンは大胆にも石に刻んだ、

十字架のイエスのむくろに

とりすがるマクダラのマリヤを！

然り、友よ、愛には愛で、

信には信で、本願には悲願で、

主にこたへよう死に至るまで。

徹底的に救はれたこの身ゆえ。

さらば全存在を主に献げ、

この力ある原始の福音を

身証しよう生涯いのちを賭けて。

十字架に贖いた弟子たちよりも

先づさきにマクダラのマリヤは

復活の主に出会ったではないか。

やがて使徒らに主は現はれて、

四十日み国のことを

語り終へ、約束された、

「エルサレムを離れずに、

祈りつつ父の約束を待て！

ヨハネは水でバプテスマしたが、

汝らは日ならずして

聖霊でバプテスマされる。」

弟子たちが集いおるとき、

復活の主は再び言はれた、

「聖霊汝らの上に臨むとき、

汝らは靈能を受ける。

そのときエルサレム、ユダヤ全国、

サマリヤ及び地の極にまで、

わが証者となれよ！」

然り、「わが証者となれよ！」

この主の親しきみ言の下

私はただ感泣する。

友よ！いのりの中に

深く福音書の主を冥想し、

主におのれをまともにぶつけ、

平伏して主の中に投身せよ！

主のみ言とみわざとが

主もろともに力となって、

われらの身心に化体する。

ああこの身は主の身さながら。

私は主と共に十字架された。

生きているのはもう私ではない。

主が私の中で生きています。

みたまの主が生きて在ます。

私をかくまでゆるし、愛して、

この虫けらの中核を

変質変貌せしめつつあり給う。

「わが証者となれよ」。

主よ、あなたの中に祈り入り、

あなたのみ霊を腹に宿し、

あなたの愛と光と生命に浴せん。

おのれ自身は八方破れ。

あるがままながら、あらぬがまま。

この身このまま主の身さながら

即身即主の恵みの現実。

あゝ不思議なるかこの事実！

主よ、み光の主よ！

私を貫き照り亘り給へ！

主よ、愛の主よ！

この身を愛の権化にし給へ！

主よ、いのちの主よ！

永遠の靈生を与えたまへ。

臥薪嘗胆、百寿を突破し、

全世界を震撼させる

一大詩篇をものさせたまへ！

み名のため福音のための

僕が大願を成就させ給へ！

召団の兄弟姉妹、愛する友よ！

君らの念願をみ前にそそぎ、

天賦に即した使命を見出だし、

男も女も若きも老いも、

質的な全身のうち込みを

一日一日に賭けて往け！

今日一日を真に生くるところ、

そこに勝利の人生がある。

そこに聖国の約束がある。

この世の失敗、蹉跌何がある！

この世の誤解、迫害何がある！

人の世の矛盾、不合理何がある！

いざ往かん、兄弟姉妹よ！

永遠のみ国目指して曠野の旅を！

キリストの霊生

——一九五四年復活節——

「お父様、彼らを赦してやって下さい。
何をしているのかわからないのです。」

パリサイの祭司、学者、長老と

靈盲の民衆のため、

イエスはかく祈った——底ぬけの愛。

それもあざけりで報いられつつ。

母マリヤと愛弟子を願みて、

「見よ、おまえの母だ」、「見よ、おまえの
子だ」。

信徒を想い、心のなかで

「兄弟姉妹よ、相愛せよ。」

心碎けた傍^{かた}えなる十字架の盜賊に、

「私は本当におまえに言う、
今日おまえは私と一緒に

バラダイス入りだよ！」

抱くようにイエスは語った。

キリストの血の滴りが

時を刻む。時の齒車は

人の子の宝血をしぼる。

肉体は砂漠の如く「渇く！」

たましいは神の愛に飢えつつ。

凄絶なる現実である。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ！」

「神様、神様、何で私をお棄てになった

……？」

血の叫び、はりつけのままなるイエスの。

この断腸の雄叫びに

つづくは断末の霊的絶叫！

地は震い、岩は裂けた。

墓は開き、聖所の幕も真つ二つ！

天地晦冥。

絶語の聖憤、雷霆を轟かせ、

萬斛の聖涙白虹に滴る

萬剣天に潤えば、聖旨畏み、

「お父様、私の霊を聖手にゆだねます。」

いやはてに独白一言、

「事は畢った！」

人の子は首を垂れた。

神敵の極み、神の子の

愛憐無量の聖姿ぞ。

神の義と愛がイエスを十字架に。

人の罪がイエスを十字架に。

この絶対矛盾がクロスしたところ、

愛は義のゆえに痛み、

義は愛のゆえに砕けた。

そこにのびきならぬ

キリストの十字架が立った。

そこに十字架の贖罪が成った。

ゴルゴタの丘はかくて「至聖所」となり、

「永遠の贖罪」はキリストの血で果された。

木材の十字架は朽ちた。

霊の十字架は立っている、

世の終末になるまで。

傷だらけの蒼白の軀が、

岩窟の壑穴へ運び去られた。

役人に、兵卒に、祭司に、学者に、

長老たちに、群衆に、

そして弟子たちにすら棄てられた

人の子イエスの屍である。

ただわづかの女たちが慕いつつ

悲涙にくれていた。

ただ独りの女―マグダレーナか―数日前に

真心を傾け尽し、

真白き壺をうち割って

ナルドの香油をイエスに注ぎ、

イエスの身心を香油で満たした。

美しき瞬間、永遠の芳香！

「全世界につたえらるべき」。

その香に匂う

霊香漂うイエスの屍、

冷たい岩板の封印の中。

蒼茫として日は暮れる。

暗愴たる夜は更けてゆく。

墓場のかためはいかめしい。

死者を看張るは番兵の剣閃。

外は寂寞無明の二日目である。

板岩封印の奥津城の中では

神秘の霊生が胎動する。

ほの明き三日目の晨、

萬象を震はす靈動を以て

天地を貫く靈光を浴せて

父はイエスを復活よみがへらせた。

キリストは立ち現れた！

父の靈愛、神の靈生が

キリストに靈現した。

岩窟に白光みなぎり、

岩扉いわどは既に蹴破られ、

番兵ことごとく靈撃を受け、
蜘蛛の子の如く散り去った。

キリストの復活を告げる

天使の告知に

女たちと弟子どもの

驚愕は言語に絶した。

「われは復活なり、生命なり」と

キリストの言は活現した。

神は生く、キリストは活く。

日の下に新しきことが起った。

歴史は一度掻き裂かれた、

乾坤を貫く靈木で。

歴史は再び創始^{はじまり}った、

驚天動地の靈木で、

絶対次元の貫入で。

十字架のキリストに在って、
旧き私は碎かれてある。

復活のキリストに在って、

新しき私はみ靈に生きている。

聖靈のバプテスマこそ

死と靈生を

十字架と復活を

我らの現実体験となし給う。

「我れ」が碎けて「汝」が生きる。

心が裂かれてみ靈が宿る。

聖靈に在って聖言が生命となった。

キリストは世界に在まし、

歴史を貫いて今も現^{うつ}に

現実を統べて在り給う。

混沌と不合理の奥に

靈的根源現実は蔽として在る。

主、キリストよ、

私は汝の有です、僕です。

汝は私の靈生です。

汝は私の贖罪主、実存主。

私の義、私の愛、私は無。

汝は私の一切で在り給う。

私はもう何もありません。

私の眼玉が水晶体であるように、

私の心魂も無色透明にされました。

萬象萬態があるがままに映ります。

陽光を受けて眼玉が外界を見るように、

汝の靈光を浴びて心魂がすべてを観ます。

陽光の熱エネルギーが

大自然を浄めあたため生かすように

汝の靈生は私を浄め暖め生かします。

汝の靈光靈生靈愛を浴びるに至った

この無色透明の魂は

最早党派根性、パリサイ精神を知りません。

「私の」信仰も、真実も、実存も棄てました。

絶信の境地、この無色透明にこそ

「汝の」信仰、真実、実存が在るのです。

この賜りたる「信」こそは「現」であります。

この現実を、この靈生を如何せん！

誰が何と言っても

仕方がありません。

「彌陀の五劫思惟の願を

よくよく案ずれば、

ひとへに親鸞一人がためなりけり」

と告白した高僧の現実は、

汝、キリストの靈願靈愛に

圧倒されて空無となり充満となった

この罪びとの現実と相照応いたします。

キリストの聖い熱い愛の靈生が

この泥だらけの種子なる我らを
砕いて淨めて生かして下さる。

あの穀草の種子が殻を破り

根を出し芽を吹いて陽に向い、

ぐんぐん伸びてゆくように、

靈界の陽光、神の栄光を浴びつつ、

靈界の大氣、聖靈を吸いつつ、

靈界の地下水、キリストを飲みつつ、

我らの靈生は伸びてゆく。

かくて神の大地を歩みゆく。

穢土を淨土とし、娑婆を極樂として、

此岸を彼岸とし、現世を天国として、

生死の相対をさながらにして絶しつつ、

永遠の靈生は体现されてゆく。

草花が陽の栄光体であるように、

我らもキリストを浴びて、

いつもその栄光体でありたいものだ。

草花が蜂や蝶や人々に

歡喜の泉であるように、

ソ連人をも中国人をも、

仏教徒をも、回教徒をも、

あたためる愛に生きたいものである。

花を憎む人はあるまい。

愛は何処へ行っても懼れを知らない。

愛は到る処を天国とする。

すべてを溶かし、すべてを包み、

すべてをゆるし、すべてを愛に変質させる。

フランスは狼をすら、

兄弟と呼んで、手なずけた。

文殊菩薩も極樂を

身辺に現じて歩いた。

「汝らの仇を愛し、

汝らを責むる者のために祈れ」

とのキリストの言の裏には、

「私の靈生靈愛を受けよ」

との実力の裏づけが秘められてある。

そのとき我らに不可能の事態が

不思議にも可能となってくる。

「求めよ、さらば与えられん」とは

何を求めよとの意であるか。

この愛のキリストそのものを

求めよとの意であるのだ。

祈りとは、正にこのキリストを求め、

主の中に祈り入る靈願そのもの。

実はキリスト自らが

驚くべき愛を尽して、

私たちを求めて居られる。

キリストの靈願本願よ。

祈りが魂の呼吸となり、

キリストの靈生がひたひたと

われらの五体にみなぎり、

キリストの靈愛が脈々と

われらの血となり肉となれば

キリストがサマリヤの女に言った通り、

永遠の靈泉が我らから湧きて流れる。

かかる受肉、化体、変質、変貌を、

かかる靈核、靈生の形式との展開を

体認、体得、体現する靈質的実存を、

パウロもヨハネもペテロも生き且つ証した。

キリストの原始福音の中核はこれだ。

靈的実存を日に日に育み給う

聖寵にあづかる者は

主の栄光を念とする。

曲解と誤解と黙殺と

侮蔑と背叛と迫害が

多少とも此の身にのぞんで来たことは

聖名のためうれしいことだ。

「天の父は、その日を悪しき者の上にも

善き者の上にも昇らせ、

雨を正しき者にも、

正しからぬ者にも降らせ給う」。

そのような大愛の無的実存となりたい。

キリストの白熱の愛に燃えて、

陽の如く照りわたり、

雨の如く沁み入ろう。

有難きこと、この上なしの聖寵の力。

善悪に絶して

天的至善に救いあげ、

正邪に絶して

天的至正に贖いあげる

キリストの靈愛の素晴らしさよ。

「汝らも天の父の全きが如く全かれ」

とのキリストの無上命令は、

この聖愛のキリストの靈生を

陽光の如く、大氣の如く、清水の如く、

受靈する現実においてはじめて

質的には受けとられ得る。

ソ連もアメリカも、

中共もイギリスも

ドイツもフランスも

印度もこの汚濁の日本も、

特にその為政者たちが

大愛に包摂され、

靈光に照破されて、

靈生に復活し、

超イデオロギーの

靈止たる根源に

立ち帰って人間愛もて

互に握手を交はすのでなければ、

世界の前途は極めて危い。

「人間は万物の靈長なり」との

栄光の金言を自ら放棄して

「人類は靈生を喪失したる者なり」

と自嘲し自滅せんとするのであるか。

この原子力時代に要するものは、

原始福音の原始力である。

現代日本青年男女の

最大課題は宗教である。

現代世界キリスト教界の焦眉の課題は

原始福音への真正の復帰である。

神は今、全キリスト教界に命じ給う、

聖書本来の靈的次元に立ち還れと。

現代キリスト教の永き冬眠の期は満ち、

復活の春は来た。

贖罪を受け、聖靈に与ることが、

福音身証の土台である。

いざ聖靈の勇士らよ、聖愛の乙女らよ、

五年、十年、三十年、否、時は迫った！

聖書を身読し、実存を深め、

落下傘に非ず、水爆に非ず、

そんな殺人沙汰でなく

靈生を与うる聖靈降臨を執り成して、

聖靈の幕屋を祈りをこめて

山へ海へに張りゆこう。

み霊の子らよ、相たづさえて

キリスト幕屋（エクレシヤ）のために
身心を捧げまつろう。

神の幕屋、新天新地に成る日まで。

（曠愛文庫第四号）



十二歳のイエス 復活のキリスト 十字架のイエス
英文ロマ書 8：26の額（小池政美の自筆）



エマオへの旅人とキリスト
(ルカ24：30，31)



昇天のキリスト（ルカ24：50，51）

三

近親・師友篇（詩集）



内村鑑三

(1861. 3. 22—1930. 3. 28)

わが兄に寄す

辰雄

——一九五一年十一月十八日

神は先づ兄を先驅者と立て、
その死を以てわがために

聖国への路を拓きたもうた。

私の今日在る第一の道しるべは

正にこの兄の実存にあった。

彼は今ねんごろに私に告げる、

「汝の星に順うかぎり、

汝必ずや栄光の湊に到り着く。

私があのかく早く世を去らなかつたなら

上天がかくも深く汝を愛し給うを見て、

汝をそのわざに励ましたであらう。

けれども私がかくシオンの山に、

贖はれたる十四万四千に加えられて
羔の君のみ許べに在ることが

地を汝と共に歩くよりも

汝にとって恵福である。」

私もダンテの詩句を借りて、

「かつて汝が世にあった日に、

人がおのれを永遠の者となす路を

いつも私に身を以て示してくれた

汝の慕かしき、慈父の如き面影が

わが心鏡に今なお鮮かである。

汝の実存が私を主イエスに

わが地にある限り駆り立てるであらう。」

といえの言葉を天に返す。

一九二一年九月二十二日！

二十七歳を一期として彼は去った。

爾来風雪三十年、彼と私は

天地相応え、肝胆相照らして、

曙の明星キリストを仰ぎ見つつ、

嵐にも嵐にも旅路を進んだ。

さはれ私の蹉跎たる歩みは

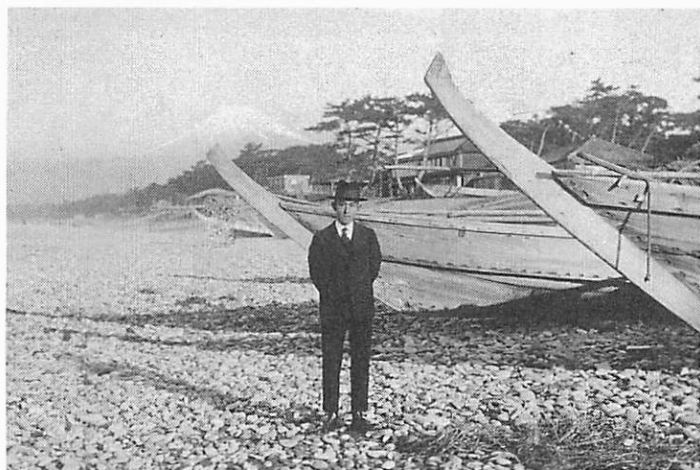
いかに兄の心を痛ましめたか。

悔いのみぞ多かりし来し方の路。

さりながら、主よ、深きみ恩恵を想い、

彼と共に限りなく聖名を讃へんとする

この『記念』の心意を、受け容れたまへ。



小池政美、一九二〇・一一・一四沼津千本浜にて、北京日本公使館へ赴任の途上、二六歳。その日記の一句。

「偉大なるポッシビリティを久遠の如実とせんがために」
これは私への遺言の如くひびく。

IN CHRIST

O My brother, gone in youth !
Ever in Christ thou fought alone,
On thy cross thy hopes forlone,
Trusting thou in Father's truth.
 Pure and earnest was thy love,
 Some dark nights thou must have wept,
 But thy heart was strongly kept ;
 Such a soul I wish to have.
Be my battle what it may ;
For me the Spirit light shall be,
And then I march in graceful right.
 Christ's the Power on my way ;
 And broken hearts are friends for me.
 For you in Christ I pray by night.
 —Autumn 1951 TATSUO

キリストに在って

噫、わが兄、若くして汝は去った！
独り易らずキリストに在って戦った。
希望を棄てて、十字架を汝は負った。
父神の信実にも頼りつつ。
 汝の愛は純でまた熱かった。
 幾夜かの汝の涙を誰が知ろう。
 されど汝の心は雄々しく不動。
 あのような魂で私もありたい。
私の戦は何であろうと、
聖霊は私の光であり給う。
かくて恩恵の義にあって私は進む。
 私の路の力はキリスト。
 砕けた心は私の友よ、君らのために
 キリストに在って夜ごとに祈る。
 1951年秋 彼岸

わが姉に寄す

辰雄

——ソネット——一九四九年八月十八日

庭の草木、島のたなつもの

日照りのためにうら枯れゆけば、

人も馬も都の巷を

喘ぎて歩くこの夏にして、

既に三年をいたつきに臥し、

力尽き果て彼女は仆れぬ。

肉は落ち骨あらはなれど

その瞳には勝利の徴あり。

生家を出でて三十路あまりを

耐へて忍びて仕へ貫きて

大和島根の婦道を踏みて果てたり。

その名にし負ふ富士を慕ひ、

彼女を知り給ふ神に涙拭はれ、

十字架を負ひし足跡を遺して。

優子ちゃん



(一九七六年七月十二日召天)

(七月十四日作)

天園

陽の光を見たばかりの
乳呑児がどうも不調だ。
どこがわるいのだろう。
某病院に伴れてゆかれる。
診断は、「心臓の故障」。
可哀想に、乳呑児は
手術台に載せられた。
可憐な心臓部を
メスが裂いた。
ところがどうだ！
心臓に欠陥はない！
障害は消化器系統。

オペラツイオーンのため

隆起した、乳呑児の胸骨が。

一体どうしてくれるのか。

遠隔の小児科専門病院に

永いこと自動車通いだ。

あとは、病院生活数ヶ月。

一向、はかばかしくない。

かぼそい脚よ、腕よ！

たるんだ膚よ！

栄養が摂れないので

智能の発育も外には見えない。

言葉以前の口の動き！

心の言葉を察するつらさよ。

愛らしくまた総明な眸！

何かを言いたいのである。

眸の奥の心の意地らしさよ。

時折微笑をたたえる――

身体からだのつらさがそれをかき消す。

体力に似ず力強い泣き声、

元来体質は良い娘なのに。

日が経ち、月が流れる。

しかし体力がつかない。

流動食を鼻からも飲んでいる。

立派な歯が生えてきた。

それでも固体の食がとれない。

もう過ぎた二年と三月が！

よくもこんな体で

生命力があるものだ。

ただ母親の愛と看護で

生きつづけているのだ！

母親不在のときは親身になって

看護して下さったおばさんがある。

抱いてじっと見ていると……

たまらなくなる！

何の因果か。

罪もないこの娘！

どういう星のめぐりあわせか。

いろいろな想念が

靈感の如く掠^{かす}める。

優子ちゃんは、いろいろな意味の

十字架を負はされているのだ！

ただ平伏して祈った。

「主よ、優子ちゃんは

十字架を負っているのですね。」

「そうだ、その通りだ」

主のみ声である。

優子ちゃんの十字架！

それが徒らでないように！

断腸のこの想い！

「優子ちゃん！ ごめんね！

おちいちゃんは何も出来なかった。」

七月十一日の夜、眠れなかった。

独り祈った、集会所に端坐して。

そしてこの詩の原型を書いた。

その翌朝のことである。

電話がかかって来た、

おばあちゃんが涙声で、

「優子ちゃんが、とうとう……。」

噫！ 一九七六年七月十二日！

その翌日永年の集会所で告別式。

「十字架の勝利」と題して

優子ちゃんのために語った。

悲しみの中にも烈々たる火が

私の胸の中に 燃えていた。

罪なきたましいの

十字架の死はこよなく貴い。

イエスは幼児^{がきこ}を最も愛した！

イエスの言葉が力強くひびく。

「天国にて大なるは誰か。」

イエスは幼児を抱いて言った、

「翻りて幼児の如くならずば、

汝ら天国に入るを得じ。……

汝ら慎みてこの小さき者の

一人をも侮るなかれ！

幼児の御使は天にありて、

在天のわが父の御顔を

つねに見るなり。」

優子ちゃんの、言はず語らず、

その声聞えざる声を聞き、

その言の奥の言を聞いて、

優子ちゃんを抱いていたのは

今も生きて在り給うキリスト。

幼児を愛したキリストの愛に

圧倒されつつ、十字架の勝利を語った。

「おちいちゃんのお庭の

月桂樹の葉っぱと棕櫚の葉っぱが

お手を天に向けて、

優子ちゃん！ 万歳！

優子ちゃん！ ハレルヤ！ と

叫んでいるよ、歌っているよ！

優子ちゃんもつい二、三日前に

ママの腕に抱^だかれながら

お庭を見てニコニコと

よろこんでいたね。」

死の床に眠っている優子ちゃんは本当に

天使のように美しい。

今にも目覚めるような
平安につつまれていた。

今や彼女は霊体を賜って

天界の緑の牧場に

憩いの水辺に導かれ、

幼児たちに迎えられ、

天の饗宴にあづかり、

楽しい天国生活に入った。

優子ちゃんのゆえに

課せられた使命が私にもある。

これも果さずんば、

地上を去ることは出来ない。

痛ましくも美しかった

朝露の如き短命が

わが胸中に刻んだ板画は

いつまでも、いつまでも。



天界の優子ちゃんは
このような乙女です

藤井武先生の片影

一 実存の香り

(一九三〇・七・三一)

ここ武蔵野の新町の丘を

聖旨ゆえにビスガの嶺きとし

すべてを聖手にゆだねまつりて、

夏の真中の輝く日なか

雷霆白雨過ぎしあとの

清らかなる大空を道に、

雄々しく潔く戦士が

天翔けり昇りたまひてより

二週の日はうつろに過ぎた。

日は夜を孕み夜は日を生んで

現ともなくただいたづらに

時をながむるわが夢心を

破る白雨！ 悲しみは新た、

わが魂魄はうなだれて

木の葉打つ雨滴にかようのみ。

恩師は去りぬ、再た会ふ日まで

かの慕はしきみ姿言の葉も

はや地にては見また聞くよしもない。

されど受けし実存の香りと

『旧約と新約』に溢るる真理は

わが日の果つるまで力とならう。

* * *

〔附記〕わが恩師藤井武先生は、一九三〇年、即ち内村鑑三先生の召天と同じ年の七月十四日に地を去られた。私が学窓を出た翌年のことであつた。

『旧約と新約』は先生の月刊誌。第二百一十一号で絶筆と共に終刊となつた。世に比ひ稀れなる基督教月刊誌であつた。聖書の研究はいかに進むとも、この誌は研究によつて凌駕される内容のものではない。この古典的文字に、現代青年よ、注目せよ。全集が既に二回刊行された。日本の精神史はしかし将来、内村鑑三と共に藤井武を有つたことに驚異し、感謝する日を迎へるであらう。

二 預言者の片影

(一九三一・七・一四)

—— 召天一周年記念日に ——

真白き帆影空に漂ひ

滴る緑葉幕屋を地に張り

よろづのものの輝く真夏、

新町の里に一人の預言者

ためらふことなき夕陽の如く

その逞しき姿を消した。

語らず言はず叫ぶことなく

ただ悲壮なる目指に

言ひ知れぬ愛を地には遺して。

その日その夕は巡り来つれど

還り来まさざるはその人である。

時の車よ、などて彼をも還さざる！

子であり、父であり、兄弟であり、

友であり、われには恩師たる

人らしき人は去りて今亡し。

噫、今は亡き藤井先生！

いかでかく速かに去り給ひしよ、

はや一年が過ぎゆきしとは。

人よ、小さき群を愛せし人。

そのなつかしき忘れな草の

葉の片影をうつし出ださん。

ある秋のうららかなる一日

師に伴ひて数なき我ら

三浦半島を歩き暮した。

一包みの弁当箱をステッキに

結びつけてやをら肩にかき、

おのれも必ず荷を負うべしと

弟子らに一歩も譲らざる心、

眼眸を遠く海と空とに

指し向けて悠々と歩む姿、

今もなほわがまなかいにある。

陽は翳翳たる雲にかくれて

我らの歩みは未だ尽きない。

往き尽きて半島の端に

到りしわれらを月は迎へた。

やがて三崎の岩頭に立つ。

名にし負ふ城ヶ島なる燈台の

光の明滅は夢か現か。

空ゆく雲は月華に映えて

白鳥の飛び渡るにも似たり、

時しも懸れる天心の星座

白鳥と奇しき冥合を示した。

やがてわれらの喉の渴きを

癒さんと武蔵野の牧人は

大いなる美果をとり出し給ふ。

これ、さきに途にて購求ひし品、

師の愛こもる有の果の味、

ネクタールも此の如きか。

夕空に突如流れ渡る声、

師の心腸より湧きたつ曲調！

「清き岸辺に」の讃歌であつた。

声に応へて吾らも歌ひ、

うたひ終りていくばくもなく

小さき群のため祈り給ふ。

岸辺の祈りは胸底に泌みた！

三崎の波よ、潮風よ忘るな！

我ら生きて祈りに応へん。

真鶴、連光寺、溝ノ口、

三度びの散歩の想ひ出は

いづれ深からざるものやある。

新町五年、いかなる聖日も

休むことなく私は貫き、

聖書を親しく学び通した。

午後にはミルトン、ダンテ、カントを、

聖書の原語をこれに加えて

学びし恩恵いつか忘れん。

預言者の死、聖旨は深い。

その実存と愛に迫られて、

天の恩師と私は進む。

聖意かしこみ聖霊により、

いつかは折らるべき杖を執り

聖言の燈火をたよりに

私は往かう、森を経て谷に出で、

川を渡りて彼方の岸の

戦の場なる荒野に出でて、

いつの日か神の呼び給ふまで

愛の戦を戦ひ貫いて、

「曠野の死」をひとり賜はらう。

縦ひ人々に棄てらるるとも、

負ひきれぬ十字架の下より

シオンの山の主を仰ぎ瞻ん。

*

*

*

〔その後の附記〕藤井武先生については、藤井武全集刊行会発行『藤井武及夫人の面影』（矢内原忠雄編集）を参照。

その中には拙文「噫藤井先生」及「恩寵の跡」所載。〔本著作集第九巻「紀行と感想」収録の予定〕。

「曠野の死」とはブラウニングの“Death of the Desert”を想つて引用した語。

「折らるべき杖」についてはゼカリヤ書第十一章を参照。何故こんな言をつかったか。私たち「小さき群」は十数名で、睦しく羊の群のように従順な群であったといつて可いだろう。集会それ自体に何の問題もなかった。しかし果して私たちは先生の険しい実存の路につき従っていたのであろうか。私たちは人間であつて羊ではない。それ故に各人は神に直結して雄々しく先生のあとを往くのでなければならなかった。

その点で恐らく先生の眼からは何と意気地のない連中だろうと愛想をつかさざるを得ない面もあったと想う。勿論先生は私たちを愛して下さったのであるが。それだけまた痛みも深かったわけだろう。少なくとも私はそのいくちなき者の筆頭であつたにちがいない。その懺悔の念やみ難きものにかられた。やがて私は私なりに立ち上がった。そしてわが行手を想望して不思議な冥

想にかられた。それが「折杖」という表現となった。

拙文「恩寵の跡」の最後も同じような文字で終っている。「恩寵の跡を臚ながら辿って見ると、そこには何ものが棄てられてある。一つの燈火である。一つの折れた杖である。燈火が何であり、折杖が何であるかを一生を以て知らねばならぬ。恩師の故に、栄光聖名にあらんことを。

(一九三二年二月十三日)」と。

そして二十三年後の今日、私は「折杖」が何であり、「燈火」が何であるかを体験せしめられつつある。不思議な預言であった。と同時に師の「恩の杖」と「結の杖」のゆえに深く感謝するまことの人生は死を越えて真に恩恵を知り、結合を知る。キリストの「折杖」の「恩恵」とは即ち十字架の贖罪であり、「燈火」の「結合」とは即ち聖霊によってキリストに在る実存となることである。

(一九五三年九月)

三 ある舟路 (一九二九・四・四)

——藤井武先生の詩の舟路——

希望の岬を廻り来し舟の

影、朝露の中を動く、

夢よりも美しき現である。

暁の風を真帆に孕みて

波の音も快き伴奏の如く

進みゆく舟足の何ぞ自由なる。

朝暉を帆柁に受けて

玉なす朝露は、碧玉の如し、

その帆影真白きは貞潔の徴か。

今し檣頭高く翻るは

いづこの船旗なるか

君見ずやこれぞ「来世」の旗印。

み霊に導かれて詩の波路

来し方既に六星霜を閲し

風雨の穿ちたる船体は軋む。

舵は既に無く、独り帆綱を操りし

船路の何ぞ多難なりしや。

心ある人の心に映らん白波の跡。

行く手三年のこの航を

主よ、聖手もて親しく助け給へ、

神よこの舟を光の津まで導き給へ。

〔註〕藤井先生の大詩篇『羔の婚姻』の下篇は「饗宴」。

その主題は然示録。「来世の希望」を抱いて先生は詩の航路を進みつつあられた。しかし噫一九三〇年の夏、遂に未完の詩を遺して先生は去られた。

こんな詩を書いて先生の詩の完成を祈っていた昔を偲び、感無量である。

(一九八五・八・二五)

凱旋

恩師藤井武先生の実父浅村安直翁の御逝去（一九三〇年三月一日）を聞きて——一九三〇年三月三日

戸外には 万斛^{ばんかく}の天涙ぞ降る。

闇の中 たゞ黙然と几に倚れり。

祈らんとせば 何故か祈禱^{いのり}は還る。

無限の響 虚空に震ふならん、

無言の声 わが頭上を壓して重し。

立ち降りて 空隙の大たるを察し、

静思して 悲想^{かなしふ}の深きを想ふ。

新町の空は 春未だ醒めざるの夜

緇衣^しを拡げて 涙の家を蔽ふなり。

さはれ思へ、 死せし者は勇士^{ゆうし}なるを。

想ひまつる、 断食数旬の籠城を、

察しまつる、 尽夜をわかたぬ痛苦^{おそひ}の襲撃を。

その昔 旅順の戦に一大隊の長として、

弾雨の中を 奮戦之努めし時に、

「我等は此處に 戦死せん、一步も退くべからず」と

叫びし人は 今世の最後の敵を病魔とし、

忍従の床に 真乎の武人の意気をぞ示す。

如月の 明けにし朔日の空光あれど

援軍空しく 竟に城は落ちにける。

さはれ如何に、 天軍既に武人を奪りて

白雪の如く 天翔けりて凱歌をうたふ。

君見ずや 勇士の盾雪輝くを！

君聞かずや 聖名を称ふる武夫の賦を！

忍従の勝利

一九三〇年九月十一日、享年三十にして召されし井浪弘兄のため。

東大法学部卒の井浪弘兄の一周年記念日の前夜八時より深更三時にかけてものせし小詩。

(一九三〇・一〇・一一)

西の方見知らぬ山里に

わが友の遺骸はしづけく

土くれの下に憩らふか。

その墳墓の草かげに

啼く虫の音が露にぬれ

骨肉の腎に泌み渡らう。

夜の白光を見て洩れ出でし

友の名の芳り虚空に消えて

秋の夜の吹息ここには満つる。

夏を隔てて春と秋の

花の色香の異様にも優して

大いなるは人の世のうつろひか。

初夏のひと日、夕近き頃

友を仮の宿に訪ひしとき

莞爾として彼は迎へた。

寝れたる身、哽がれし声！

されど友はいのちに満ちて

真理思慕に萌えてゐた。

勧めらるるまま夕餐を共に

したためていと楽しき時を

且ついのり且つ語り合つた。

夕の灯影に雨脚がひかり

歎みぬべきけはひもなきゆえ

友はたゞ一つなる傘を興へた。

玄関に立ちたる友の姿俤と

言ひ知れぬ心映せる眼差とは

今なほわが眼に鮮かである。

再た会ふ日をばのぞみつ

暫しの別離を告げし夕は、

ああ！ 帰らぬ旅の門出となつた。

再び地にては杯を共に

すまじと誓ひしには夢あらぬ

友の饗宴は最後となつた。

みじか夜の夏の夢より醒めて

友を呼べどもいらへはなくて

コスモスの花も泣かんとするか。

ながき夏のいたつきの床を

訪ぬる親しき友のあるなく

咽喉は聲を送るに苦しみ

年とることも叶はざりし

友の病苦と心胸を推りて

わが胸は新たに涙する。

たゞ聖言が夕に晨に

その右手を庇ふ蔭となり、

昼は陽彼れを打つことなく

夜は月の幻の刺もなく

安らげく臥してまた寐りて

独り坦然なるを得しと知る。

起きてはいのりに聖名を讀へ

いねては苦しみに彼を知り

望みて頼りて戦つた！

新秋のある日の午睡に、

天使降りて彼に告げた。

その声の語りし意は曰く

「日ならず汝は召さるべし

主のよろこびに入れよかし。

若き者をば選みとり

聖国に呼ぶは聖旨なり、

その十字架を授かりし

天つ幸福汝がものぞ。

主の欣びのゆえにこそ

汝は命を棄つるなれ。

されば委ねよ汝が魂も

身体も共に聖手の中。

天つ翼のうち張りて

汝れをば永久の故里へ

載せゆく日こそ目近けれ」。

夢より醒めてわが友の胸

暫し祈りて「然り」と応へた。

斯かる幻影をまこととなして

心にかかりし一つの事を

果すべく東海の友に書信を

自己が筆ならず友はしたためた。

不当の毒杯を傾けし

かの哲人の今は言辞が

その時友の胸になかりしと

誰が知ろう、想ひ起すは

友と語りし新町の途。

いくばくもなくおのが肢体の

つねならず脚み出でしに

彼は何ごとか確と感じた。

長月十と一つの日

午少しく下りし頃ほひ

彼の魂は朽つるものみなを

地には遺してみ許へ還った。

親しき友も識らざるときに

自らも語る違あらせず

彼はより善き自由の国へ。

「誰か知らんわが果ての斯くも

速かならんとは」と古諺が

友のために悲しくも調ぶる。

あゝ人のいのちの五月期に

わが友若樹は伐りたほされた。

寂しくしづけくやすらけく

生ひ立ちし「平和」の友は

ひとり、黙してひと知れず

暴風雨なく苦患なく月明き

バラダイスに早くも去った。

われらが群の先駆として。

地にては美しき花を庭に

植うる違もなかりし友よ！

新しき陸に真理の花を

観て君が瞳は輝かう。

われは羨む汝がゆく道の

いよ／＼高く清らかなるを！

朽つべき幕屋に在せし頃、

外なる人はややに壊るれど

内なる人は日々に新たに

君は踏むべき道を進んだ。

足の弱きによりめくことは

よしありともあればこそ歩いた。

三十路の果てをビスガの峯と

昇り来りし病患の坂は

君がため何を意味したか。

汝が罪のゆえなりしか、非ず！

世の悪と禍のためか、非ず！

ただ神のゆえ、彼の聖光のため！

君は果を結ばざる樹の如し

育ちて伸びて伐された。

無益の益なる君が存在、

敗れて成りゆく君が計画、

棄てて余き君が短命、

知れ、あらゆる価値の転倒、

うつし世に換ふる永世の論理。

わが友はキリストを得しゆえに

すべてを塵芥とすて去りて

人の思ひに過ぐる平安に

勝利のラッパを胸に聞きつつ、

枯木の如き体軀を忍び

羊の如く柔和の中に

無量の念ひを胸には秘めて

この世の終りを全うしたるぞ。

愛する新町の子等よ、友らよ！

われら牧者を先に失ひ

つづいて一人の羊をとられた。

血潮また血潮、いのちの法則

こゝにしもあるか、人生の敵。

世の人の魂の眠れるときに

義人の血潮の濺がれるべき

天つ理か、人生の爾。

戦のものの具は剣にあらで、

十字架の血潮とぞ我ら知る。

戦は憎悪の戦に非ず。

義なる愛のしづけき炎が

人の救に燃え立ちて

おのれを燃くまでに燃えん或

いざさらば我も真理の

戦の場に倒るべき

よき準備を日に日に積まう。
聖旨かしこみ雄々しく前み
いかなるときも主に信頼み、
聖名讃へまつらん永遠に！

太田彼得さん

(一九七三・三・一九)

市川喜一君の企画で

大阪伝道がなされていた頃、

私もその一端にあづかり、

講演幾度び。

そのとき司会などをされたのが、

太田ペテロさん。

彼は私より年上なのか、

それとも年下なのか、

判断にくるしむほどに

若々しいお年寄り。

つやのある声と

うるおいのある眸

力強い証言と

ぶちまけた祈り。

幼児の如く

主に呼びかける

あの祈り、

今もなほ耳朶に

ひびきのこっている。

彼の存在はあたりを

あかるくし、あたためた。

彼は無教會的信仰に

ある共感をもっておられた。

彼はホーリネス的信仰に

ある同感も感じておられた。

彼は正直にどちらとも

取っ組んで苦しまれた。

彼はしかし不思議に

私の告白的聖書講筵に

ぐんぐん共鳴し、感嘆された。

特に鹿沢温泉における

夏期特別集会において

私の唱道する「使徒的信仰」に

決定的なアーメン、ハレルヤ。

「この道を往かん」と

歡喜されたそのうれしさよ。

太田ペテロさんも今や

キリストの十字架が人間の

いかなる実存面の問題も

すつとばしていることを

ハタと受けとめた！

使徒行伝のペテロの如く、

きよきみ霊あふるるゆえに、

愛のみ霊みなぎるゆえに、

彼の生活と伝道は今や一如。

『泉』誌をつづる筆端に

霊雲湧き立ち、

靈光閃く。

端的な証言と

大胆な聖言の把握に、

独創的な解説や、

太田流の言説が迸る。

奥田昌道君の二階座敷の祈禱会！

そこではしばこの僕

聖書講筵を展開したが、

太田ペテロさんの御列席は

靈燈さながらのあかるさよ！

このあかるい光が

あるときから現はれなくなった。

太田さんの病臥！ どうされたのか。

あのお元気な太田さんだもの

必ず立ちあがる、

そう信じてうたがはなかった。

意外にながびく。変だなあ！

休日のない私の生活。

お見舞に往くひまのなさ、

再起されるとの希望のもとに

チャンスをつかみかねていた。

明日は何とかしても、

旅仕度をしたその晨

太田さん召天の悲報！

すみませんでした、太田さん！

残念千萬！

もう一度お目にかかるべきだった。

彼もどんなに待っておられたか。

後日天界でお目にかかるまで

天地相照応し、福音のため戦い往かん。

地上の生涯はつるまで

伝道一本で生きられた太田さんの

あの心意気はいつまでも

私の胸の中に生きつづけ、

あのあかるい笑顔、

かの共感の叫び

アーメン、ハレルヤは、

いつまでも私の味方、

いつまでも私の励まし。

太田さん！ 地上で賜った御友情を

衷心より感謝いたしつつ、

この末の世の曠野の旅を

この僕歩きぬきます。

天上で御平安あれ！

聖名を共に讃えつつ。

わが砲兵士官（一九七三・六・一七）

大富士の広き裾野の

高原に轟く砲声！

音絶えて既に幾年。

御殿場の東山荘ゆ

わが友は感慨深く

見はるかす演習の原。

夏期の特別集会、

天来の聖霊せまりて

聖言の中に込み入り、

使徒たちの昔を今に

聖筵は展開しゆく。

その身には弾痕とどむる

耳遠き貴き友は

演壇の前に座を占め

全身を耳にして聴く

その御影今も髣髴。

講演の終りにあたり

わが友は感慨に満ち

全身の力をこめて

証しせり、「これぞ福音！」

祈りせり、腸よりぞ。

明くる夏浅間山系

鹿沢なる温泉郷に

開かれし福音集会。

路遠き久留米の里より

欣然と参加せられし。

聖霊のバプテスマこそ

現代のキリスト教に

不可欠の焦点なりと

あかしするわが告白に

関さんは全く共感。

キリストが百卒長の

信仰を褒めたまひける

そのかみを連想せしむる

わが友の快き信！

百万の味方の如く

欣べりわが胸の中。

無教会の友多けれど

わが告白にかく端的に

応ぜしは稀有のことなり。

わが恩師藤井武が

この人に見し信の種子

花と咲き花と散りけり。

「人は武士、花は桜木。」

信実と謙遜の人、

童心と愛のたましひ、

慕しや関武思さん！

孝道を全く歩み、

師道をも貫き徹し、

使徒たちのキリスト道を

鹿沢にて遂に身につけ

関さんは凱旋したり。

万歳！　アーメン！　ハレルヤ！

聖名をこそわれは讃ふれ。

今よりは雲を貫き、

天来の靈光もろとも

福音の大砲の響

殷々とどよませ給へ！

天界の砲兵士官、

主の僕、関武思さん！

（ハレルヤ誌第三十二号）

手島郁郎兄召天十周年記念に（一九八三年十一月三十日作）

歌調30番「天なるわが家を」

〔註〕（一―八節は手島兄の立場九―十一節は幕屋の人々の立場十二節は天地の頌美）

- 一 おかまどの山へ涙ながら
主の聖名呼びつつ我は入りぬ
- 二 祈りに祈りて主に抱かれ
み力来たれり我は立ちぬ
- 三 世紀の半ばよ滝見荘に
聖靈はあらしと降り給ふ
- 四 この世の波風吹かば吹けよ
友らは馳せ来る主の幕屋に
- 五 使徒らの如くにみ霊臨み
主の驚くべきみ業成れり
- 六 み許に召されて茲に十年！
天地相呼び進みけりな
- 七 キリストの幕屋四方に張りて
聖書の証しに信実なれよ
- 八 友らよ勇みて愛の幕屋
世界の涯まで拡めゆけよ
- 九 主イエスよラボニよ我らラオス
町中野山に道を伝へん
- 一〇 我らは誰れしも天賜あり
福音のために捧げまつらん
- 一一 我らはひたすら主のみ力
聖靈の愛にて生命与へん
- 一二 キリスト主イエスの聖名にのみぞ
み栄光あれかしハレルヤ・アーメン

「わが人生」

天野貞祐独協学園長の天界における百歳の日（一九八四年九月三十日）
を迎へて

第十四代校長 小池辰雄

作詞 九月二十九日夜
歌詞 「嗚呼玉杯に」

1

ああ古典書に親しみし
少年時代のなつかしや
わがたましひの故里よ

ひるは野山を駆けめぐり

夜はわが祖母に書を読みて

三つ児だましひ創造られぬ

3

順天堂に通ひしも

湯河原温泉治にも

効果あらなく里がへり

ときしもチフス流行りたり

母とわれとは感染し

母はみまかり吾は遺る

2

故里鳥屋を離れきて

都は独協中学に

入りて四年のゆくなべに

4 身代りの如母去りぬ

ああ断腸のわが想ひ

天地晦冥絶望よ

空ゆく雲に母を呼び

星を仰ぎて母を呼ぶ

かくて月日は流れたり

5 「わが子よ泣くなとりて読め」

母のみ声か、立ち帰り

ひもときし書は内村の

『最大遺物後世への』

わがたましひに光さし

力を得たり全身に

6 かくて勉強にうちこみて

捲土重来独協の

狭き門をば突破して

最上級に入学す

人生道の礎石を

与へられたる四年なり

7 医師たらんとの路を変へ

教育者たる道のため

一高文科を選びたり

授業はドイツ語興味あり

ヒルティーを知りわが道は

いよいよ定か教育者！

8 安息日は寮を出で

風雨にめげず柏木へ

徒歩にて通ひ内村の

聖書講義を聴きたれば

畏神の心据ゑられて

教育心の基礎成りぬ

9

岩元先生われに告ぐ

「教育者たる道ならば

哲学道を往け天野！」

かくて京大哲学の

道に踏み入り夜も昼も

ひたすらはげむ哲の学

10

七高教授時代には

哲人カントの大著たる

『純粹理性批判』をば

翻訳すべき使命受け

孜々営々と夜は専ら

カントカントで暮しけり

11

学習院の時代には

ハイデル往きの旅に出で

九鬼周造に彼の地にて

出会ひし幸を忘れめや

哲学の視野ひろまりて

みのり豊けき旅なりし

12

哲学界の鬼才たる

わが友九鬼は『文芸論』

遺して去りぬ技巧無き

絶対矛盾の一者たる

彼の生涯ぞ哲学の

自証なりしぞあな床し

13

時はめぐりて京大の
哲学道へ帰りゆく

時局の危機を憂ひたる

『道理の感覚』わが理念！

まことのロゴスを踏みにじり

軍部わが書を寸断す

14

甲南校長時代にも

あらしはやまず講堂を

兵器の庫とすべしとの

あらぬ要求を拒みけり

戦時といへど教育を

見棄つることのあるべきか

15

一高校長時代こそ

わが人生の繁光なりし

わが人生の春なりし

一高時代がよみがへる

柏の徴なつかしき

一高学徒と暮しけり

16

しかはあれども時じくぞ

教育界にあらし吹き

容れられざりきわが理念

一高の運命ここに尽き

われは直ちに職を辞し

時計の台に別れたり

17

吉田総理の依頼あり

文部大臣になれかしと

われは情なく拒みしが

総理自らおとづれて

もとめたりしが断れば
その袂より置き手紙！

18 愛国の情切々の

その文面はわれを打つ
されどわが意は変らざり
さもあらばあれ意を決し
心を殺しわれ起ちて
文部の長の座につきぬ

19 文部行政まこともて

企画新たにうち出せる
二三の業は遺りしが
「国民実践要領」に
意を尽せしも甲斐ぞなき
二年三月われ去りぬ

20 かくてありしが羽仁もと子

敬神愛国さながらの
自由学園われを呼び
理事の長にと請願めたり
その教育の実践に
われは欣び諾しけり

21 時しもあれやわが母校

独協学園危機にあり
切なる声にわれ起ちて
校長として復興の
わざを進めて十余年
教育愛を貫けり

22 「心正しく身は強く

知性輝ふ善意志よ

情操美しく品ありて

天資開発文化には

創造的なる人ぞ」是れ

わが教育の理念なる

23

時期は来れり宿願の

独協大学創立よ

関湊氏の献身の

協力得たり草加なる

零線地帯に草わけの

工事を成せり大林

24

わが学徒らよ「大学は

学問による人間の

形成さるる場にぞある」

25

歴史は旧し独協は

医学界とのゆかりあり

隠れし素志の実現は

独協医大の創立よ

ところは何処栃木なる

壬生の原野を卜したり

26

関理事長と日独の

医の学界の石の橋

石橋博士欣然と

独協医大の創設に

力尽せりあなうれし

白亜の城ぞ聳えたる

27

独協学園進み往く

ついに成りしは埼玉の

独協高校「創造と

信愛・開拓」校是なり

わが意を得たり進めかし

中高目白と相和して

28

わが事終る教育に

生涯をかけて悔はなし

天界よりぞわれ祈る

独協学園百年を

祝してわれは今ここに

百歳の日に感謝する

29

独協百年われもまた

彼岸の国に来て見れば

昔なじみの影多し

真理を生きし土井・出射

学園建設の関奏

われら親しく握手せり

30

ああ独協の人々よ！

君ら知らずや天界に

不滅の独協成りゆくを

されば乾坤相呼びて

独協気質勇ましく

進み往かなむ永遠に

〔解説〕天野貞祐先生は一九八〇年（昭和五十五年）三月六日に九十有五年の地上の生涯を終えられたが、去る九月三十日に満百歳の誕生日を天界で迎えられた。去年一九八三年が独協学園の百周年であったから、独協百年史と天野百年史は不可離の因縁と言へよう。

先生百歳の其の前夜、先生に捧げる詩をものせん哉と靈感の如く思い立った。そうだ。先生は一高時代を常になつかしんでおられたから一高寮歌で最も有名な「嗚呼玉杯」の歌調で歌へる詩形で書こう。そして内容は先生の立場に立って先生自身の告白のようにして先生の生涯を展開しよう。こう定めて筆を執ったら、先生の生涯がパノラマのように展開して来た。書き終ったのは夜更けの丑三つ刻であった。三十日の午后、先生の御自宅でささやかな記念会が催された際、私が司会を承ったが、そのとき感話と共に歌はせていただいたのがこの詩の原形であった。

読者の理解に資するため、節を追って少しく解説をしておこう。（数字は節を表はす）

- (1) 古典書とは平家・平治物語、弓張月、呉越軍談、通俗三国志等。(2) 鳥屋は神奈川県北部の山村。(5) 「わが子よ泣くな、とりて読め」は私の詩的推測。内村鑑三の小冊子『後世への最大遺物』のこと。神を信じ、人に仕える崇高にして勇ましき生涯が後世への最大遺物であるという主旨に少年天野は感動して猛然と勉学に立ち向かった。その士氣と共に健康も回復した。全科目の編入試験を受けて当時五年制中学の最上級に天野唯一人が合格再入学を許された。四ヶ年の遅れであったが、それは決してマイナスではなく、人生道の土台が据えられた貴重な四

年間であった。このことは独協生諸君が亀鑑として銘記してもらいたい。

(8) 本郷の一高（旧制第一高等学校）の寮から新宿の西方の柏木まで一高生天野は日曜ごとに内村鑑三先生の聖書講義を聴講に通った。

(13) 『道理の感覚』は天野思想の中心を成すもの。主としてカントの道徳哲学が土台になっている。当時の陸軍の権力がまことの「自由」を読みそこなってこの書を発禁にした。

(28)―(30) 天界における先生の心境を拝察しての詩句。学園の具体的拡大発展に功績甚大なる関湊理事長もこの初秋に天界へ赴かれた。独大創設以後の独協学園は専ら天野・関二巨星の存在に依った。独協学園の今後もこの二巨星の精神と業績を土台として展開すべきものである。

内村鑑三の生涯

(一九八五年三月二十八日)

召天五十五周年記念に

天震

(「一九九節は北の極なる氷の山」歌詞で歌ひ得る)

——これは詩であつて讚美歌ではない。但だ先生愛唱の讚美歌調で歌へるように作詩した。

1 武門内村四方の神を

拜がみ暮す信の人ぞ

農校生に説き伏せられ

唯一の神に平安を得ぬ

3 意志は根強く情は深く

頭脳明晰選びの人

彼はヨナタン フランシスなる

宮部金吾と 無比の友情

2 北の農校学徒七名

安息日をよく遊りて

学に励めばみな挙りて

優秀なりき信の証し

4 校是は何ぞ唯だ一言

唯だ在れよかしジェントルマン

その内実はされど深し

福音による響り床し

5 ああ天然は内村の愛

詩と科学との両眼もて

是れを味はひ何を見しや

神の心とみ業なりし

6 首席卒業の鑑三帰省

儒学の化身父君にぞ

漢訳馬可^{マコ}を捧げたれど

屑籠^{くづかご}の中へ父は投ず

7 孝心熱き祈りの人

彼は屈せず尚も呈す

緋くなべに父の心

聖書^{みまふ}に動き入信せり

8 安中教会^{あんなか} 伊香保温泉^{いかういん}

縁^{えん}となりて咲きし花も

徒花^{あなはな}なりし春の雨に

罪のなやみか国を出でぬ

9 「音に聞きたる未知の国へ

神し護れば勇みて往け」

父のはげまし あなうれしや

北アメリカへ舟路を往く

(10—25節如「ちとせの岩よ」の歌調で歌ひ得る)

10 道を求めて修道院へ

身を隠したるルッターの如く

エルヴィン村の白痴院ゆき

11 身を粉^{こな}にして よく勤めたり

子らに貶^{けな}され なほ愛せしも

心の中に 平安^{やすみ}はあらず

12 院長ケルリン 内村を伴れ

フィラデルフィアの 慈善事業の
会に招きて 一席せしむ

13 行手は更に ワシントンなる

韓^ハ啞^アの学舎 その馬車の中
出会ひし人は D・C・ベルよ！

14 グロースター漁港 食を断ちてぞ

祈りけるとき 心の扉
行^{ぎよう}より信へ 奇^くしくも開く

15 「大志を抱け 少年たちよ」

音に聞きたるクラーク先生！

ついに訪ねし 旅の内村

16 ゆかりは深し ああアマースト

学長シーリー いとねんごろに
迎へ入れたり この旅人を

17 全身は是れ 感激の彼れ

学にいそしみ 道を求めて
内村はげに 火の如くなり

18 シーリーは言う「おのれを見るな！

君が罪をば贖^{あがな}ひし主の
十字架を見よ、ただ十字架を！」

19 学長シーリー 彼そのものが

贖^{あがな}はれたる 人の身証^{あかし}よ

ああその愛に 彼は打たれぬ

主の愛尽きず ありがたき哉

20 「札幌農校 わが乳母校よ

アマーストこそは わが母校なり

十字架により 新生したり」

24 十九世紀八十八年

復活の春 大平洋を

渡りて望む富士の霊峰！

21 比類もあらぬ 貴きものを

胸に抱きて 帰途に着きたり

三年の旅に 聖名を讃へて

25 「愛しまつる主！ 君がためにぞ

愛する日本！ 汝のために

わが生涯を 燃やし尽さむ」

22 真実一路 独立精神

貫きたるは この旅人ぞ

神は随所に 愛を遣れり

(26—37節は23B「わが魂を愛するイエスよ」歌調でうたひ得る)

26 彼れ赴任せり 北越学館

彼は語れり 人物養成

宣教師には 任すべからず

校風は是れ 自由独立！

23 終始易らぬ モリス夫妻の

愛もそれなり 苦難の路に

27 真理の基^{もと}は 主なるキリスト

されば仏教 自由にこなせ
拘はれのなき 大なる心
青年自ら 学びとるべし

28 されど教派の色彩のある

成瀬その他と意見の齟齬を
来たせし彼は 北陸の地に
その年の暮 別れを告げぬ

29 その翌年の夏の光は

幼な友だち 横浜加寿を
慰め人に えらびたるかな
内村二八^{にちや} かず子は二十^{はたら}

30 明けて明治は 二四^にの睦月^{むつき}に

噫、起りしは「不敬事件」ぞ
喧々囂々 不忠国賊！
彼は追放 石の枕か

31 病に臥して 死線さまよう

彼の看護に 身も心をも
つかひ尽せし 愛妻かず子
遂に仆れぬ 噫々無情！

32 「愛する者は 失はれたり

吾れ自らの 失はれなり
星も光を 失はれたり
夜啼鳥はも 哀歌を弾ず

33 悪鬼襲へり 信の土台は

揺ぐに似たり、いづこにか在る

わが信仰は 地にか天にか

いづこに置かん このうつせ身を」

34 落魄の彼れ 盛岡駅ゆ

独りとぼとぼ 山越え野越え

海路を渡り 辿りつきけり

なつかしの市に 噫此処も無情

35 本郷教会 横井時雄は

彼を迎へ入れ 講壇に立たしむ

どん底の彼れ エレミヤ慕ひ

告白の如く 深く講ぜり

38 不敬事件を 導火線として

教育と宗教の 関係如何

井上、内村、論戰熾烈

かたみにゆづらず 勝利は内村

37 キリスト教界 新神学なる

波紋起りしが 正統派なりし

内村、植村、山路動せず

使徒信經こそ 福音の基準

(38—45節 370「めさめよわが魂」調でうたうことを得る)

38 日本の随一 弓の巨匠

岡田透師の 愛娘は

健気なる乙女 その名静子

内村のために 道伴れたり

39 熊本、大阪、更に京都

苦難の月日の 血の文字は

『信徒のなぐさめ』『求安録』

『HOW I BECAME』三名著ぞ！

40

芦の湖畔なる 夏期学校

日清戦争の 直前時に

内村語れり「後の世への

最大遺物」の 名演説

41

世界に日本を 知らしむべく

日蓮、西郷 中江藤樹

鷹山、尊徳 偉人五人

英書にまとめし 内村なり

42

黒岩涙香 万朝報

英文記者にぞ 成りたる彼れ

薩長政治を 鋭く視て

筆勢縦横 時局批判

43

足尾銅山の 鉋毒事件

ゆるすべからざる 人道無視

三十村民 死生関頭

内村烈しく 論難せり

44

『独立雑誌』の 社会批判

転じていよいよ 福音戦

『聖書之研究』創刊号

世紀のあけぼの 千九百！

45

日露の関係 暗澹たり

日清戦争の 主戦論者

内村前非を 悔ひ改め

今や絶対の 非戦論者

46

日本教会史に 新たなること
ここに生まれり「無教会」ぞ
派なく形なし 群はあれど
独立自由の キリスト者ぞ

47

二つの^{ジエ}Jあり 内村には
JESUSとJAPAN これを愛す
「キリストのために 祖国のため」
我は在るなりと 彼は叫ぶ

48

二にして一つなり 二つのJは
神と隣人の アナログアぞ
義と愛に燃えて 日本のため
彼は生涯を 貫きたり

49

内村の道は 武士の道に
接木となりたる キリスト教
地方伝道を 展開して
やまざる月日 開始されぬ

50

熊本バンドは「日本組合」
横浜バンドは「日本基督」^{キリスト}
札幌バンドは「無教会」に
夫々展開 聖名に栄光！

51

聖書の講義は 今井館よ
秀れたる学徒 道を求む
内村慕いて ドイツからは
若きグンデルト 隣人^{とろひと}ぞ

52

男体女峰の 山の裾野

戦場ヶ原にて 語らひける

「われは罪びとの 首なれば

万人救済 必定なり」

53

高橋ツサ子は 家出をなし

内村を慕い 良くかしづく

信仰もあつく 学を好む

されど病を得 遂に召さる

54

彼女の故里 花巻にて

葬儀に当りて 噫内村は

言葉途絶えて 十五分間

落涙するのみ 空前絶後！

55

愛娘ルツ子 ときに病みて

高熱半歳 明治の終末

陸月十二日 氣息絶えて

半時間を経て「もう行きます」

56

聖国を慕ひて 旅に立ちし

彼女を偲びて 父内村

「今日は娘の 天国への

嫁入りの式よ ルツ子万歳！」

57

彼女をみ国へ送りしのち

復活の信仰 彼にめざめ

新たなる力 胸に湧きて

歓善と希望の 歌となりぬ

58

世界の大戦 勃発せり

キリスト教国 あてにならず

人類の罪は 終末時まで

戦また戦 果つるなからん

59 キリストの再臨 待ち望まん

再臨運動 とみに起こり

内村さきがけ 陣頭にて

烈しく獅子吼す 審判の日を

60 再臨運動 東西へ

東京、大阪、京都、神戸

半歳あまりは 火の内村

世界は何処へ 往かんとする

61 都の中央 大手町に

聖日講演 うち開けば

五六百名の 聴講者

内村全盛 時代なりし

62 噫誰か測らん 大震災

全都の大半 火に包まれ

流言蜚語飛び 此処彼処に

鮮人虐殺 数千名

63 何たる混乱 あさましさよ

何ゆえ天譴 臨みたるや

他人ごとに非ず ただ平伏す

我ら立ち帰り 神を畏る

64 爾来福音は 柏木なる

今井館にてぞ 説かれたりし

此処に立て籠り イザヤの如

えらびの人らに 聖書講ず

65 噫古稀を迎へ 叫びて言う

福音万歳！ 更に叫ぶ

日本国万歳！ 時に禰生

二十三日ぞ あな奇すしや

66 床に正坐して「宇宙万物

人生みな可し 言外無量

人類の幸と 祖国の隆盛

宇宙の完成 切に祈る」

67 内村鑑三 まことの人間

まことの預言者 詩人なる哉

矛盾にみつれど いつはりなし

劇的性格 生涯然り

68 彼は信ぜり 唯一の神

十字架のイエス復活の主を

再臨の主を 生命賭けて

すべては体験 いつはりなし

69 内村鑑三 明治・大正・

昭和に互りて 日本国の

真理の戦士ぞ 比類もなき

噫世界的なる たましひなり

70 「吾は祖国のため 祖国は何ぞ

世界のためなり 世界は何ぞ

キリストのためぞ さてすべては

御神のためなり」永遠の墓碑銘

一九八五年三月廿八日内村鑑三先生召天五十五周年記念日に三晩の作詩を終れり。

彗星の人物 関 湊（一九八五年九月十四日）

—— 召天一周年に際して ——

独協学園創設の

宗^{しん}宗^{しん}しき人物は、

独乙文化に心酔したる

彌^や二郎、松陰の愛弟子^{まなこ}なりき。

初代校長は西周^{ししゅう}

学識深き教育家。

時機に適ひて出現の

教育の權化は誰れぞ

大村仁太郎

独乙語教育の明星なりき。

第一次世界大戦勃発す、

その余波は日独戦争。

独協学園の危機迫る、

学園の衰退見るに忍びず、

母校のために立ちたるは

哲人教育者天野貞祐。

母校中興の勢を駆つて

独協大学創設を図る、

これに應じて彗星の如く

出現したるは関湊。

彼は少青年^じ時

貧困と苦難とを戦ひ貫^ぬけり。

鍛へられたる実践智

天才的なる理財の手腕

閃々たる即決即行、

大胆、綿密に事を成す人。

草加の零線地帯に

独協大学を創設したり。

緑豊かな校庭も

彼の創作せしところ。

時満ちて栃木は壬生^{みよぶ}に

独協医科大学、看護学校と

東洋屈指の病院が

創設されたり、白亜の城ぞ。

再^{また}たも数年にして

創立したるは独協埼玉高校。

学園の輝かしき

かかる進展は世の驚異なり。

噫、関湊理事長は

学園の黄金時代を成し遂げぬ。

時期^{とき}既に独協学園は

百年祭を迎へたり。

彼は資性、雷雨的な明朗と

義理人情の深き人。

厳父祖母慈母の恩を忘れず、

学生に孝道を説法したり。

ときに多年力漕の

彼を助けて梶執りし

愛妻宿痾に仆れたり。

噫、舵なき船を如何にせん。

されどなほ天つ風を帆に孕み、

孤独の船路を進み往く。

彼は常に未来を見る人、

栃木と姫路に大学を

建設せんと計^は劃^{かく}り居りしが、

無念、これを果し得で

つより来し病勢頓に革りこみあらたま

去年こぞの九月十四日！

天界へ雄飛せり、

不滅の足跡を地には遺して。のこ

噫、彗星の如き希代の存在、

その光芒や消ゆることなし。

天野園長の普遍的道念と

関理事長の創造的実践を原動として

独協学園、独立協和の

展開を祈りて歇まず。



左から二人目：関湊独協学園理事長
右から二人目：石橋長英独協医大学長
1976年夏のドイツ旅行に際して

四

即興詩集



著者：浅間高原にて（1957年秋）

獨り坐す。

(一九二九・二・二六)

何者の怒気であつたか、

迅風が雄叫びを揚げ

灰色の雲が塵の世を蔽うた。

その咆哮と凄愴は去り

今は澄明の月冴ゆる夜。

何故に私は寂しいのであるか、

世の人の思想と此の胸の思念と

何故にかく齟齬してやまぬか。

義心は誰が私に植えたのか、

悲哀はどの泉から湧いてくるのか。

白銀の光もて万象をつつみ

かの騒音と空莫に替へて

この静謐と神秘を息吹く月華よ！

汝の言を私に今聞かしめよ、

然り、私は知った汝の心を。

汝は私をのみ見てゐるのではない、

汝の生命が日輪にある如く

私の平安はたゞ彼にある。

彼に依り頼みて私は独り坐す、

汝の慈光が他力に據る如く。

斯くてわが衷に逆巻く波は

不安と失望、悔恨と焦慮。

鎮まり難くとも何かある！

「我」そのものは既に十字架に死んでゐる、

わが贖主キリストは私をうけ給ふ。

藤棚の朝露

——一九二九年三月廿八日朝

朝暉が輝き初める、

光は涯しなき虚空を衝つて。

生命！ 光明！

不図見るに藤棚に水滴が、

キラキラと瑞々しく。

赤、青、白、黄、紫……

光の綾に魅せられて凝視る間に

いつしか美の分析的判断を。

変わりゆく光の色は無限の多、

而も「光」たることに於ては—！

多の産みの親たるものは

無限の一、色なき色か！

色彩の総体と個体の秘義よ！

誰か知らん露一滴の光の真理を。

生命！ 自然そのもの！ 光！

美の直観に再び還りて、

「ああ美はしい哉、藤棚の朝露！」

五月のある夕

彼岸（一九二九年五月十一日）

夕されば 雨は歇み

残照雲を貫きて

その光 東の方に

うち開きたり七彩の門。

脚光妙へにかがよへば

武蔵野に光華は零れぬ。

マツチ売りの乙女の如く、

虹の彼方に聖国を観たり。

須臾にして消えしその影に

永遠の美ぞゆかしかりける。

「エヴァンジェリン」

——一九二九年八月十一日

わが友は今、北の方。

談合せし日の 慕はしき。

筆は執るとも 徒らに

思念のみぞ 馳せ廻る。

ここに武蔵野の 一角に

籠城すべし たゞ独り。

我らかたみに 想ふとき

想ひは祈りと かはるべし。

斯くてぞ力は 夏雲の

湧き立つ如く 起るなり。

「エヴァンジェリン」の 幾節いくぶだり

友の祈りと 読みてけり。

書架の中より ひき出だし

夏午さがり 繙けば、

北京の人の 筆の跡

今も変らず 鮮かに

紙面に青く 線を曳ひく。

舎兄政美と 片瀬にて

起居を共に せし時に

親しみたりけん 此の書とは

夢知らざりし 昨日今日。

十と二つの 夏は去り

今は昔と なりにけり。

美うしき詩の句に 接しては

心ひそかに 祈りけん
その心^{こころ}情^{なさけ}をば 今思ふ。
わが胸も亦 祈るべし、
詩人の心を 心とし
人の心の 幸^{さい}のため。

ツエッペリン飛行船

——一九二九年八月十九日

夏の夕、新宿の橋の上に

螢火^か趁^がひし幼き時を

思ひ起して同じ処に

私は立った人波の中。

眼^{まなこ}を東北の一角に向け

心は衷に欣び躍った、

少年時代に音に聞きし

ツエッペリンを待つ私の！

出現^{あらは}ることの遅くして

疑惑と焦慮は群衆を

散らせて集めて騒^{さわ}がせた。

希望^{のぞみ}かへして遠鏡^{のぞめ}を翳^{かざ}すも

大空はたゞ冥々として

それかとも思ふしるしも見せず。

此処^{こゝ}彼^あ処^{そこ}の高^{たか}処^みには人が

黒々と群をなして蟻^{あり}の

固塊^{かたまり}にも似たる情景！

かしこ、飛行機^{ひこうき}の飛び交^かふは

その大代物^{おほしろ}の前駆^{さきかけ}なるかと

人の心^{こゝろ}のときめき立つも

徒らである、そはわが偵察機^{ていさき}。

なほも希望^{のぞみ}を空ゆく雲に

托^{たく}して待つや千秋^{せんしゅう}の想ひ。

俄然^{いつぜん}！ 一点、薄帛^{うすぎぬ}の空に！

「見ゆ！」「来れり！」歓声はあがる！

かくて衆目は頓に輝く。

蒼茫たる空の中、星か、珠か

白銀の鈍光は奇しく光る。

見る、見る、珠は膨らみいでて

やがて葉巻の姿となった。

見よ！ 彗星にも似たる出現！

重き快きその翼音！

ツエッペリン！ 眼のあたり見て言なく

三歎の叫喚は胸にとよむ。

彼女は帝都の空を南北に

貫くべく真一文字に。

飛ぶに非ず、走るに非ず、

流れて滑る妙なるあゆみ！

流星か、白鳥か、彗星か

何ぞその壮にして美なる！

鴻鵠の志ここに成り、

長航実に一万余料、

今ぞ勝に誇る空艦を觀て

わが胸に感激の波は立った。

げに此の大飛翔の成りし所以は

浅からぬ碎心の努力にあった。

グラーフ・ツエッペリンは大いなる

抱負を死後に托して逝った。

その祈禱は今ぞ聴かれて

その名にし負ふ巨船は斯く飛ぶ。

今世紀の暁に初声を

あげてよりこの方四半世紀、

心血濺ぎし犠牲は深い。

一敗血にまみれし独乙国、

压制敵しき戦争の後、

国を挙げて多難なるの秋、

毫も屈せで此の壮挙を

敢行するは独乙魂！

何ぞ壮にして痛ましき！

斃れて死せざる独乙民族の

意気は空を圧するばかり、

勇者に最悪は最善なりと

詠ひし詩人の言を現に

示す国民 頼もしき哉！

庶莫！ 戦勝国なる

我が国が世界に向つて

誇るべき宝は何か！

武をたのむ者は武に亡ぶ、

物を多とする国も亦然り。

日本民族よ、今ぞ醒めて

世界に冠たる真理の国と

成るべき抱負を抱かずや！

壮烈なる夕景（一九二九・九・一二）

烈風豪雨荒れ狂ひし後、

斜光雲罅を貫きて

壮烈の気夕空を庄せしとき、

われは見つ

人生の苦闘を戦ひ終へし人の

義の勝利に輝く顔を。

聖名のため、真理のため、義挙のため、

生命捧げし人の血潮を。

而して噫かの

十字架上の雄叫びの聖姿を。

敗残の魔雲を睥睨しつつ

真紅の陽は没し終んぬ。



沼津浜辺の残照

自然 (一九二九年九月)

霽れては碧玉と澄みわたり

時雨^{しぐ}れては寂しさを吹息く空。

真昼には緑に匂ふとも

日暮れては静けく眠る森林^{しんりん}。

樹々の梢を離れて高く

瞬^{ひととき}く星の涼しき眸^{ひとこころ}。

うす絹^{ぎぬ}の帷幄^{とばり}をひき揚げて

東^{ひんがし}に立ち登る晨^{あした}の陽。

枝垂柳^{しだれやなぎ}に囁^{ささや}く風は

やがて慳^{かし}をも倒さん疾風^{はやて}。

漣^{さざなみ}の如く漂ふ雲は

変れば怒る雷霆^{いかづち}の雲。

細く虧^かけては美人の眉も

恥^{ひやくこう}ちらうはかの白光^{びやくこう}の月。

春夏秋冬のめぐりに応^{こた}へ

咲きてうつらふ種^{くさぐさ}々の花。

なべてのものは一つとなりて

大いなるホーム「自然」をつくる。

生けるものの大庭となりて

創造主^{つくりぬし}のゆえ人類^{ひんるい}には侍^{つか}ふ。

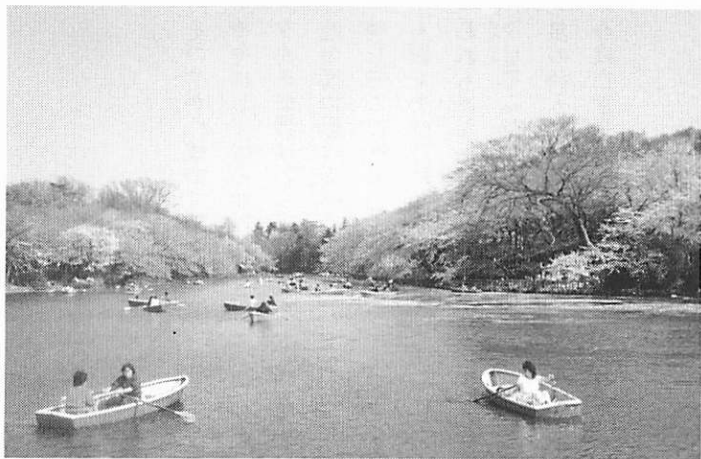
げに豊かなるは「自然」の姿、

平凡^{へいふた}にして非凡なる者。

ああ、わが驚異と愛慕の友よ！

汝^な微^なかりせばわれは枯死せん。

汝、共にせよ、わが悲嘆^{なげき}と
祈りと聖名の讃美をば！



井の頭の池：櫻花爛漫

井の頭の池（一九三三年春）

木の間洩る日光は流れ、
湧き出づる泉に映えて
きらきらと波は綾織る。
その流水橋をくぐりて

東の瓢池へと

流れ入る藻草ゆるがせ。

この池の鳥も魚も

新鮮なる水を糧とし

おのづから生い立ちてゆく。

欄干に倚りて覗けば、

ゆるやかに緋鯉と真鯉

列をなし妙へに遊ぶも。

そのすがた眺めて飽かず。
ややにして陽の傾けば

夕映えに雲は彩り

池の面に影は揺めく。

美しやこの夕景色！

人影もまばらになりぬ。

われもまた帰路を辿れば

夕星ぞみ空にかかる。

星の詩人ダンテを想ひ、

今は亡き長兄の偲ばゆ。

黄昏の瞑想 (一九五〇年三月)

夕されば富士の峰著く紫を帯び、
相模なる山なみこれが裾に連りて、
大和画の山さながらに浮び出でたり。
茜さす入陽に映えて漂ふ雲は
閃きて、その黄金色この世のものは。
親しめるわが西空の今日の眺望や。
生れしよりここ武蔵野に四十路あまりを
明け暮れてわれ幾そたび夕と語りし。
黄昏の千変万化極まりを知らぬ
彩雲の相貌を飽かず幾度望み見し。
あるときは詩篇に崇高き創造の神を、
あるときは預言に深き終末の神を、

想うては歴史の空を天翔ける哉！

時にして真紅の色に空のかがよへば、
仰ぎ瞻る、わがむら肝の心の眼は
贖罪の十字架のみ空に立つを。

ゴルゴタの丘に溅ぎしイエスの血潮に
罪の我れひと度び死にて救はれし哉！
時にして金箭美しく西より放たれ、
孤を描きつつ東の空に曙光を呼べば、
復活の晨を迎へて歎びし婦女の
驚異にわが眼あやしみわが胸躍りて、
エマオへの黄昏の路をかの旅人の

道伴れと自らなりて語り給ひし

なつかしのわが主イエスの声を聞く哉！

時にしてむら雲そらを貫きて立てば、

その昔ヨセフの族をエジプトの地より

呼び出だし曠野の旅を親しく導き、

昼にして雲の柱を道標となし

夜にして火の柱を狼火とうち立て、

渴えには岩の腹より清水を湧かしめ、

飢えし時風の翼にマンナを運び、

おのが民イスラエルをば深く願ひて

あはれみし曠野の神を憶ひみる哉！

あはれみの神にしあればシナイの山にて

契約の確立のために律法を賜ひしぞ。

怒りては不義を碎きて雷霆の如く、

恕しては罪を担ひて羔の如き

義と愛の神の心は選ばれし民の

比類なき歴史を語る聖書に読む哉！

その民の幕屋と共に曠野の旅路を

約束のカナン目指して歩みし神ぞ

今日もなほ我らと共に往きて倦まざる

易りなき信実のみ神。神よ、今ここに

聖霊もて来臨み給ひて汝れの現実を

現世にゆきわたらしめて絶えず新たに

曠野なる世のただなかにサフランの花

咲き匂ふ汝が緑野を繰り展べ給へ。

さはれ見よ、今し世紀の半を過ぎて

妖雲の空に動くを。——そのいぶけさや。

戦乱を三度起こさば、あはれ人の世は

嘗て見ぬ地獄と化して滅び果てなん。

世の人よ、心を裂き、剣を棄てて、

歡喜の平和の光を地の極にまで

あまねくぞゆき亘らせん、かたみに赦して。

然らずば、言ひ開きなきこの罪の世は

終末の審判に遭ひて碎け果てなん。

主イエスよ、来りたまひて、この天地に

新しき汝の聖國を来らせ給へ！

その夕、どん底を往きし誠の人間に、

碎けつつ十字架の愛を生き抜きし人に、

聖名ゆえの讃歌は揚がらん、管絃は響かん！

全天の星辰は応へん、深淵はどよまん！

虹 (一九七二年二月)

赤倉の夏！ といっても、
誰にもわからない。

そのようにどの人にも、
その人でなければ通じない
なつかしい想い出があるものだ。

とかく病弱だった水高時代、

母の教へ娘(こ)が嫁いださきの

高師附属中学の大先輩齊藤力さんが

一夏私を赤倉で

保養させてくださった。

あの底ぬけの親心は

私の胸の中に生きている。

暑い暑い夏の東京から

赤倉の高原に登りついたその日から

俄然食欲が盛りあがったことを

妙に憶えている。

ある午さがり、雷雨一過のあと、

陽が妙高山に傾きかけた頃、

東のかた野尻湖の上空に

大半円を描いてあざやかに

大虹霓が現はれた！

しかもそれは二重の虹だ。

紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の主虹の美、

その順をさかしまにした副虹の妙。

外輪はややにうすれはしたが、

内輪はあやしきまでに消えない。

飽かずながめること小一時間！

こんな虹は私の生涯に

これが始めて終りであらう。

「われは始めなり終りなり」の

主の徴であつたかと今にして想う。

超絶の空間を走る陽光は無色白光の光、

み空に満つる水滴もまた無色透明の玉、

無色の玉を貫いて反射する

無色の光が七彩に変現する。

七彩に宿る無限の光彩。

過ぎゆく美にこもる永遠の美。

妙えなるかな靈しきかな

天地に架する虹のすがたよ。

無即無限無量！現象即本体！

靈的福音の真理の象徴！

一切の概念、イデオロギーを超絶するもの、

さればこそ一切の概念、一切の現実、

一切のイズム、イデオロギーを包摂する。

それがキリストだ！

いらくさの谷を涙ながらに渡り、

ごごしき山路を喘ぎつつよち登った人は、

高峰の花園に歓呼の声を放つ。

艱難を突破した勝利の人生。

雷雨のあとにかかる虹。

ノアの洪水のあとの契約の虹。

雷雨の最後の審判のあとで

靈虹の終末の大希望が成就する。

——「ハレルヤ」誌第二六号

大學よ！

(一九二九年三月三日夕)

塵の都に聳え立つ

真理の城よ大學よ、

春風立ちて期満ちて

離別の朝は迫り来ぬ。

想へば速き三年かな、

胸の高鳴る昨日今日！

学問の府の生命なる

書籍の森を蔵めたる

大図書館の眼鏡に

夕陽の光映ゆるとき

歴史と創造ゆたかなる

わが母校たる東大よ

學徒の詩想を祈れかし、

み空に星のきらめく夜

真理の黙示をねぎまつれ、

陽光東方に昇りなば

義の一日を祈念せよ。

口には言はねど感恩の

想ひに添へてこの願望、

離別を惜しみて贈るなり。



1954年（S.29）春 東大教養学部校庭にて LII 3 B担任クラス 入学当時

七夕の霊夢

——一九七六年七月八日作

みどりなす田畠を過ぎて
山路縫い森かげ往けば、
村里ははや見えわかず、
午さがり陽ざし和めり。
更にまた谷にくだりて
岩走るながれに掬めば
あつき咽喉水にうるおう。
谷づたい辿りて往けば
吊橋のたもとに着きぬ。
瀬を早み岩にせかるる
滝川のわれても末に
会うという水の豊けさ。

吊橋をゆらゆら渡り
対岸の路をのほれば、
あなうれし高原なるぞ。
西の方ふりさけ見れば
夕陽影山に暮き、
山里の入相の鐘
いと妙に響き渡れり。
宵闇の空に冴えゆく
星影を仰ぎてあれば
天の川霊しく耀よう。
彦星と織女星の
年ごとの恋路を渡す

白鳥の翼の影か、

北天の十字の星座！

草枕旅のかり寝に

祈り入る、夢の夢路や！

パラダイス、百花繚乱！

咲く花は見る見るうちに

天女のすがたに化しぬ。

虹の如、薄衣まとい、

蝶の如、舞いて踊るよ、

美しや、夢か現か！

陶然と眺めてあれば、

四組の天女来たり、

風車なる四つ翼の如、

クローバの四つ葉の如く、

輪舞して我れを囲めり。

羽衣の聲は薔薇か！

十字架の陣形なして、

微笑みて歌い始めつ。

歌声は靈雲に飮す！

その歌詞は「歌の歌」なり。

あな不思議、羽音の聞こゆ、

そのすがた鳩にぞ似たる。

聖霊の翼かこれは！

聖翼は我を蔽へり、

わが腕翼に化しぬ。

天女の指示のまにまに

風に乗り天翔けりたり。

オアシスの幕屋の前に

天女は我れを導き、

歌いつつ飛び去りてけり。

歌声は「再た会う日まで！」

仰ぎ見る十字架の門！

あなまぶし、聖靈の光！

おのづからわれは平れ伏し、

天涙に咽び泣きけり。

オアシスの瑞穂の生うる

活泉にわが身心は

若やぎて不死身の如し。

聖声あり、「平安汝に！」

ありがたや、「南無基督！」

ややありてふりさけ見れば、

美しや虹の天橋！

永遠の契約の虹。

「今日よりぞ汝は我と

永遠にバラダイスなり！」

「聖民われ、聖名にありてぞ

聖靈の四大と成りて

身証せん主の福音を、

曠野なる旅の果てまで。

天界の預言者たちよ、

使徒たちよ、我れを助けよ！

詩の国の断天・芸天よ、

偉大なる詩魂を頒けよ！」

讚美歌の「山路越えて」と

かの聖歌「いつかは知らねど」

たからかに独り歌えり。

歌声に夢は破れぬ！

夢にして夢には非ず、

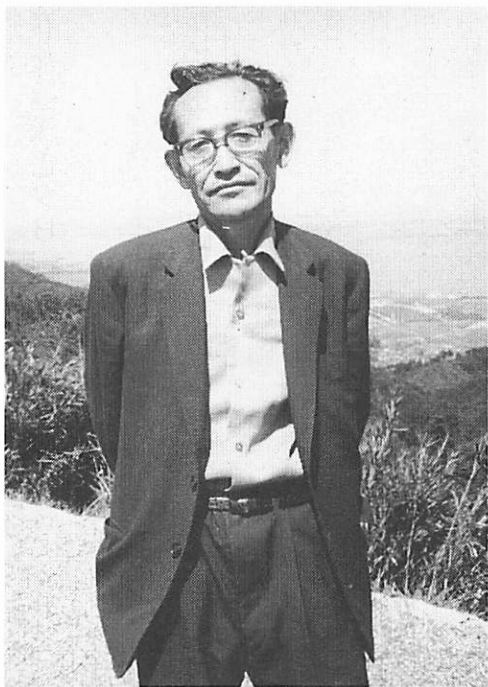
根源の現実に存りき。

主に在りて、我れ生き動き

在りてこそ身証はあらめ。

キリストの無者たる孤軍、

いただくは天の万軍！
栄光は主にこそ在れや！



キリストの無者天震

春なほ浅き夕日影 (一九七七・三・二〇)

——井の頭公園を散歩して——

(「春爛漫」一高塚歌の歌詞にて)

一 春なほ浅き 夕日影

池の端^はつたひ さまよへば

水鳥滑る 小波^{さざなみ}よ

石橋の上 ただづみて

感慨無量 今もなほ

胸中^{みみち}に映る そのかみよ!

二 白梅紅梅 咲きみだれ

道往く人に ほほえめば

人の心ぞ なごめらる

花こそ愛の 姿なれ

天地有情 限りなく

青春に生く われなるか

晩秋の伊豆の旅

作詩一九七六年十一月七日天極道、歌調「荒城の月」十一月五―六日 谷津温泉 一泊旅行記念

一 ああ晩秋の伊豆の旅

車窓^{まど}べに倚^よりて眺^{なが}むれば
尾花^{おな}の穂波^{ほな}美^うしく
蜜柑^{みかん}の岡^{おか}の美果^{みか}に映^{うつ}ゆ

二 ところは何処^{いづこ}南伊豆

古風^{こふう}床^{ゆか}しき宿^{しゆく}に入り
温泉^{いづゆ}の池^{いけ}に跳^はり込^こみ
いとも楽^{らく}しく泳^{およ}ぎけり

三 夕餉^{ゆうげ}の席^{せき}におさまれば

鯛^{たい}や鮑^{あわび}や名^なも知^しれぬ

珍味^{ちんみ}づくしに龍宮^{りゅうきゆう}の
お伽^{おとぎ}の国^{くに}の心地^{こころ}せり

四 談話^{かたぎ}尽^つきせぬ夜^よなる哉^や

時計^{とけい}も止^とまる永遠^{とこは}の今^{いま}
ここ^{ここ}に集^あふは幕屋^{びと}人^{ひと}
聖書^{せいしよ}読^よみ歌^{うた}ふたからかに

五

岩^いかげに湧^わくあたたかき
温泉^{いづゆ}に揺^ゆぐ湯^ゆのけむり
夢^{ゆめ}か現^{うつ}か美^うしき

歌声ひびく小夜の曲

六

「わが名に在りて三三人
集ふところに我ぞ在る」
主のエクレンシアさながらの
今宵の集ひ身には泌む

七

げに天国の前味よ
夜は更けゆけど時知らず
臥床の上に端坐して
祈れば異言靈歌なり

八

枕ならべて語らへば
言葉の奥のひびきすら
友らの胸にこだまして
絶言絶慮バラダイス

九

人みな眠る夜半の夢
夢路に懸かる虹の橋
わたりて往けば天国の
光の門ぞ開きける

十

信頼深き友ら哉
天城おろしの朝風を
裸形に受けて岩風呂の
火山の湯にてバブテスマ

十一

帰る路べの海岸に
降り立ち見れば大洋の
男波女波の寄せ返る
潮の音ぞ身には泌む

三

若き友らにさそはれし
この伊豆の旅忘れめや
友情あつきコイノニア！
天を仰ぎて聖名を讀む



真鶴岬の尖端にて

ある秋の京都特別集会

(一九七七年十一月三〇日作)

天鐘

鴨の河べの 由緒ある

教授の家は わが宿よ。

豆腐晚餐 珍らしや

舌もとろけん ばかりなり、

これぞ教友 豆腐職

手塩にかけし 品々よ。

二階座敷の 語らひも

名残り尽きせぬ 夜のわかれ。

朝餉あさけそこそこ 伴れ立ちて

指し往く方は 嵐山、

晩秋惜しむ 紅葉狩り。

個人タクシー うち乗れば

み門の廟みやうや 名門の

奥津城おくづきどころ つれづれに

語り聞かする 運転士。

西へ西へと 丸太町

果つるところは 渡月橋。

橋のたもとの 樹立かげ

わが国最古の 電話箱、

苔蒸す茅かやの 屋根の下。

橋を渡りて 当てもなく

川添ひ道を 辿りゆく、

紅葉を賞でて うち興じ

友は写真機 とりいだし

記念撮影　ここかしこ。

踵を返して　街の中。

まづ訪ねしは　土産店

清水焼きの　ブローチの

コスモスの花　あな美しき。

次に入りしは　扇子店、

無の字つらなる　般若經

記念はよしと　購めけり。

時計を見れば　ひるげ時、

最寄りのそば屋に　立ちよりて

汁物すすれば　こは如何に

京の味はひ　ことのほか。

再びくるまの　人となり

東指して　ひた走り、

教授の館に　もどりけり。

一九七七年　霜月の

二六の夕　近づけば、

東西南北　日の本の

津々浦々ゆ　集ひ来し

兄弟姉妹　数うれば

八十あまりなる　ヤソの徒よ。

大和屋旅館　家鳴りか。

第二イザヤの　偉大なる

詩書こそよけれ、講筵は

み霊み言　滔々と

あふるるなべに　告白の

言葉も波か　風の音か、

語るも聴くも　へだてなし

妙好一如に　融け入りぬ。

天韻靈然　三講筵！

「エホバの僕」　体现の

十字架の主を 讃美する

ゲルハルト等の歌曲をば

独唱したる 歌姫の

靈歌のひびき 胸を打つ。

三兄弟の 三司会

これまた靈妙切々と

全会衆の 胸を打つ。

祈禱いのちに入れば 天を衝く

讃美の叫び 相繼ぎて、

異言靈歌も 迸る！

感話証言の 集ひには

感激の波 泡だちて

満座の面々 うれし泣き。

件くだんの如く 結び歌

「いつかは知らねど」、肩を組み

どよもし歌へば 身も魂たまも

南無キリストと 天界に

躍り入りたり ハレルーヤ！

離別わかれを惜しみて 三三、五五、

み霊に溢れて 帰路につく。



召団の兄弟姉妹たちと共に

櫟^{けやき}よ

(一九八四年十一月十八日)

即日即詠 天樹

敷地の北の片隅に

いつの日か どこからか

一粒の種子が

風に吹かれて落ちたのだ。

殻が破れた、人知れず。

根が生えて芽が吹き出したのだ。

いつの日か

若木が生えているのに気がついた。

ああ、これは実生だな

何の木だろう、

葉っぱの形でわかった、櫟だな！

年々歳々

知らぬ間に伸びてゆく。

近くにはわが家の歴史を、

遠くには時局の変転を眺めながら。

木枯^{こがれ}が吹き始めると、

枯葉が散ってゆくハラハラと、

呻きか、嘆きか、諦めか。

春風が吹くと、青葉が光る。

生命の歓びにさゆらぐ若葉よ。

声なき声が ゆたかに歌う。

万象流転の春秋よ、

もうこの武蔵野に私は

六十余年も住んでいる。

櫟よ、おまえも還暦を迎へたろう。

なつかしき時空よ！

両手で抱えられない巨木だ。

いつまでも亭然と

北の角の徴として

おまえは聳え立っていて

欲しかった。

ところが この度び、親子のため

第三書庫新設となり、

伐らねばならなくなった、どうしても。

噫！ 私は嘆息した。

植木屋の来る前に

ひとり ひそかに

おまえに抱きついた。

おまえの肩に接吻をした。

永い間 ありがとう、ありがとう。

ゆるしてくれよ、おまえを伐るのを。

おまえの雄々しい姿！

それは決して忘れない。

いつまでも眼前に髣髴としてくるだろう。

櫟よ、私の中に

すがたもろとも生きてくれ！

生命の友情だ。

涕涙しばし。

神に祈った。

平安が来た、力が来た。

おまえが電気鋸で

伐られてゆくありさまを

じーっと視つめていた、

すさまじい電鋸でんのこの音！

おまえの号泣だ、

否、おまえのは沈黙の号泣だ！

瑞々しい木髄よ！

上なる枝からだんだん下へと

網で吊されながら斬られてゆく、

幾いくつも太い枝が、そしてすごい幹が。

とうとう地上数センチの姿と化した。

塩と酒とをふり濺いだ、

そして折った。

一粒の種子が地に落ちて破れ、

数十年輪の巨木と成って

北の角にわが家の

一つの徴となっていたが、

今や一九八四年の晩秋に

喬木の姿は消えた。

だが見ていてくれ！

どんな巨人が

巨木のおまえのように

私のたましひの中から

立ち現はれるかを。

春のいのち

Tatsuo Koike, 1985. 2. 26.

ゆきわり そ う が や まにも え
こ ざくら そ う が の にわら い
ち ぶさに す が る こ ひつじ の
す が た は は ー る の い の ち か な

作詞：天韻、作曲：天漢 楽譜製作：市川りり子 〔註〕「天漢」とは天の川のこと、私の号の一つ「星一つ」は宵の明星

春のいのち

- 1 雪わり草が 山に萌え
小桜草が 野に笑ひ
乳房にすがる 羔の
すがたは春の いのちかな
- 2 池の真中に泉湧き
緋鯉真鯉の 往き交へば
歌ひて躍る 若人の
すがたは春の いのちかな
- 3 宵闇迫る 西空に
かがやき出でぬ 星一つ
神話伝説 ゆたかなる
すがたは愛の 神秘的な

視よ此の人ぞ！

Tatsuo Koike, 1985. 2. 28.



作詞：天韻、作曲：天漢 楽譜製作：市川りり子

視よ此の人ぞ

1 ああベートヴェン！ 生涯の
彼の涙を 誰か知る

「第二の我」は 遂に無し
この世は仮りの 宿なりし

2 音はひびけど 音の無き
旅路を独り 辿りつつ

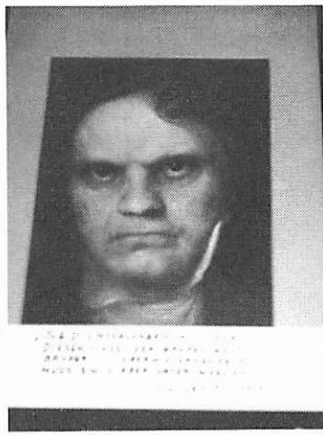
森と小川を眼にて聴き
「バスターナル」を 奏でたり

3 見よ此の人ぞ！ 孤独なる
音の芸術の 巨匠なり

なやみ苦しき つき貫けて
世に投ぜしは 「第九」なり

4 孤独なれども その心
力と愛に みなぎりて

あらゆる人の 胸をうつ
音曲の波は かぎりなし



SCHILLER BEETHOVEN

Seid umschlungen Millionen!
 Diesen Kuss der ganzen Welt!
 Brüder—überm Sternenzelt
 Muss ein lieber Vater wohnen.
 —SCHILLER

第九交響曲第四楽章の合唱の一句
 (269頁参照)

五

玉髓集
(訳詩集)



ROBERT BROWNING (1812—1889)

玉 髓 集（訳詩集）

彼岸訳

人生の歌 ロングフェロー（アメリカ）

（A Psalm of Life—Longfellow 1807-1882）

序 詞

わが訳詞つたなけれども

泰西の詩人たちの

言霊の翼に乗りて

同心の人々よ！ 共に

詩の国へ天翔けりゆき

靈感の泉水に飲みて、

地の旅の渇きいやさん

★

言う勿れ悲しき調べに、

「人生は槿花一朝の夢！」と。

魂魄まどろみて死に似たるとも、

見ゆるところは真相に非ざれば。

人生は真実なり、人生は厳肅なり。

瑩穴いかで終結ならんや。

「塵より出でて塵に還る」

そは靈魂の謂にはあらず

楽しみも悲しみも

わが命数にも道路にもあらず、

路は実存にあり、明日の我は

今日の我を乗り越えてゆく。

芸術は劫く時世は流る。

われらが心臓縦し堅くして勇むとも、

音もかそけき鼓の如くつねに奏つ

奥津城に到る埋葬の曲を。

此世の戦の広き場にて

人の生命の露営の野にて

もの言はぬ牛馬として駆らるる勿れ、

戦闘の丈夫たれよ！

楽しからん後の日をたのむ勿れ！

逝きし死をして死を葬らしめよ。

働け！ 働け活現の今！

衷に心情あれ、上に神在ませば！

偉人の生涯を想ひては

われらが生を崇高になし、

離別に臨みて我らも

時の砂漠に足跡をとどめばや。

足跡、そはおそらく兄弟の、

人の世の蔽かなる海原を漕ぎゆきし人の。

これを見て寄るべき難破の者は

再び勇み振ひ起つらん。

いざ我ら起ちて為さむ、

万難に耐ふる心根をもて

愈々達しては愈々追求め、

働くを学び、待つを学ばん。

★

貫け！ アイヒェンドルフ（ドイツ）

（Durch！ — Eichendorff 1770-1850）

鷺一羽、弓なす断崖に立ちてあり。

みはるかすわだつみを越えて暴風の呼べば、

すでにして大空高く舞ひて昇れり。

岩が根の、その巢速くも見えわかず、

瞰下せば、くるめくばかりの下界なり。

杳として霞むは森か、陸か海べか。

大空に限界はありや、

この鷺は、いや高く翔りてやまず。

★

虹 ウォーヅウオース（イギリス）

（Rainbow — W. Wordsworth 1770 - 1850）

わが胸は欣び躍る、

大空に虹をし見れば。

人生の曙に然かりき、

成人の今も然かあり、

老年の暮も然かあれ。

然らずばわれ死なまほし！

幼児は成人の父ぞ。

魂極る生涯の日々を

結びてよ生来の虔心。

★

メイフラワース 五月の花

ジョン・グリーンリーフ・ホイッチ
ヤー・八〇七—一八九二（アメリカ）

The Mayflowers, John Greenleaf whittier
1807-1892

フラワースと複数形になつてゐる。

—訳者注—

惨ましき『五月の花』よ 冬の星に見守られ、

冬の疾風に育くまれたる。

檻に震の花散りかかり

帆布は凍れる木の葉と化れる。

斯かるもの憂き期にして、

氷結べる入江の中に、

野育ちの五月に笑ふ初つ花と

如何なる業をか共にせし。

而も「栄光は神に在れ！」と巡礼者

蕉色の枯死せる葉末を打ち越えて

萌え出づる花を見出でて

「見よ我らが『五月の花』此処に在り！」

匂ひ纏ふアービュータス、五月の花は

プリマスの界限に夥しく生えてゐる。

而もこれこそはかの巡礼者をその怖ろ

しかりし冬の後に飲び迎へた最初の花

であつた。「この詩の題は即ち巡礼者

を乗せて大西洋を横ぎりたる帆船メ

イ・フラワー号と、彼ら清教徒を迎へ

たる野生の權木にしておらんだ莓の類

なるアービュータス（彼らはこれを船

名に因んで同じくメイ・フラワーと呼

ぶ）の両者を意味する様に、ザ・メイ

聖旨は曰く、我らの青山此処に在れ、

我らが旅路の幾年も、

我らがために海原の「五月の花」は

再びその帆をうち張る勿れ」と。

おお信仰と希望の聖き花、

昔の如く美はしく

許多の樺山の里に咲き

松の小暗き谿村に咲く。

参差の海岸つづく後方に

葉も亦凋まず易りなし、

古への武き英雄の

雄々しかる力に宿る愛の如。

祖先は斯くも後裔に生く。

その確き信は我らの有なり、

その剛き力より溢れし愛は

我らの衷に花咲きにけり。

巡礼の客に暴風吹きにし冬の日に

面影は消えせじ我らの身辺に、

「五月の花」の荒れにし浦にありし日の

患難は我らの自由の源ぞ。

さはれ陽、春を呼びては遠からず

凍れる陸に生命を齎し、

斯くて希望の失せにし葉より

新たに萌えなん神の花

——一九三三年二月二十四日夜八時、日直勤務中、幼年校

生徒監室にて、訳之。

「アソランド」跋詩

ブラウニング（イギリス）

(Epilogue to Asolando — R. Brown-
ing 1812-1889)

おお、かくも愛し愛せられつつ、

なほかくも誤解を受くるとは！

我はそも、怠慢、懦弱、卑怯者と

何の關係ありし、

目的なく能力なく希望なき人々の如

我ら徒らに生を送りしや

そも何者として我れは生きし。

熟睡時、夜半の沈黙に、

夢覚めて、君らが空想を馳するとき、

その空想、飛びゆくか

痴者の妄想の場へ——

嘗て君らをかくも愛し、

君らにかくも愛されし者、

死に囚はれて伏すと想ふか——

然かく我を憐むや。

断じて背を向けしことなく、

真向ひに突き進み、

むら雲の霽れゆくをつゆ疑はず、

正義の不況にも邪惡の勝利を

夢みしこと嘗てなく、

倒るるは起たんがため、

挫折るるは更に善く戦はんため、

眠るは醒めんがためと確く信ぜし者ぞ。

われ滄溟に乗り出でんとす。

然り、真昼時、活動繁きたた中に、

潮揺ら揺らと眠るに似たり、

去り逝く者を歓呼して送れよ！

満ち満ちて音もなく泡沫もなし。

向背は問うにや及ぶ、ただ命ぜよ前進を。

涯知らぬ沖より寄せし潮波

「敢闘！ 栄光！」と呼べ。また叫びてよ、

今し大洋に還らんとす。

「勇躍、邁進、絶えず前進、

彼岸なほ 此岸の如く！」と。

黄昏れてのち晩鐘の響あり。

★

そのあとの宵闇や！

砂洲を過ぎりて

テニスン（イギリス）

離別の悲歎なからまほし、

われ船に移らんとす。

（Crossing the bar — Tennyson 1809-1892）

時空の限界を超えて悠けく

陽落ちてのちの夕星や。

海潮われを運び去るとも、

さやけき声の我を呼ぶあり！

砂洲をわれ過ぎてし往かば、

砂洲の口にて悲歌をな奏でそ。

水路標する我が君を目交ひに見ん。

〔註〕「水路標する我が君」(my Pilot)とは

キリストのこと。

★

矢と歌 ロングフェロー

(The Arrow and the Song) — Long-fellow

旅人の夜のうた ゲーテ (ドイツ)

(Wandrer's Nachtlid — Goethe 1749-1832)

山嶺はみな
静寂もれり。

木ぬれはなべて

いみじくも

吹息憩へり。

小鳥は森にはや啼かず。

待てしばし、ほどもなく

汝れも休安らふ。

★

われ空に放てり矢を一つ、

そは地に隕ちぬ、何処かは知らず。

いとも疾く飛び去りて、眼の

その跡を趁ふべうもなかりけり。

われ空に吹息きけり一つの歌を、

そは地に隕ちぬ、何処かは知らず。

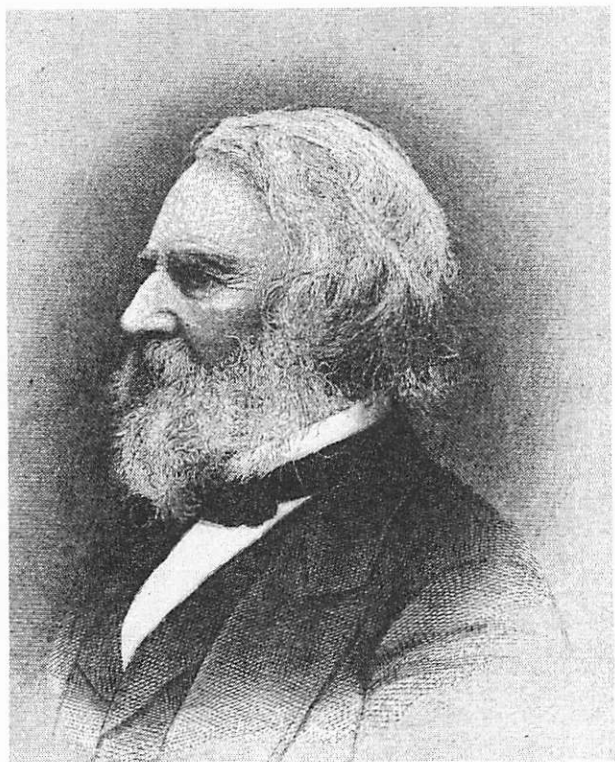
誰が眸か鋭くまた強からん

うたの翼に追ひしくほに。

永く永く時を経て、一本の櫂に

われは見出でつ、かの矢折れでなほ遺れるを。

またかの歌を始めより終りまで
われは見出でし、一人の友の心にぞ。



H. W. LONGFELLOW (1807—1882)

村の鍛冶屋

ロングフェロー（一八三九年作）

枝を拵げた栗の樹かげに

村の鍛冶屋の家がある。

鍛冶屋はいとも健き男、

両手は大きく筋ばってゐる。

その逞しい腕の筋肉は

強くて鉄の帯のやうだ。

その頭髮は波立ち、黒くまた長く、

その顔は榎の皮のやうだ。

その額はまめなる汗で濡れ、

彼のかせぎは自力のものばかり、

世をすべてまともに彼は見る、

何人にも彼は負はぬから。

一週また一週、朝から宵まで

彼の鞆の息吹が聞こえる。

彼のうち振る大鎚がひびく、

おちついたリズムで打ってゐる、

それは夕陽が傾いたとき

寺男の打つ村の鐘のやうに。

子らは学んで家への帰るさに

開いた戸口で覗き込む。

彼らは炎える炉が見たく、

また鞆の唸りが聴きたいのだ、

飛び散る靱殻のやうに、打たれる根太から

散る火の子を捉へたいのだ。

日曜には教会に彼はゆき、
彼の男らは雑まじつて坐る。

牧師が祈りまた語るのを聞き、

また村の唱歌隊の中に

唱ふ彼の娘の声を聞き、

彼の心はそれを欣ぶ。

それはパラダイスに唱ふ

彼女の母の声とひびく、

彼は思はざるを得ぬ

彼女は どうしてゐるのだからと。

その強い疎かい手で彼は拭ふ

彼の目の涙滴しづを。

勞はたきながら——飲のびながら——悲しみながら

彼は人生を前すみゆく。

晨あさごとに何ごとか始められ、

夕にはその終るのを見る。

何ごとか企てられ、何ごとか果されて

一夜の眠りを彼は贏かち得る。

有難う、有難う、わが貴い友よ、

汝はよきことを教へてくれた！

斯く人生の炎ゆる炉で

われらは鍛へらるべきだ。

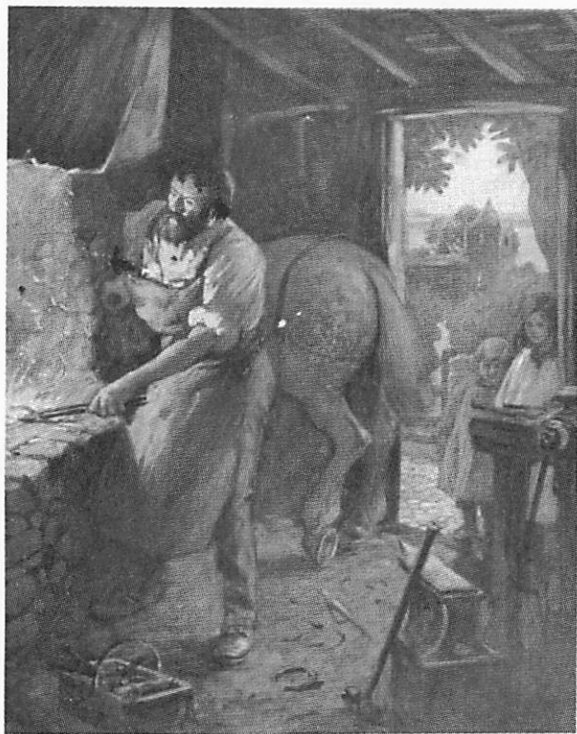
斯く人生の鳴る鐵床かんとこでつくられるのだ

燃ゆるが如わき業わざと思想おもひは！

(一九三二・一一・一七訳「羔」第二号)

〔當時の註〕

中学時代に愛誦した詩である。最後の二節、就中最後から二節目が好きである。信賴の平凡な生活であるが、此の如きが基督者生活の基調であらう。神の眼に嘉せらるのはいかゞ正直にその日その日を働く人であらう。



村の鍛冶屋

「更エクセルシヤに高く」

EXCELSIOR
ロングフエロー（一八四一年作）

夜の張とばりは速すみやかに降くだり、

アルプスの村を若人わかうと一人過過ぎぎゆく、

雪また氷のさなかを小旗かざ翳かげして。

奇くしき金言きんごんこれに記しされてあり、

「更エクセルシヤに高く」！

彼の額ぬかはもの憂うれく、その眼は伏すとも、

鞘さやを払はへる鎌形かたがねの釧くわと閃きらめき

白銀しろかねの喇叭らふと響ひびくは

見知らぬ国語こくごの調しらべへ

「更エクセルシヤに高く」！

楽しき家々に彼は見たり

団欒の光和やかに輝くを、

上には氷河の光各様に映ゆるよ、

彼の唇を洩るゝ呻うめきは一つ、

「更エクセルシヤに高く」！

「この山路を越す勿れ！」翁は諫めぬ、

「上なる暴風あらし吹きおろし、

狂あやふ流水ながれは深くまた広し！」

さはれかの喇叭らふは声高く応へぬ、

「更エクセルシヤに高く」！

「やよ止とどまり給へ」乙女は言へり

「汝なが疲れし

頭かうべをわが胸に憩やすはしめてよ！」

泪一つ浮うびぬ空色そらいろに光る彼の眸ひとみに、

さはれなほも彼は答へせり、呻きつつ、

「更に高く」！

「松が枝の萎え垂れたるを心せよ！

おそるべき雪崩に心せよ！」

農夫のこの挨拶は最後のものなりき。

声あり一つ、遙かなる高所より、

「更に高く」！

夜明け頃、空に向け

聖ベルナルドの虔しき修道僧

祈禱を繰返し唱へしとき、

声一つ叫びぬ、大気を震はせて

「更に高く」！

一人の旅人の雪中に半ば埋もれるを、

その忠信なる犬は見出だしぬ。

凍れるその手は尚も握りて在りし、

かの奇しき金言の小旗を、

「更に高く」！

寒く小暗きあけぼのの空の下

息絶えぬれどなほ美しく彼は臥せてあり、

澄みて遙けき空よりは

声一つ響く、流星の隕つる如くに、

「更に高く」！

——一九三二・一二・三〇——

〔当時の附記〕 真理を追ひ求めてやまざる精神、青年の

意気、須らく斯くあるべし、斃れて而して後已まんのみ！

（訳者所感）

「愛アイ 蘭ランドの曲調しらべ」より

トーマス・ムーア（一七七九—一八五二）

彼女は住まふ若き英雄ますらをの眠れる国をば遠み、

彼女を囲む恋の心はなげけども

彼女情なく恋の眼まなこを避けて泣く、

その心は彼の墳墓かみにこそ在るなれば。

彼女は歌ふ愛いとほしき故里たふらの民謡を、

ありし日の彼かれが愛めでにし曲調しうべの総なべてをぞ――

あはれ！ その曲調しうべ聞きて楽しむ者は知りてんや、

此の歌手うたひての心の破れ如何やばかりなるかを！

彼は愛人うなびとのために生き――祖国みの為に斃れたり、

彼をば生に繋つなぎし綱つなはこれのみにてありしなり――

その国人くにの涙速くは渴くまじ、

その愛人の生命は永く残るまじ！

おお、彼女を眠らせよ、日の光の憩ふ処に、

日の光輝く晨の希望をば契る時。

そは眠れる彼女を照らすらん、西の方

彼女の愛でにし悲哀の陸ゆ来りし微笑の如！

〔附記〕 この詩は私の愛読書ワシントン・アーウィングの「スケッチ・ブック」にある「破れたる胸」（「失恋」と訳すべきに非ず）に引用されてあるもの。

（一九三三年五月訳、「燕」第七号）

彼、
齡二十三に達せしかば
ミルトン（英国）

（此のソネットを「願」の花の咲き出でし日五月二十五日の記念に。その第二十三の日に共にこの詩を読みしことも盥すし。）

いかに速くも「時」は、若き日のさかしき盗人は、

わが第二十三の年をその翼に盗みたる哉！

わが日はいとも速やかに惶しくも飛びゆく乎、

わが春は暮れゆくに芽も出でず花も開かず。

おそらく我が容貌はあざむかん、

我れのかくも成人に近づきし事実を。

また更に、期に適へる精神を衣るべき

内なる成熟の見ばえもなきに於てをや。

ともあれ、少なかれ多かれ、または速くとも遅くとも、

そはなほいと厳しき権衡の中に、

卑きか高きか知らねども、易らぬ命数に進むべし、

「時」と「天」の意志こそは我れを其処に伴れゆかむ。

若し吾れ恩恵を得てそを宜く用ひ得ば、

すべては常にわが偉大なる「業の主」の覧はすところ。

——一九三三・五・二七訳（一九三三年五月「燕」第七号）

〔訳者当時の附記〕

若きミルトンは、青春の日のうつろひ易きを嘆じ、謙譲なる心を以て己が未熟を告げ、自らに覚醒の自覚をうながすと共に、確乎たるカルヴァン主義の信仰に根ざして、多寡遅速の如何に拘らず、己が人生には神の定め給へる使命あるを信じ、神の啓導に恒頼し、神の照覧にまことの平安を知るべきことをしたふ。このソネットの後段は正にミルトンの魂の、然り、全ミルトンの自己告白と云ふも不可なからう。

勝利者の墓 W・C・ブライアント原作

The Conqueror's Grave.

ウィリアム・カレン・ブライアント (William Cullen Bryant) (一七九四—一八七八年) は帆船メイ・フラワー号で「新世界」に新天地開拓のため移住して来た清教徒をその祖先に有つと云はれる。祖父も父も医師であつたが、彼はその生涯の大部分をイーヴニング・ポスト紙の主筆として言論界に奮闘した。職業は此の如く新聞記者であつたが、天職は詩人であつた。「北米のウォーヅウオース」と言はれ、「アメリカ詩壇の父」と呼ばれる所以である。深みのある瞑想の詩人であり、素朴な実践の人であつた。

〔昨上賢造著作集〕第八卷、「平民詩人」の項参照

見ばえなき此の塋に 一人の勝を得し人ぞ憩ふ。

さはれ碑銘のその旨を告ぐるなく、

また此の眠れる人の名の縁に不朽の

名譽を象徴する塋の跡もなし。——

常春藤と不變花 雅びたる花束をなして

月桂樹の 美しくゆかしき葉と絡むあるなし。

唯だ簡素なる一つの名のみ

世には知られぬ此の大きいなる人のため

此処に刻まれてあり、これを囲むはただ野花。

つゝましきしもつけ草と土薫る堇花、

賤が墓石にいとほしく倚る。

此処、寂けき地に横へられし人は

その骨格、鐵の如く、その腕、血を流すに速く、

激しく怒りては国々を脅かし、

ためにおのが苛立つ心を、疲らせし者には非ず。

然かはあらで、溫柔の魂と柔軟き身の

容姿も、心情も、優しき女性の

最も優しき人なるぞ。

譴責る息吹に遭はば怖ぢて竦む人なり。

その瞳に宿るいつくしみの笑みは

五月の陽に匂ふ小川の、ほとりの花にも似たり。

さはれまた他人の痛苦を思ひ遣るとき、

その笑みは消え、情ある悲哀の影を宿しつ。

な想ひそ、此処に朽ちにし手 威嚇に翳されて

国々ために懼れ戦慄きしとは。

または雲また雲が雨期の東の空に起るごと、

三軍その号命のもとに集ひたりしとは――

白髪の将、老巧の兵と血氣の士とを帥て

元廩の饗応に供ぜんずる戦なりしとは。

然く戦はれしに非ず、此の奥津城に

在ます人に勝を与へし激しき戦は。

独りにて彼女の業は営まれたり、

独りにてその戦は戦はれたり。

永き戦の果つるまで希望は絶えず神にのみ

置かれてありき、他し援けを求むることは更になく。

群なす「悲愁」に遭ひて彼女の瞳は

その群族の有つ愁ひの眉にひしがれず、

やがてむくつけき族は宥められ、優しく

彼女の和やかなる常規は還り、眉の曇ることもなし。

なよやかなるその手、襲ひ来たる憤怒を斥け、

穏かにぞ砕きつ千々に、

燃ゆるが如き痛苦の箭幹を。

また情熱の綱をその途より斥けたり。

この勝利の手により「失望」も亦屠られたり。

愛をもて彼女は憎惡を消し、惡を征つには

喜をもつてせり、大いなる主の聖名により。

彼女の栄光は此の影の国土の属には非ず、

流るる時の推移につれて亡び去る栄光に非ず、

彼女、碧玉の門を入りしとき

如何なる喜悅やその天つ瞳には輝きし！

輝く天の真洞は歛び迎へて如何にとよみし、

また天上の花は花英をひらめかせて如何に舞ひしか！

而して彼、その昔

痛苦と侮蔑と悲哀とを負ひ給ひし彼、

かの力強き受難の人は、輝しき聖顔もて

御座よりこのかよわき旅人に微笑み給ひぬ。

彼こそは栄光の中、墓より還り、

「死」の劔を奪ひ鎖に繋ぎて、それを奴隸とせし者ぞ。

見よ、我れ此処を巡るとき、陽は低く傾き、

涼しき大気は夜の近きを囁く、

おお柔和なる眠れる人よ、汝が埜を我は去る

悲しみの中に慰めを得て、畏るるも希望の中に。

速きものは時の流れぞ、

戦を始めし人幾人かある。

而も汝が得し勝利は 人みなにゆるさる。

今も流る、汝れを強めし流れの源は。

勝を得し人の名はなほいと渺なければ

天の大きいなる巻物を充たすに足らず。汝が領たれし
栄光ある武庫はなほ開かれてあり。

★

（訳者 一高教授「燕」誌第七号一九三三年五月 手島郁郎主筆「生命の光」誌第十一号 一九四九年九月号所載）

〔訳者当時の附記〕

愛に満ち優しく奥ゆかしき女性が、此の世の荒波の中を、神に順ひ、人のために傷ついて、従順と愛の生涯を全うするとき、これにもまして美しきものありとは考へられない、これよりも大いなる勝利ありとも想へない。

宗教改革の凱歌『我らの神は

堅き城なり』ルター

ルターの傑作であると同時に、プロテスタント讃美歌の代表作であり、宗教改革の進軍凱歌である“Ein' feste Burg ist unser Gott.”「我らの神は堅き城なり」(日本語現行讃美歌集第二六七番「神はわがやぐら」抄訳)が、いつ作られたかはあとづけ難いのであるが、クルークの讃美歌集 (Klugs Gesangbuch) が刊行された一五二九年より少し前一五二六年から二八年の間と見るのが妥当と思われる。一五二九年四月二十日にシュバイエル議会が召集され、ドイツの福音的諸侯が、自由のためにプロテスト(抗議)した

ので、ルターに与する新教徒は「プロテスタント」なる名称を以て呼ばれるようになった。そのときは既にこの歌は出来ていたと思われる。

EIN' FESTE BURG IST UNSER GOTT

1. Ein' feste Burg ist unser Gott,
Ein' gute Wehr und Waffen,
Er hilft uns frei aus aller Not,
Die uns jetzt hat betroffen.
Der alt' böse Feind
Mit Ernst er's jetzt meint ;
Groß' Macht und viel' List
Sein' grausam' Rüstung ist ;
Auf Erd' ist nicht seinsgleichen.

2. Mit unsrer Macht ist nichts getan,
Wir sind gar bald verloren ;
Es streit't für uns der rechte Mann,
Den Gott selbst hat erkoren.
Fragst du, wer der ist ?
Er heißt Jesus Christ,
Der Herr Zebaoth,
Und ist kein andrer Gott ;
Das Feld muß er behalten.

一

我らの神は堅き城なり。
 攻防自在の武器なるぞ。
 今や我らは苦難に遭へど、
 神は一切の助けなり。
 かの古昔よりの悪しき仇敵
 今や真剣に抗ひ来たる。
 大なる権力多くの謀略は
 その強悍しき武器にして
 現世に彼の敵なし。

二

我らの力何をか為し得ん、
 我ら忽ち失はるべし。
 我らのために戦ふ義人あり、
 神自らの撰びの人ぞ。
 たづぬるか、かは誰れと。
 その人はイエス・キリスト、
 万軍の主なる御神ぞ。
 いかなるあだし神にも非ず。
 戦の場はその聖手にあり。

3. Und wenn die Welt voll Teufel wär'
Und wollt' uns gar verschlingen,
So fürchten wir uns nicht so sehr,
Es soll uns doch gelingen.
Der Fürst dieser Welt,
Wie sau'r er sich stellt',
Tut er uns doch nicht ;
Das macht : er ist gericht't,
Ein Wörtlein kann ihn fällen.
4. Das Wort sie sollen lassen stahn
Und kein Dank dazu haben ;
Er ist bei uns wohl auf dem Plan
Mit seinem Geist und Gaben.
Nehmen sie den Leib,
Gut, Ehr, Kind und Weib :
Laß fahren dahin.
Sie haben's kein Gewinn,
Das Reich muß uns doch bleiben.

—*Luthers Hymnus,*

三

縦ひこの世は悪魔に満ちて
我らを全く呑まんとすとも、
我らいたくは戦慄かじ。
勝利なほ我らにぞある。
此の世の君主いかばかり、
立腹に立ちはだかるも、
何ごとも我らになし得ず。
彼はすでに審判かれてあり。
聖言の一言、彼をば倒す。

四

その徒輩聖言を空しうす、
これに一念の感謝あらなく。
聖子は戦の場にて我らに与す、
彼れの聖霊と恩恵もて。
敵どもは取らば取れわが生命、
財も眷も子も妻も。
すべてのものを奪ひ去れ！
彼ら何をか勝ち得んや。
神の国こそ我らには在れ。

み使の群天降り来たりて

ルター
〈Vom Himmel kam der Engel Schar〉

一
み使の群天降り来りて、

牧人たちに頭はれぬ。

み使の言ふ、軟きみどり児の

かしこ馬槽に横はるあり。

二
ベツレヘム、ダビデの町に、

まさしくミカの告げし如くに。

そは主なるイエス・キリスト、

汝らすべての救主なり。

三
汝らまさに欣ぶべきは、

神汝らと一つになりしことなるぞ。

主は汝らの肉また血として生れましぬ

この長兄は汝ら永遠の宝ぞ。

四
罪も死も何かなし得ん。

まことの神汝らと階に在ませば。

悪魔も地獄も怒るにまかせよ

神の子は汝らの味方となりしぞ。

五
彼は汝らを断じて棄て得ず、

彼に信頼を投げかけよ。

試惑は縦し多くとも、

彼にこそ防護はあれ、彼は棄て得ず。

六
汝らは終に義を獲べし、

神の族となりたればなり。

このことを永遠に神に感謝せよ

つねに耐え且つ歎びて。

歓喜よろこびに寄よす

An die Freude シラー（一七八五年）

歓喜よろこびよ、神々の美うつくしき火花はなよ、

楽園えんに生なれ出ででし娘むすめ子こよ！

われら情熱じやうねつの火ひに酔ようて

汝なが神殿かみどのに踏ふみ入いらん、天あまつ乙女おんなよ！

汝なが魅力みんりきは結むすびかへさん、

時流ときりゅうのきびしくもへだてしものを。

人はみな同胞どうぱうとなる、

汝なが柔翼やうよくの憩やすみうところ。

合唱

相抱あひかかけよや千万ちやうまんの人々ひとよ！

この接吻くちづつを遍くわんく世界せかいに！

同胞どうぱうよ！ 星ほしの幕屋まくやのかなたには

愛あいの御父みちちちぞ住すみ給たまふ。

一人ひとりの友ともの友ともたるの

大なる幸運さいちんを得えし人は、

優やさしき妻つまを得えし人は、

その歓声かんせいを交まじへよや！

然しかり、唯ただだ或あるる恋人こひとを

わが有あとこの世よにて呼よび得える者ものも！

そのことのかなはざりし者は

この友垣ともがきより涙なみだもてひそかに去されよ！

合唱

この大いなる天球てんきゅうに住すむ者は

歓喜よろこびを共にせんと誓ちかへかし！

共飲きんはかの知しられざる実在じざいの御座みざなる

星々ほしほしのみ空そらへ導みちく。

歓喜よろこびをすべてのものは

自然しぜんの乳房ちちうよりぞ飲のみむ。

善人も悪人も諸人は

歓喜の踏み薔薇色の足跡を追ふ。

彼女は我らに接吻と葡萄酒と

刎頸の友を与へぬ。

情欲は昆虫どもに与へられ、

天使は神のみに喜び侍る。

合唱

君ら平伏し拝むや、千万の人々よ！

創造主を想ふや世の人々よ！

星の幕屋のあなたに神を求めよ！

星々のかなたに神は必ずや住み給ふ。

歓喜は永遠の自然の中の

力強い発条と呼ぶる。

歓喜、歓喜は大なる宇宙時計の

齒車を廻すなり。

彼女は薔より花を綻ばせ、

蒼空より星々を誘ひ出す。

彼女は学者の望遠鏡の知らざる

大空に天体を廻らしむ。

合唱

天空の星々の喜ばしくも

輝かしき馳場を飛ぶが如、

同胞よ、君らの道を喜び走れ、

英雄の勝利を目指して走るが如く！

真理の火鏡より彼女は

探究者に笑みを与ふ。

美徳の嶮しき丘べにぞ

彼女は忍辱者の道を導く。

信仰の光輝く山頂に

歓喜の旗のはためくが見ゆ。

柩の割られし裂目に見ゆるは

天使の合唱中の彼女のすがた。

合唱

雄々しく忍べ、千万の人々よ！

忍べ、更に善き世界のために！

かの星の幕屋のあなたにて

偉大なる神酬い給はん。

神々に人の酬ゆるすべもなし。

神々に比せらるるならば佳し。

苦悩と貧困は報らされよ、

悦ばしき人々と共に飲ばん。

憤怒も復讐も忘れなん。

不倶戴天の敵をも許さん。

敵に涙を流さしめじ。

悔恨の念ひ敵を咬まざれ。

合唱

われらの債権簿を破棄せん！

全世界は和解せよ！

同胞よ―星の幕屋のあなたにて、

他人を審きし如く神に審かるべければ。

歓喜は高盃の中に迸る。

金色の葡萄酒の汁より

蕃人は和氣を飲み、

絶望者は勇氣を勝ち得。

同胞よ、君らの座より躍りいでよ、

満々たる葡萄酒杯のめぐるとき。

その泡沫を天に噴き出でしめよ。

この盃を至高善なる神に捧げよ！

合唱

星々の旋回の讚美し、

天使の讚歌の讃うる

星の幕屋のあなたなる

至善者にこの酒杯を捧ぐなり。

深き苦難の中にては不動の勇を、

無辜人の泣くときは確かと救助を、

誓ひてし約束に永遠不変を、

味方にも仇敵にも真誠を、

玉座の前にも男児の矜持を、

同胞よ、こはすべて財と命を賭するともー

功績にはその栄冠を、

虚偽の徒輩には没落を！

合唱

聖き仲間を更に濃やかに結べかし。

この金色の神酒にかけて誓へよ、

この誓約に忠実なることを

在天の審判者にかけて誓へよ！

(一九七六・八・一二訳)

〔註〕

シラーはこの詩を惜なき故里を通して、あつき友情に迎えられたとき作った。ベートーヴェンはこの詩のところに共感し、第九交響曲第四楽章にこの詩句を自由に採り採った。

シラーはこの詩を一七八六年の「ターリア」誌に発表したとき、更に次の一節を加えた。

暴君の鉄鎖より救ひ、

悪漢をも寛し、

死の床に希望を与え、処刑場に恩赦がくだ

る！

死者をも甦らしめ、

兄弟に乾杯し同心となし、

罪びとはみな赦され、

地獄をもはや無からしむ。

合唱

はがらかなる離別のひと時！

棺衣の中には甘しき眠り！

同胞よ！ 審判人の口よりは

情けある言が死者に！

カッサンドラ⁽¹⁾

(Kassandra) シラー (一八二〇年八月)

歓楽は満ちたりトロヤの城堂に、

高き城壁の崩解に先だち。

歓呼の歌はどよみわたれり、

甘美しき絃音の鳴るにつれ。

腕はすべて憩らいてあり、

涙尽きせぬ戦に疲れて。

こは壮士ベリーデの婚宴なり、

ブリアムの美しき乙女との。

月桂樹の小枝を簪して

群また群は賑ひて

神々の聖き殿堂の方

アポロの祭壇へ波打ち進む。

諸々の路を咆哮に蒸して

歓楽の酔ひは蹢躅ふ。

さはれ、とり残されて悲痛の中に

ただ一つの胸は哀しむ。

歓楽の溢るる中にして

欣喜もなく伴侶もなく唯だ独り

カッサンドラは寂しくさまよふ、

アポロの月桂樹茂れる杜を。

森の深処にわけ入りて

予言の娘は呪ひいでたり、

あはれ尼たるの袈裟をば

憤りて大地に投げ棄てて。

「ものみなは歓喜を迎へ、

すべての心は幸に満ち、
齡高き両親はことほぎ、
姉妹は立つか美装こらして。
われのみはわびしく嘆く、
甘き妄想はわれを棄てたり。
われは観る、翼うち振りにて
この城壁に近づく滅亡を。

「炬火の一つ炎ゆるが見ゆ
婚姻の神の手の中ならぬ。
そは雲を指してのほりゆく、
さはれ燔祭の炎には似ず。
嬉しき祝宴の備へは成れり、
さもあらばあれ著るき靈感の中
我は既に聞けり神の御覽を、
神はこの祝宴を惨めにも乱さん。

「彼らはわが悲嘆を詰る、
彼らはわが痛苦を嘲る、
寥しくも瘳める心抱きて
我は幽き地に往かざるを得ず、
恵まれし人々を避け、
楽しめる者らには嘲笑となりて！
悲運に我れをば定めたまへり、
アポロの神よ、汝酷き神よ！
「汝が神託を告げんため
など我れを投げ入れ給ひしや
永劫に盲目なる市の中に、
かかる先見の明を附与へて。
いかなれば我れに示し給ひしや
曲ぐるも難き真相をば。

禍害は起らざるを得ず、

恐るべき事は迫り来たるよ。

「迷妄の幕を切り墜すとも

凶変迫る此の危機を如何せん。

迷誤にこそ人は生くれ、

明察の期は即ち死なり。

取り給へ、ああ取り給へ、わが眼より

この悲しき明知とこの血の景觀を！

汝が真理の器たることは

ああ怖しや、死滅に異らじ。

「与へ給へわが曩の日の盲念を、

楽しげにして愚かなる心を！

喜び歌ひしこと絶えてなし

汝が声と我れなりてより。

汝れは我れに未来を与へしも

殺那をば取り去り給ひて、

今とふ楽しき生を奪ひぬ。

忌はしき此の賜物とり給へ。

「花嫁の如く飾輪をもて

香はしき頭髮を飾りしことなし、

汝が使となりてこの身を

祭壇に悲しくも捧げてよりは。

わが若き日はただ涙なりしか、

わが知りしすべては苦しみなりき。

わが家の辛き苦難はすべて

この感傷の胸をいためつけたり。

「友どちは楽しく戯る、

人みなはうれしみて

青春の愛に生くるよ、

わが胸のみはとぎされてあり。

春は我に徒だなるぞ、

地は喜ばしくも装へど。

誰か人の世をよろこばん、

その淵底を視し者は。

「われは言はん幻想に心の酔へる

ポリュクセーナは幸なりと、

ギリシャの英雄を新郎として

迎へん希望を抱くなれば。

彼女の胸は誇りに高まり

彼女の飲びは制へるに難し。

神々よ、汝らを彼女は嫉まず、

彼女はかしこに夢みてあれば。

「われも亦会へり一人のひとに、

この心をば得まほしき人に。

その人の美しき瞳は願ひき

愛の焰に靈化せられて。

われも願ひきその人と

睦まじき家庭をなさんものと。

さはれ陰府の蔭、夜のごとくに

しのび来て別ちぬ彼と我とを。

「蒼白きもろもろの亡霊を

陰府の女王は我れに示す、

いづこを彷徨ひさまよふとて、

見よ亡霊どもはそこに佇む。

あな恐ろしや若人の

楽しき戯れにすら群れ集ふ、

おどろくべくもさはなる群よ！

われには争で歎びあらむ。

「我は見る死の剣の閃くを、

刺客の眼差の燃え立つを。

右かあらず、左かあらず、

恐怖より遁がるる能はず。

一瞥も外らすあたはで

知りつつ、視つつ、振り向きもせで、

わが命数を満たすべく

見知らぬ国にてわれは仆れん。」

かくてなほ言の葉響けば――

聴け、もの狂ほしき音の遠く

神殿の門より奔めき来るを、

水神の偉なる子は仆れたり！

仇の女神、蛇髪をうち振りければ

諸々の護神逃げ去りて、

雷霆雲は垂れ罩めぬ

イリオンの空面重く。

(一九三二年春、訳)

〔註〕

(1) カッサンドラはブリアモスの娘で、アポロの女祭司であつたが、アポロから預言の霊能を与えられた。

しかし彼女の預言は不信と侮蔑を蒙るのみで、彼女は悲劇的女祭司であつた。

(2) ペリーデはベレウスの息子、即ちアキレス。

(3) 「美しき乙女」は、ブリアモス(ブリアム)の娘で、カッサンドラの妹ポリクセナのこと。ペリーデ(アキレス)と結婚することになり、ここにトロヤ戦争は終幕となる場面なのである。

『舟出』——一九五二年復活節——

彼岸記

事は起りぬ。我は此世を立ち出でぬ！

此世の酒杯は千々に碎けぬ。

わが小舟岸べをば離れたり。

水涯にかそけくも陸のほのめく。

見渡せば路もなき奇しの海や。

わが嗣ぐべきもの今よりは希望一途。

わが地位は汝らの執るにまかせよ。

汝らに現世はあれ、我がために聖国開けよ。

我れ敢てせり、久しき課題を、

悩ましき時間を経て熟慮ひし事を。

わが巡礼の舟あしは陸に着くまじ、

永遠の祖国を見出づるまでは。

月桂の枝われに花咲くことなからん
柏葉の環もわが額を飾るなし。

この世かぎりの労作はあだなれば、

永遠の冠を我れはなほ見出で得んのみ。

遙けく高きこの目標夢ならざるか。

霧にもまがふかの線条は岸にあらざるや。

縦し然るとも、我は崇高き戯事に耽るならず

や。

この荒き大海原を越ゆる道果して有りや。

小暗き舟路の果に莊嚴の神都を見得るや。

患難はいかに重くとも、われ此の路を往か

ざるを得ず。

汝、われを生みし故里の地よ、いざさら

ば！

苦痛は暫しなれど、歓喜は永遠なるぞ。

★

これはヒルティの「眠られぬ夜のため」(“Für schlaflose Nächte”)第一巻二月二十八日の項に掲げられてある詩である。この日はヒルティ先生の誕生日に当る。この「舟出」(“Ab-fahrt”)が彼の第一の誕生日に記されてあるのには意味があるのであろう。この詩の意味するところは、即ち第二の誕生、魂が「震はれぬ国」(ヘブル一二・二八)の「永遠の都」(同一三・一四)を目指して舟出する相である。「此世の酒杯は千々に砕けた」という。この世に死んで、永遠の国に新生したのである。「人新たに生れずば、神の国を見ること能はず」(ヨハネ三・三)という意味の新生である。

我々は勿論、世棄て人となるのではない。新生の後こそ却て世に対して今までよりも深い終末的な関係に於て生きる。而も我々の魂はこの世に縛られず、永遠の国のものとなっている。永遠の国は終末的希望の彼岸であると同時に終末的現実の此岸である。そういう矛盾逆理の中に終末的な生の素晴らしい消息がある。かかる旅心を以て人生の山路を登り、舟路を渡る旅人は幸なる哉！

文化を深く高く生かさんと欲する者は、福音に立つて先ず文化を否定し、否定することによって却って深く高く肯定し、推進せしめる。しかしそれは決して単なる否定的即定というようない「即」の弁証法ではなく、そこにはどうしても十字架を有つ終末論的構造の消息が必要なのである。この消息は絶対にあたまで整理のつく論理の世界ではない。

リヴィングストーンやシヴァイツェルのアフリカ伝道への途は正に此の如きものであった。またかの清教徒たちが故里を立ち出で、帆船メイ・フラウワー号に乗って舟出したときは、正にこの様な心境であつたであらう。福音の自由根拠を有つて立ちあがつたアメリカの文化が、次第に地的文明に毒せられ、その主動性が、福音の自由から単なる人間の自由に移つていくとするなら、それは禍である。いかなる改革も革命もそれが直接的な暴力手段に訴えられるときは、禍である。宗教改革に於ける農民戦争も、フランス革命もロシアの革命も然らざるなしである。

要之、キリストの生命に甦つた者は最大の自由を有っている。キリストの十字架と共に、此の世に葬られた者は、キリストと共にその生命が神の中に匿されている（コロサイ三・一―四参照）。私たちはその様な天国人である。その様な天国人にこそ地の改革が課せられてある。それは人間そのものの革命に関わる根本問題である。復活のキリストにつかまえられて、聖霊による根源的靈生に生きたパウロは私の最大の先生である。キリストに在る「神の活力」^{エネルギヤ}（コロ二・一二）は永遠に我らの生の原動力である。

一九五二年の復活節を迎へ、友らよ、何か新しき課題に向つて舟出せずや。私もある課題に向つて舟出する。無力なればこそ靈風を総身に吸いこんで漕ぎ抜くであらう。ただ栄光を聖名に帰せんがために！

人生の大浪小波 越え往きて目指すは彼方^{かなた} 岸高き聖国^{くに}。

愛は一切に勝つ！

ヒルテイー

Amor omnia vincit

彼岸訳

善の精神に信実を尽くす

真と信との人の結合や！

徒らのお寺院参りは

全一なるこの民はせず。

聖民なる均しき徴、

人みな胸中にぞ見ゆ。

唯一人とどまるとても、

この人はうち勝たれ得じ。

これぞげに愛の力ぞ、

ものみなにうち勝つ愛よ。」

「今一度成らんとぞ思ふ！
うつし世の過ぎゆくまへに
されどなほこの大地の上に
平和の国の建たんことなり。

崇高さと自由の人と、

自己よりの解脱者の国。

〔註〕 ヒルテイー原著「力の秘密」という論説の終りに掲げられてある詩句

神は近い

グスターフ・キューネ（一九八五・八・二八）

この世を軽く思うなよ、
現世^{うつしよ}を神聖と見るのだよ！

すべてまことに神の有^{あり}、

神は愛して荷^おって保^{たも}つてる。

見よ、どの水滴にも
永遠^{とこは}の光が映^{うつ}ってる。

神を遠くにさがすなよ、

いつも君の近くにござる。

彼は居場所が欲しいのだ、

1 黙示録三・二〇参照

彼はもう扉^とを叩いてそこにござる。

本の本は封印されているが、

2 聖書のこと

神に語りかける人には聞こえてくる。

六

校

歌

なつかしの

わが母校校歌（東京高等師範附屬中学校）

桐陰会歌 第四節

（作詞 山根 磐
宮島秀夫）

（作曲 鈴木米次郎）

鳳雛未だ羽生えず

梧桐の上に靈氣蔽ふ

稚龍今猶雲を得で

茗溪のほとり紫雲立つ

凶南の翼打ち張りて

いづれの日にか昇るべき

なつかしの「水戸高等学校寮歌」(大正九年第一回記念祭)

作詞 窪田敏夫

作曲 近衛秀麿

第一節

時乾坤に移ろひて

春秋老ひぬ數百年

古き歴史を秘めて立つ

水府城頭名に高き

常盤の園の草分けて

今年理想の花咲きぬ

昭和医科大学豫科の校歌

Andante

ムサレ オホヌノ ハルカス ミ
 ナツグモ トベバユ リカホ ル
 コヤツノ ホトリ アキチフ ミ
 フェゾラ カギルフ チニア フ
 コクフガ オカニミ ツトセ ヲ
 カガクノ イズミ- ムスバナ ン
 スナカギ リキ-キ フレヲリ ナ

昭和医大予科の校歌

作詞 小池辰雄
作曲 藤村信次

(一九四八年夏作)

一 武蔵大野の春かすみ

夏雲飛べば百合薫る

古刹のほとり秋路踏み

冬空闊る富士に逢ふ

国府ヶ丘に三年を

科学の泉掬ばなん

夢かぎりなき我らかな

二 嵐祖国を吹くなべに

わが学舎は生れ出でつ

その友情を日に深め

思想の翼うち張りて

文華に資する創造の

豊けき生命謳はなん

我ら自由の健児らよ

三 大和島根は永遠に

平和の国ぞ愛の民

高き啓示を胸にうけ

真理の奥義究めつつ

世界の痛み癒やすべく

我らの生涯尽くさん

ここに我らの使命あり

彼は一九二九年の春、学窓を出て直ちに或る医学校にドイツ語の教師として教鞭を執った。この三月でとうとう満二十二年が経ってしまった。東都の西郊に、その学校の子科が建ったが、時世の変遷のためその存在は此の春桜花と共に散った。従って彼も亦、医学校の教鞭を棄てた。

彼は感慨無量であった。多くの学生にとにかく熱意をこめて独乙語を教えた。始めの頃は点数が辛かったか、学生が勉強しなかったか、かなりの数の学生が彼のドイツ語でツィツェン・ブライベン（落第）させられた。なかには落されて感激し、彼を慕い、その後奮斗努力した学生が居たが、それには却て彼の方が感激してしまった。それは純情の台湾人であったが、今は彼の地で文字通りの仁術を施していると彼は信じている。

彼は学生を愛したつもりである。彼はドイツ語の時間を単に語学の時間とは思っていなかった。ことに終りの頃、『ファウスト』を講読したときは、彼の心は「人間」を深くみつめていた。また西洋思想史を講じたときも彼の魂は真理に対するライデンシャフト（情熱）に燃えていた。彼は極めて少数であるが、信仰の路に突入して来た学生のあることを何よりも飲んでゐる。

武蔵野の爽快な環境に予科が建ったとき、校歌をつくることになった。下手でも自製ということで、作曲家や専門詩人にたのまなかった。作曲は物理学担当の予科長がこれにあたり、作詞はドイツ語及び思想史の彼が指名された。別紙の様な校歌が出来あがった。

学校がすがたを消してからは、「歌はれざる校歌」となった。ただその当時学生であった諸君がクラス会を開けば、昔をなつかしんで歌うであらうか。

最後の卒業式の日であった。K・Iという医博が卒業生への言葉の中で「校歌の三番にある『世界の痛み癒やすべく』という大抱負を諸君は深く胸に刻んで、着実な勉強と研究を進めてもらいたい」という意を述べられたとき、彼は代言者を見出だして胸が熱くなった。

医学が生ける、肉体の癒やしに関わる学であり、生ける肉体は同時に人格体である限り、霊との関わりなくして医学も医師も不備である。彼は隠れたる尊敬すべき医師の少なからぬを知っている。併しまたアフリカのシュヴァイツェルの実存を想うとき、日本にもあのような型の医師の出現するのを期待している。

蜀協大学校歌

小池辰雄 作詞

萬沢 遼 作曲



ああ まんの はつ らはの ふふ りん さか けの みは つ つり
 ささ しま の ほし あら ひさ を ひの わ に は だ き て
 あや ま か ぜ か か お も た い ら を あ 一 ゆ み こ
 せ う ま ぜ ん の す き を つ た わ い に し や を し い な う
 ど わ つ が き と う そ つ が び く 一 と の の え わ い く し ふ
 を う み よ や に の て し ん り ち を を ま つ あ も い り め し て い
 じ い ゆ の う ち あ あ 一 り り が ず て く ば ん を に お さ き
 さ ん く め た し て あ ひ た と う い ま あ あ 一 り り
 あ あ 一 け き ん つ が ど や く う の の い い い う ろ う は は 一
 た ふ ひ か か う し し あ あ 一 け き ん つ が ど や く う の の
 い い い う ろ う は は 一 た ふ ひ か か う し し

獨協大学校歌

教授 小池辰雄作詞
教授 萬沢 遼作曲

一

天の原ふりさけ見つつ
さし昇る陽を胸に抱きて
朝風薫る大地を歩み、
浩然の氣をつねに養う
獨協学徒の英姿を見よや
法を遵りて自由あり、
学を修めて人ぞある。
ああ建学の精神は高し。

二

関東は草加のほとり
澤に白鷺、野べには蓮華。
柳の影に筑波は応え、
椈の梢に富士の峯映えて、
城と聳ゆるわが獨協に
天地を貫く師道あり、
昂星燦たる友誼あり。
ああ協同の精神は深し。

三

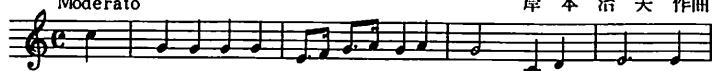
萬国の文化の粹を
大和心に豊かに集め、
獨創妙えなる業を積みて、
世界に雄飛の壮志を抱く
わが獨協の学風ゆかし。
真理を愛して生命あり。
天に即して大和あり。
ああ創造の精神は廣し。

校 歌

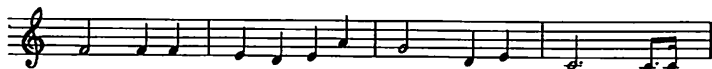
小 池 辰 雄 作詞

岸 本 治 夫 作曲

Moderato



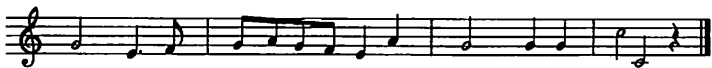
み は る か す つ く ば ね の あ さ ひ か げ わ



が ま な び や に て り は え て そ う



ぞ う の ひ か り も ゆ ー る か な あ



あ ど っ き ょ う さ い た ま こ う と う か つ こ う

獨協埼玉高等学校校歌

作詞 獨協大学名譽教授

小池 辰雄

作曲 獨協埼玉高等学校講師

岸 本治夫

(一九八〇年五月二十七日作詞)

一、みはるかす筑波嶺の朝陽光

わが学舎に照り映えて

創造の光燃ゆるかな

ああ 獨協埼玉高等学校

二、君見ずや青春の学友の影

学びの城にたゆとうて

信愛の結びあつきかな

ああ 獨協埼玉高等学校

三、天地に満ちわたる正大の氣

わが学園にみなぎりて

開拓の力あふるるかな

ああ 獨協埼玉高等学校

A musical score for the song 'The Rose Tree'. It features a vocal line on a single staff and a piano accompaniment on two staves (treble and bass clef). The key signature has one sharp (F#), and the time signature is 4/4. The melody is simple and folk-like, with the piano accompaniment providing a harmonic foundation using chords and single notes.

(NB 田中子ルネ)

This musical score is for the piece 'NB 田中子ルネ'. It is written for a piano and voice. The key signature is one sharp (F#), and the time signature is 4/4. The score consists of two systems. The first system has a vocal line with lyrics in Japanese and a piano accompaniment. The second system continues the piano accompaniment. The lyrics are: 田中子ルネ (Tanaka Kōron), りのう (Rinō), と (to), い (i), は (ha).

(No. 1) 五輪子へ愛の歌 (Koto no Uta)

(No. 2) 五輪子へ愛の歌 (Koto no Uta)

(No. 3) 五輪子へ愛の歌 (Koto no Uta)

(全員)

かぜより しずかに

(Mal 1973)

(2)

(上のD-dimerの値から)
F-dimer 算出値あり。
[参考値は 0.4以下あり]

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★
歌はれざる校歌

作詞 小池辰雄

作曲 安藤 照

一

関東の曠野^{ひろの}涯^{はて}しなし
春にかすむは筑波^{つくは}山
秋の男体いや高し
栃木は青き壬生^{みよぶ}の野に
白亜の城ぞそそり立つ
独協医大は究め往く
究めゆく究めゆく
我らが希望^{のぞみ}無窮なり。

二

独協学園歴史あり

ケンベル・ベルツに縁^{ゆかり}ある

西の学風受け継^つぎて

世界の医学身につけん

心の空に雲雀^{ひばり}舞う

独協医大は昇り往く

昇りゆく昇りゆく

我らが命数^{さだめ}無限なり。

東洋日本は道の民

天を敬い人を愛^{あい}で

人の病を癒さんと

世界の医師と手を結ぶ

桜の園に光栄^{ひかり}ある

独協医大は進み往く

進みゆく進みゆく

我らが使命^{つとめ}無量なり。

三

歌はれざる校歌

(一九八五・八・二〇) 天震

筆者が独協大学教授兼独協中学・高校校長時代に関漢理事長と独協医科大学初代学長石橋長英博士の御依頼により独協医大の校歌を作詞した。

その作曲には独協大学ドイツ語科の同僚にして、嘗て両者とも東大在職時代相前後してハンブルク大学の日本学交換教授を勤めた(彼が先任者)親友安藤熙教授に私からお願ひをした。彼は欣然として引き受けてくれた。彼はわが国におけるワグナー研究の屈指の人物であり、小説やオペラの創作家でもあって筆名は高木卓と称う。彼はしばらくあつて「小池さん、これは私の会心の作です」といって笑顔を以て手渡してくれ、そのとき口吟してくれた。私もこれを聴いてとても嬉しかった。

石橋長英学長からは、素晴らしい校歌をありがとう、とおたよりもいただいてある。この歌曲を手版りで印刷して独協医大へ送達した。当初は医大に音楽部がないとのことで校歌をうたうべき式典にも歌はれなかった。こうして数年が経過した。私は再三校歌はどうなっているかを医大当局に訊ねたが確たる返答がないままであった。そのうちに医大の教授会で校歌のことが議せ

られ、竟にこの校歌は採用されないことになったということを某教授から承った。私はかかる事態に対して応うべき言を知らない。

私はそれ以前に、天野貞祐独協大学学長の御依頼により、独協大学の校歌を作詞し、その作曲には東大文学部美学科卒の同じく同僚の萬沢遼（現、名誉）教授がこれに当られた。これは学長の一存で自然に採用された。その後も矢嶋仁吉独協大学名誉教授独協埼玉高等学校校長の御依頼により同校の校歌を作詞し、その作曲には同校講師岸本治夫先生が当ててくれたが、これも文句なしに採用されたのである。これらの校歌は本巻に収録してあるので見ていただきたい。然るに私としても充分想を練り、安藤教授も「会心の作」と言明した作品が認められないとはどういうことか。医大であるから精神ゆたかな曲となっている。特に女性のために考慮もはらっている。

安藤教授は残念ながら既に他界されたのである。この曲は遺作となってしまった。私は彼への友情としてこの曲が採用されなかったからといって、紙屑籠に棄てることができようか。私のこの個人的な著作集第八巻『詩歌集』に光彩を放つものとしてこれを載せて彼のあつき友情に応えなければならぬ。

一九八三年に独協学園が百年祭を迎へ、その際に発刊になった『目で見る独協百年』という記念の本にも、学園構成の四校（東京は目白台の独協中学・高校、埼玉県草加の独協大学、栃木県の壬生の独協医大、埼玉県浅間台の独協埼玉高校）の中で独協医大だけが校歌をもたない状態で

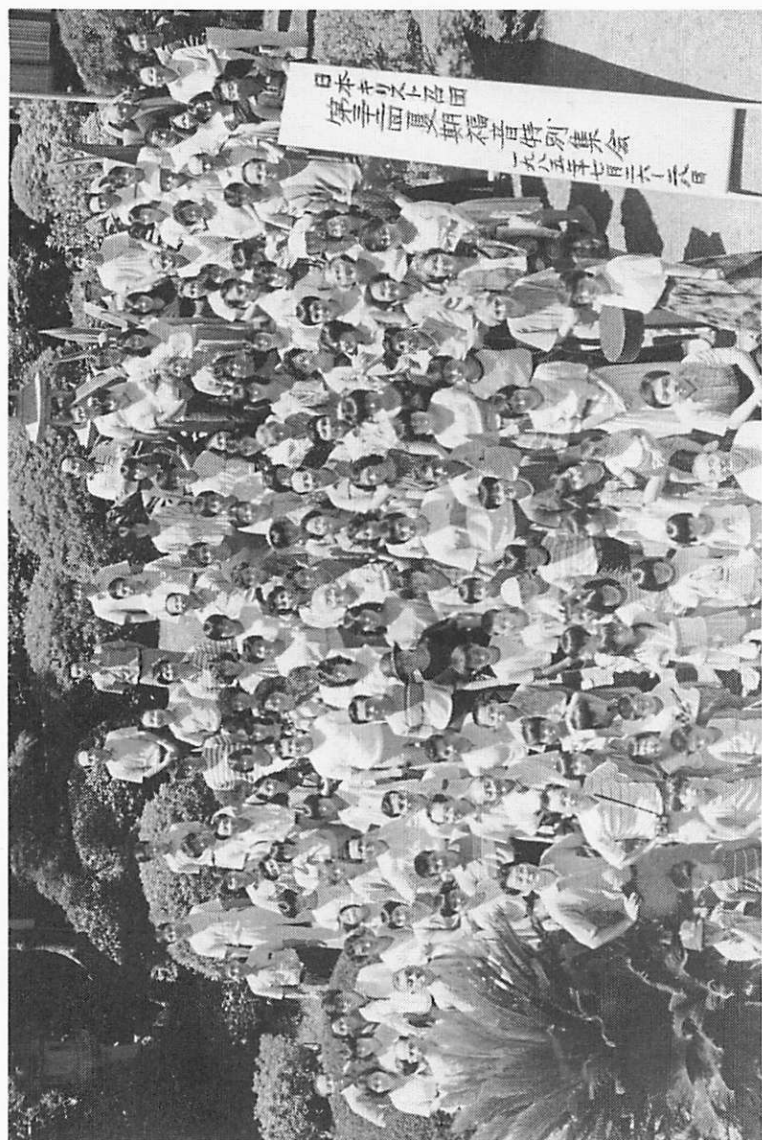
あった。

ただ私は天界の安藤君と共にいつまでも「歌はれざる校歌」を以て独協医大のために祈るものである。そして安藤君と私の祈りに応へて、地上に於てでなく、天上に於て天使たちが提琴を演奏しながら歌ってくれているにちがいない。これが地上では「歌はれざる校歌」のこころである。

七

日本キリスト召団讃歌

A 類	日本キリスト召団	一般讃歌
B 類	日本キリスト召団	特有讃歌



A類 日本キリスト召団一般讃歌（単独のSは日本基督教団讃美歌の略号）

作詞 小池辰雄

番号	頭詞	歌調	その歌の頭詞
A 1	わが道伴れ	S 527	わが歎びわが望み
A 2	みめ美しく	S 245	おもひいづるも
A 3	時は来れり	S 169	聞けよやひびく
A 4	生れながらの	S 217	天つ真清水
A 5	わがみ神よ	S 320	主よみ許に
A 6	神を無みして	S 260 b	千歳の岩よ
A 7	わが主キリストは	S 239	さまよう人々
A 8	きつねに穴ぐらあり	S 39	日くれて四方は暗く
A 9	世の終末は ^{まはり}	S 513	あめにたから
A 10	汝れわが衷に	S 48	静けき夕の
A 11	過越の祭	S 330	あめなるわが家を

番号

頭詞

歌調

その歌の頭詞

A 12 われはシャロンに

中山晋平 カチューシャ可愛や

A 13 われに受くべき

S 343 こよなき恵みの

A 14 いくさ尽きせぬ

瀧廉太郎 春高樓の

A 15 羔の血を

田中穂積 空に嘯る

A 16 み霊と智慧の

S 228 ガリラヤの風

A 17 パリサイ・サウロは

S 286 神はわが力

A 18 聖書の扉

S 370 めさめよわが霊

A 19 母の乳房を

S 538 すぎゆくこの世

A 20 信じ入れば

S 514 よわき者よ

A 21 地は形なく

奥山朝恭 青葉茂れる桜井の

A 22 春は野べに

S 515 十字架の血に

A 23 イエスは十字架に

S 214 北のはてなる

A 24 ゴルゴタの丘の

S 239 さまよう人々

A 25 いづれの教派も

S 271 いさをなき我を

A 26 主はサマリヤなる

S 537 わが主のみに

番号

頭詞

歌調

その歌の頭詞

- | | | | |
|------|------------|-------|-------------|
| A 27 | カナン之女 | S 217 | 天つ真清水 |
| A 28 | ベタニアなるある女 | | 愛蘭民謡調 庭の千草も |
| A 29 | 十字架のもと | S 365 | わが主イエスよ |
| A 30 | いとも聖なる | S 214 | 北の極なる |
| A 31 | 曠野の如き | 一高寮歌 | 噫玉杯に花うけて |
| A 32 | イスラエル・ユダの | S 530 | うき世の嘆きも |
| A 33 | 主なるキリストは | S 359 | 夕陽はかくれて |
| A 34 | み霊の主イエスに | S 537 | わが主のみに |
| A 35 | み空を渡る雲 | ローレライ | なじかは知らねど |
| A 36 | 涯しも知れぬ大宇宙 | 一高寮歌 | 太平洋の波の穂に |
| A 37 | われはみ父の | 一高寮歌 | そよぐ橄欖風かほる |
| A 38 | 荒野の中に | 妙義山 | 峨々たる巖 |
| A 39 | 救済と栄光 | 一高寮歌 | ああ玉杯に |
| A 40 | キリストは地に在りて | 市川りり子 | |
| A 41 | あやしき雲に | S 136 | 血潮したたる |

A1 わが道伴れわが情け

(一九七六・二・二一作詞)

S 57 「わが飲びわが望み」

1 わが道伴れ わが情け

わが旅路の主よ

なやみにも 苦しみに

わが力の主よ！

2 わが道伴れ わが情け

わが天路の友

山を越え 谷を渡り

偕に進み給ふ。

3 わが道伴れ わが情け

世の救ひの主よ！

わが身をも わが魂をも
捧げつつ進まん。

4 わが道伴れ わが情け

旅路の峠を

いくたびも 越えに越えん

天かける日まで！

A2 みめ美しく

(一九七九・一二・六作詞)

——ヨハネ八・一一——

S 245 「おもひいづるも」

1 みめ美しく 純情の

女を捕へ 連れ来たり

パリサイ人ら 学の徒ら

イエスのみ前に 曳き出せり

2 「師よこの女 道ならぬ

わざをせし時 捕へけり

律法おきてによれば 石をもて

打つべきなるぞ 如何にせん」

3 師は身を屈かがめ 地の上に

もの書き給ふ 応こたへせず

偽善者いつはりどもは いらだちて

返答を求め 問ひ迫る

4 師は身を起こし 言ひ給ふ

「汝れらのうちの 潔き者

石を投げ打て！」 かく言ひて

再またた身を屈め 書き給ふ

5 この聖言みことばに 胸打たれ

老ひも若きも 手の中の

石を落して 次ぎ次ぎに

姿を消せり 罪びとら

6 師は身を起こし 見給へば

女と師のみ 残りたり

「女よ汝れを 責むる者

何処いづこに在りや」 「誰もなし」

7 情け深くも キリストは

彼女かれに手を按おさき 言ひ給ふ

「我も汝れをば 罪せじな

再びすなよ いざや往け！」

8 人の心を 知り給ふ

主のまなざしは いと深し
審きと赦し あざやかに

現はし給ふ 荷ひつつ。

A3 時は来れり

(一九七九・一二・七・作詞)

——エペソ六・一三——八参照——

S 100 「きけよやひびく」

1 時は来れり 大和島根の

民の在り方 神に問はれん

2 心おごれる 昭和元祿

混濁の世は いづこへ往くや

3 人の心に 愛のかけなく

利をのみ追はば 崩れゆくなり

4 み霊の子らよ いかなるときも

祈りて受けよ 主のみ力を

5 いざや友らよ 主の武具を執れ

世紀の終末 近づきたれば

6 恵みの胃 み霊の剣

聖言の盾 武装はよきか

7 主の義を鎧ひ 愛を帯びて

恵信一如 希望に燃えよ

8 生くるは伝道 いかなるときも

福音の証人たれ！

A4 生れながらの

(一九七九・一二・七作詞)

S 217 「天つ真清水」

1 生れながらの 跛者が

美麗門に 坐し居れり

宮の出入りに もの乞ふために

今日も変らず 手を伸べて

2 ペテロとヨハネ さしかかり

彼に目をとめ 言ひけるは

「我らを見よ！」と 跛者は欣喜

もの欲し顔に 見つめけり

3 ペテロは言へり 「金銀は

我に無けれど わが有てる

貴きものを 汝に与ふ

主の名に在りていざ歩め」

4 右手をとりて 起こしに

足の踝骨 力づき

直ちに立ちて 雀躍したり

勇み歩みて 聖名讃ふ

5 驚きたるは 民衆よ

ソロモン廓に 馳せ集ひ

使徒にすがれる 跛者を囲めり

ペテロ彼らに 言ひ出でぬ

6

「イスラエル人 あやしむな

我らの力 敬虔も

彼の立ちたる 理由に非ず

我らを見るな 見つむるな」

7

我らの始祖の 神エホバ

その僕たる キリストに

栄光あらしめ み業をなせり

我らはイエスの 手足なり」

8

この跛者の 癒やされし

みわざに於て 使徒ペテロ

み霊に在りて おのれを無とし

ただキリストを 証せり

A5 わがみ神よ

(一九七九・一二・一二作詞)

S 300 「主よみもとに」

1

「わがみ神よ 十字架の

この苦杯を 取り去り

み許にゆき 父と共に

とこしなへに 在りたし

2

されど我は み父の

み旨により 十字架を

負ひて往かん ゴルゴタへと

我を棄てて 従はん」

3

主の十字架の かたえに

悪しき者ら 懸けらる

驕る心 砕ける胸

これぞ人類の 分れ目

4 主言ひ給ふ 砕けの

胸の者に「汝は

我と共に 今日この時

バラダイスに 在るべし！」

5 午後の三時 天地は

雷鳴のため 晦冥

いなづま飛び 地震振へり

歴史を絶つ 徴候ぞ

6 十字架の主は 叫べり

エリエイレマ サバクタニ

更につづく 大音聲

聖所の幕は 裂けたり

7 主は十字架を 荷なひて

あがなひわざ 果たして

甦りて 現はれたり

マグダレナに 最先に

8 復活の主は 昇りて

神の右に 坐したり

み約束の み霊降だす

時を待ちて 祈り給ふ

9 聖霊は火か 疾風か

祈る群に 臨めり

ペンテコステの バプテスマぞ！

エクレシヤは 成りたり

A6 神を無みして

(一九七九・一二・一六作詞)

S 260 B 「千歳の岩よ」

1 神を無みして 萬づの事を

いかに謀るも 空の空なり

ああ亡びゆく 文明文化

2 剣を執れば 剣に亡ぶ

萬づの国は 自滅への道

ああ人の世の 罪ぞ果てなき

3 世紀の終末 近づきたれば

心を裂きて 神に帰れよ！

三次大戦 いつかは知れず

4 大和島根の 人よ醒めよ

古来われらは 道の民なり

今こそ受けよ キリストの道

5 預言者どもも 主の使徒たちも

亡びゆく世に 真理の道の

証しを立てて 世を去りゆけり

6 幼児どもに 国境なし

イデオロギーの 限界を悟り

人間に帰りて 手を握り合へ

7 人はもと霊止 神仏なり

萬象帰一 物心一如

萬づの人よ 相抱けよや

8

歴史の終末 明日に迫るも

主にこそ在りて 人をば愛し

今日一日を 千年と生きん

A7 わが主キリストは

(一九七九・一二・二七作詞)

——詩篇第23篇に因みて——

S 230 「さまよふ人々」

1

わが主キリストは わが牧人

若草の野辺に われを臥させ

憩ひの水汀に 伴れゆき給ふ

これこそ聖国の すがたなれや

2

たとひ死の陰の 谷を往くも

われにおそれなし 汝れは我れと

共に在まし給ふ 汝れの情け

汝がみ霊こそは わが生命ぞ

3

わが主はわがため 仇敵の前に

み霊の油を そそぎ給ふ

敵をも愛する 心こそは

聖霊より出づる 力なれや

4

恩恵と真理は 聖霊なれば

われらの中にぞ 入り来れる

これぞ永遠の いのちなれば

われらは聖霊の幕屋たれや

A8 きつねに穴ぐらあり

(二九八〇・一・一五作詞)

S 39 「日くれて四方はくらく」

1

きつねに穴ぐらあり

小鳥には罅あり

人の子枕するに

宿るべきところなし

2

山ゆかば石枕

野べにては草枕

主はかくぞ眠りける

父のふところとして

3

小舟は木の葉の如

波風にゆらぐとも

舟板を枕とし

キリストは眠りけり

4

あらしをいたくおそれ

弟子どもは主を起こす

起きざまに主は言へり

「何ぞおそれまどふや」

5

舳に主は起ちてぞ

叫びける「風黙せ！」

あらしは風となれり

ああみ霊のキリストよ！

6

憂ひに沈むときも

病氣になやむときも

キリストのふところに

眠りてみ力を得ん！

2

火の試煉 近づきたり

キリストの 名のため

識られなば 幸なり

み霊うちに燃ゆれば

3

み霊による たまものをば

惜しみなく ほどこし

魂の宝 天に積みて

聖民の証示をせん

A9 世の終末は

(一九八〇・一・一八作詞)

S 513 「あめにたから」

1

世の終末は 近づきたり

心をこめて 祈らん

主に在りてぞ 世をば愛し

聖国の民を創造らん。

A10

汝れわがうちに

(一九八〇・二・七作詞)

S 48 「しずけき夕の」

1

「汝れ我が衷に しかと宿らば

祈り求めよ　さらば成るべし

2　み父のわれを　愛する如く

汝を愛す　わが愛に居れ」

3　キリストのため　生命いのちを賭けて

友を愛せん　み霊は助く

4　「汝れは愛なり　愛の炎ぞ！

聖霊みたまの愛を　貫き生きよ」

A11　過越の祭

(二九八〇・六・一五作詞)

S 30 「あめなるわが家を」

1　過越すばしの祭　近づきたり

この世を去るべき　時は近し

2　キリスト世にある　おのが者を

きはまりなきまで　愛し給ふ

3　イエスには父より　父に還る

正道まじみち、權威みちかた　授けられぬ

4　最後おわりの晩餐ゆうげの　時にのぞみ

上衣をぬぎすて　布ぬめを腰にす

5　盥たらひに水くみ　僕と成り

弟子らの足をば　洗ひ給ふ

6　ペテロはかしこみ　「主よ足をば

洗ひたまはざれ とこしなへに」

7 「われもし汝を 洗はざれば

汝と我とは かかはりなし！」

8 イエスのわれらへの 関係こそ

十字架・聖霊の関身なれ！

9 我らも互いに 足を洗ひ

キリストの愛を 身につけなん

A12 われはシャロンに

(一九七九・一二・二〇作詞)

—— 雅歌のこころ ——

S 「カチューシャ可愛や」 中山晋平作曲

1 「われはシャロンに 花咲く野バラ

わが牧人 馳せ来たれ！

我を抱きて 接吻たもれ。」(f.)

2 「汝れの鳩胸 み霊にみちて

汝れの息吹きは 天つ風

汝れが唇 滴る密よ。」(m.)

3 「神にわが魂 一如となれり

われらもまこと 一つなり

いざや野山の牧場に往かん。」(m.)

4 「われをみ胸に 印となせよ

愛の契りは とこしへに

死をも突きぬけ 焰と燃ゆる！」(f.)

A13

われに受くべき

(一九八〇・一〇・一四作詞)

——ルカ二・四九、五〇——

S 383 「こよなきめぐみの」

1

われには受くべき バプテスマあり
ゴルゴタの丘の 十字架にぞある！

2

罪をばあがなふ 棄身のわざを
成し遂ぐるまでは 祈りに祈る。

3

あがなひわざなる 十字架ののちに
聖霊臨まん 祈り待てかし。

4

聖霊臨まば み力に満ち、
聖国のみ民と 汝れはなるべし。

5

聖霊^みの火のほか 何をかのぞまん！
ハレルヤの叫び 汝れは叫ばん！

6

主のこのみこころ われに成りたり！
み霊^みの身証^みを なさずばあらじ。

A14

戦^{いくさ}尽きせぬ

(一九八〇・一〇・一六作詞)

「春高樓の」(荒城の月) 滝廉太郎作曲

1

戦^{いくさ}尽きせぬ 人の世や
そのみなもとは 我愆なり
有無相通ひ あたへなば
楽しき平和 来るものを

2 闘争絶えぬ 人の世や

幾千年の 血の叫び

野にも山にも 余韻あり

神の審判を 祈り待つ

5 あなおろかしき 人の世や

救いがたきは 人の罪

宜ベキリストの 十字架は

世の終末まで 現実なり

3 妬み争ふ 人の世や

神のみに 平伏して

主の十字架の 贖罪と

愛のみ霊に あづかれよ

6 十字架の下 相つどひ

深く祈れば 必ずや

み霊くだりて 甦へり

歎びに満ち 聖名讃ふ

4 世紀末なる 人の世や

武器を投げすて 鋌を執れ!

かたみにゆるし 愛せずば

世界はやがて 自滅せん

7 ここにはじめて 平安の

神の国こそ 臨むなれ

み霊の力 身に満ちて

道を伝へん いつまでも

A15 羔の血を

(一九八〇・一〇・一六作詞)

——ヨハネ黙示録第七章に因みて——

「空にさへづる鳥の声」(美しき天然) 田中穂積作曲

1 羔の血を 身に浴びて

あがなはれたる 白き群、

苦難経たる 生涯ゆえ

栄光ゆたけき 御座の許。

2 神の幕屋の 張られたる

その天然の 霊泉に

渴きを知らぬ 永遠の

生活たのしむ バラダイス。

3 数えつくせぬ 国民の

星と散らばる 幕屋かな

類は相呼び 集りて

主のエクレシヤ(召団)ここに成る

4 我らも地にて 聖名ゆえに

十字架を負ひて 生き貫かん、

み霊の光 身に浴びて

主のみ生命を 身証せん。

A16 み霊と智慧の

(一九八〇・一〇・二四作詞)

——ステパノ——

S 228 「カリヤの風」

1 みたまとちえの ステパノなれば

神の歴史を 力づく

パリサイの徒に 述ぶるすがたは
み使の如 かがやきたり

2 「父祖アブラハム イサクとヤコブ
兄らをゆるす 神のヨセフ、
出エジプトを 果せしモーセ
ダビデ・ソロモン 神のドラマ

3 うなじは硬く 心と耳に
割礼なきは 汝れらなるぞ
げに汝らは 聖霊に叛く！
かくてイエスを 十字架せり」

4 ああステパノは かく叫びたり
彼ら怒りて 彼をとらえ
町より出だし 石にて撃てり

ここにステパノ 道に殉ず

5 み霊に満ちて 天に目をとめ
神の栄光と、主を仰ぎて
敵のゆるしを 主に祈りつつ
凱旋したり わがステパノ！

A17 パリサイ サウロは

(二九八〇・一〇・二四作詞)

——パウロの回帰——
S 端「神はわが力」

1 パリサイ・サウロはキリスト者たちの
男女のすべてを 捕へて伴れゆく

2 ダマスコへの途にて み霊の光に

矢庭に照らされ 途に倒れたり

3 「サウロ、サウロ何ぞ我をば迫むるや

我はイエスなり！」サウロは平れ伏す

4 イエス、アナニヤに サウロを示して

「サウロは選びの 器ぞ」と諭す

5 「兄弟サウロよ！ 我は主イエスに

遣はされたれば 汝れに手を按かむ」

6 噫！ 彼の眼より 落ちたるは何か

鱗か心か！ 聖霊ぞ臨める

7 パウロは聖霊の バプテスマを受け

曠野に祈れば 十字架ぞ立ちたる！

8 我は主と共に 十字架せられたり

我れは地に死にて み霊の主に生く

A18 聖書の扉に

(一九八〇・一〇・二八作詞)

S 30 「めさめよわが霊」

1 聖書の扉に 体あたりし

平伏し仰げば 門はひらき

われらは入りたり 神の国に

みどりの牧場に 泉辺にぞ

2 聖書の現実には 神のドラマ

われらの集會は その中にて

棄身の心で いのり叫び

み言を喰ひ み霊を飲む

3 祈りの場^ばにて み霊臨^まみ

めぐみとたまもの ゆたかなれば

或る人は異言 或るは霊歌

病もいやされ み名を讀ふ

4 十字架されれば み霊臨^まみ

み言息吹くよ あなうれしや

我らはいのちに 満ちあふれて

み名をたたへつつ 主にぞ生くる

5 み国のよろこび 集^{つどい}会に満ち

歌声ゆたけく ひびきわたる

別れを惜しみて 去りがてなり

主のこの力を いざや伝へん

A19

母の乳房を

(一九八〇・一一・二六作詞)

S 538 「すぎゆくこの世」

1 母の乳房を 吸ふ児の如く

主のみ霊をば 飲みてぞ生くる

2 母がすべての おさなごの如

わが身を全く 主に投げ入れぬ

3 主のふところに 祈り入りてぞ

み霊は臨み 力に溢る

4 エン・クリストに 生くるわが身に

み霊の力　みなぎりあふる

5　み霊の流れ　脈々たれば

み民われらは　生命の泉

6　み霊の火焰　炎々たれば

何をかのぞまん　力ぞみつる

7　いざや我らは　燃ゆるみ霊を

胸中に宿し　灯を点さなん

1　信じ入れば　み力を得

行に転じ　人を助く

《おりかえし》

主に在りて　力あり

主のみ霊こそ　原始力ぞ！

2　主に愛され　抱かれなば

捨身の愛　われにみつる

3　新天地の　望みに生く

主の光を　四方に放つ

A20　信じ入れば

（二九八〇・一一・二七作詞）

S 514 「よわきものよ」

A21 地は形なく

(二九八〇・一一・二八作詞)

——楽園喪失の歌——

「青葉茂れる桜井の」奥山朝恭作曲

1 地は形なくただ空し 渾のおもてはた

だ闇し

神のみ霊は水面を いとくすしくぞお

ほひける

神は叫べり「光あれ」！ ここにはじ

めて光あり

2 神のみ業のいやはてに 人を創造れり

地をもて

神は霊気をその中に 吹き入れたれば

生氣あり

そのすがたこそみ像に 一如なりけれ

あなかしこ

3 空には鳥が飛びかはし 地には獣が遍

ひまはる

されどアダムは独りにて 彼の相手は

なかりけり

神は不憫に思ひやり アダムをじつと

見つめけり

4 神はアダムに手を按きて 深き眠りに

おとし入れ

肋骨を一つとり これを女に創造た

り

アダムはエバを見て言へり「わが骨

の骨肉の肉」

5

生きとし生けるもののうち エバのす
がたに比^なふもの

ひとつもあらずエバの美は 神の芸術^{たくみ}
の傑作ぞ！

東西古今に謳はるる 美の極致^{きわみ}こそ女
体^{たい}なれ

6

エデンの園はパラダイス アダムとエ
バは思ふまま

楽しきくらしをいとなめり これをね

たみて木蔭より

サタンの使者^{つかい}美しき蛇 エバに近より

ささやきぬ

7

「善きと悪しきを知るの樹を 汝れら
喰^くはば開眼し

8

神の言に叛きたる 二人はここに罪を
知り

木の下蔭に身をかくし 神のみ前を恐
れたり

ときに声あり「わがアダム 汝いつこ
に今在るや！」

9

神のみ言いと深し さばきとあはれみ
ひびきたり

さあれ二人は楽園を 追^たひ出されて荒
れし地に

汗を流して働きて なりはいたつる道
に就く

10

されどみ神は約しけり「汝の裔にメシ
ヤ出で

蛇の首領にうち勝ちて 救ひの道をき
りひらき

罪のゆるしを必ずや 与ふべければ平
安かれ！」と

A22 春は野べに

(二九八〇・一一・二九作詞)

S 515 「十字架の血に」

1 春は野べに 夏は海に

秋は山の上に 冬は雪に
《おりかえし》

主よ！ われは 祈り入る
みふところこそ 愛の力！

2 出でて市に 入りて家に

見よいたるところ 主に見みゆる

3

聖書読めば み声ひびき
聖言のおくに み霊息吹く

A23 イエスは十字架に

——ヨハネ福音書第20章——

S 214 「北のはてなる」

1 イエスは十字架に あがなひの死を

果たし給うて 葬られぬ

主の日の晨 死に勝ち給ひ

霊震をもて 石扉^{とびら}倒す

2 マリヤ・マグダラ 石扉^{とびら}なきを見

ペテロ、ヨハネに その旨告ぐ

弟子たち走り み墓を見しに

主の影見えず おどろきたり

3 泣きつつマリヤ み墓のうちを

見れば二人の み使立つ

白き衣の み使は言ふ

「女よ何ぞ 泣き悲しむ」

4 「誰かわが主を とりのぞけしや

いづこにおきし 我れ知りたし」

彼女^{かん}振り向けば 人影のあり

「女よ泣くな 誰をさがす」

5 マリヤはそれを 園守と見て

「君は何処^{いどこ}に 彼を置きし」

主はねんごろに「マリヤよ、マリ

ヤ！」

声におどろき 「ラボニ、わが師！」

6 マリヤ迫りて、主に寄りすがる、

「われに触^ふるな、弟子に告げよ

父のみ許に われは昇ると」。

マリヤ弟子らに 主を証^{あかし}す。

7 その夕主は 閉ちたる室に

入り給うて「シャロム・ラケム！

我れ汝らを 世につかはさん

祈り入りてぞ 聖霊受けよ！」

A24 ゴルゴタの丘の

(一九八一・五・五作詞)

——ペンテコステの歌——

S 239 「さまよう人々」

1 ゴルゴタの丘の 十字架の上

天涯孤独の 主の御姿

あがなひの血潮 地に滴り

十字架に極まる 主の義と愛

2

主はよみがへりて 墓を破り

マグダラのマリヤ 女たちと

弟子にここかしこ 四十日

現はれ給ひて 約束せり

3

「汝れらは日ならず 聖霊にて

バプテスマされん 祈り待てよ

聖霊臨まば 霊力を受く

世界の極まで 証者となれよ」

4

ペンテコステの日 相集ひて

使徒ら女たち 切に祈る

天よりにはかに 臨みたるは

み霊の疾風よ み霊の火よ！

5

祈れる者みな うちに燃えて

み霊に満たされ 異言の波

別人の如く 今や成りて

主のエクレシヤは　ここに成れり

体当りせんかな　聖書の現実うつつに

6　現今いまのエクレシヤ　危機を孕む

3　いづれの教派も　使命はそれぞれ

使徒らの次元に　立ち帰らん！

ただ胸に在りや　いのちの聖靈

われらもいよいよ　祈り入りて

み霊の証しを　果たし往かん

4　いづれの集会つどいも　それぞれ今こそ
祈り入りゆかん　使徒らの次元に

A25　いづれの教派も

(一九八一・五・八作詞)

——新宗教改革——

S.M. 「いさをなき我を」

1　いづれの教派も　それぞれ意味あり

6　キリスト教界　自由の心と

ただ胸に在りや　砕けの十字架

み霊の愛にて　世人よびとを愛せん

7　キリスト教界　主と一つになり

2　いづれの集会つどいも　観念不可なり

み霊の力で　まことの伝道

8 主イエスの僕ぞ み霊の火となり

預言者と使徒の 後を継がん哉

A26 主はサマリヤなる

(一九八一・五・一一作詞)

—— ヨハネ四・四—三〇——
S 537 「わが主のみまへに」

1 主はサマリヤなる スカルの町まで

陽照りのさ中を 辿りつきけりな

旅路につかれて 近かよりたりしは

歴史も古りにし ヤコブの泉ぞ

2 水を掬すべく サマリヤの女

泉辺に在りき 奇すしき出会いよ

「我に飲ませよ」と イエスはたのみ
ける

「汝れはユダヤ人 何ぞ求むるや」

3 「我れを知らざるや 我こそ汝に

活ける水を今 与へ得るものを」

「その活ける水は いづこより得しぞ

父祖ヤコブよりも 汝は偉なるか」

4 「この水飲むとも 渇きは止まらじ

されどわが水は 渇きをば知らず

わが水を飲むとき 泉となりてぞ

永遠なる生命の 水ぞ湧き出づる」

5 「わが主よ永遠なる 水をば与へよ」

「帰りて夫をば ここに伴れて来よ」

「我れには夫なし」「汝が言うが如し
汝は嘗ては 五人もありけり」

6 「汝は預言者！ 此処なるゲリシム
礼拝なすべき われらの山なり」
「女よ信ぜよ！ いついづこにても
礼拝なし得る 時こそ到れる」

7 「み父に祈るは み霊と誠ぞ
神こそ霊なれ み父は誠ぞ」
「げに我れ信ずる メシヤの来たるを」
「汝ともの言う 我こそそれなれ！」

8 女はおどろき 水瓶捨て置き
いそぎて馳せ往き 巷ちまたに呼ばはる
「道ゆく人々 来たりて見よかし！」

げに我れ見たるぞ キリストわが主
を！」

A27 カナンの女

(二九八一・七・七作詞)

——マタイ一五・二一—二八——

S 217 「あまつましみづ」

1 カナンの女 道べより
主のみ姿に 叫び寄る
「主よ、ダビデの子 憐み給へ
悪鬼に悩む わが娘！」

2 されどイエスは 応答いこたへせず
弟子どもも主に 請ひて言ふ
「帰へし給へよ 叫ぶ女を！」

主は之を受け 可しとせり

3 「我は父より 遣はされ

ヤコブの家の 失せにける

羊の如きわが民のみを

救はんとてぞ 来りける」

4 カナンの女 跪き

「助け給へよ 我を主よ！」

「子供のパンを 小犬に投げじ」

主は情れなくも 拒みけり

5 女応へて 「然り主よ、

小犬も喰ふ 食卓より

落つる主人の 食屑をすら」

噫、この言葉 主を撃てり

6 「カナンの女！ 平安れよ

汝が信こそは 大いなり

願ひの如く 汝れに成れかし」

娘直ちに 癒やされぬ

A28 ベタニヤなるある女

(一九八一・八・一五作詞)

——マタイ二六・六——一三、マルコ一四・三——九

庭の千草（アイルランド民謡）

1 ベタニヤなる ある女

石甕を うち割りて

主の首に 心こめて

ナルドの香油を 注ぎけり

2 主の弟子どもは これを見て

勿体なやと 憤る

「それを売りにて 貧者のため
施しごとを なすべきに」

3 主は言い給う 「この女

葬りの為 わがために

涙ながら 注ぎたるぞ

我はほどなく 別れ行く

4 まことに告げん 全世界

いづこなりとも 福音の

伝へらるる ところにては

憶えらるべし この女！」

A29 十字架のもと

(一九八一・九・五作詞)

S 355 「わが主イエスよ」

1 十字架のもと 祈り入れば

み霊臨み 身は火の如し

魂も燃えて 聖名を讃ふ

わが主イエスよ わがすべてよ

2 主よわが主よ 今此処にて

我をとらへ み旨を示し

智慧と力 そそぎ給へ

汝がみ業を なさせ給へ

3 主よ、われらは 汝のもの

汝がうちにぞ 我ら生きて

汝が愛をば 生命として
愛に生きん 永遠まで

A30
いとも聖なる

30—34は五連歌（重奏）Quintett
（一九八三・六・二三作詞）

（イザヤ一—三三、三六—三九）

S 24 「北の極なる氷の山」

1 「いとも聖なる 万軍の主

その栄光は 全地に満つ」

セラビム舞いて かくぞ歌ふ

神殿もために 霊に震ふ

2 霊に感じて イザヤ叫ぶ、

「禍いなるぞ われは亡ぶ

万軍の主を けがれし我れ

見まつりたれば われは亡ぶ」

3 「セラビム我れに 飛び来たりて

わが唇を 火にて焼けり

主のみ声あり、「誰を遣（や）らん」

「遣はし給へ 我れはここに！」

4 「愛の愛なる葡萄園よ！

酒槽、望楼 備へせしに

結びしは是れ 野葡萄なり

棘 荊の 荒野とならん

5 神の審判と 神の義とを

求めてそこに 生きて在れよ

シオン審判かれ あがなはれぬ

帰る者らも 神の義にぞ

6

神の徴は いつ出づるや
運命の危機ぞ 祈り待てよ
徴は何ぞ 「インマヌエル」
乙女の子なり メシヤ予言

7

主は避け所 蹟く石
妨ぐる磐 民らの網
畏ともなりて 救の主なり
万軍の主の 愛は是れぞ

8

センナケリブの 雲霞とまがふ
大軍来たり エルサレムを
包囲せしかど 何か恐れん
エホバにイザヤ 祈り入れり

9

イザヤの熱き 祈りに応へ
主のみ力は 現はれたり
アッシリヤ軍 一夜にして
壊滅したり 神の力

10

エッサイの根ゆ 芽生出でぬ
エホバのみ霊 これに宿り
智慧と明悟と 能力に満ち
腰に義の帯 身には信実

11

「わがエジプトよ わが手のわざ
アッシリヤ国 イスラエルと
相携へて 我に帰らん
その日世界は 平和と成らん」

12

狼、羊、豹と小山羊

牧の牡獅子 牝牛と熊

乳児と蛇 相助くる

愛のあふるる 聖国来たれ！

A31 曠野の如き

(一九八三・二・一作詞)

サフランの歌(イザヤ書三四・三五)

「ああ玉杯に」(一高寮歌)(橋正一作曲)

1

曠野の如き 人の世や

文化はあれど 虚偽の

平和の蔭に 軍備あり

妖星走る 空の下

西も東も 平安からず

いつまでかくて あるべきや

2

天つ御神は 国々の

軍に向ひ 聖怒を

あらはし給ふ 闘ぎ合ふ

戦争起れり み審判の

天の剣は 血を浴びぬ

万象消えて いと暗し

3

わが腸は 沸えたぎり

胸も轟き 裂けんとす

聞け爆音の 雷霆を

見よ爆弾の 炸裂を

原爆大戦 捲き起こり

全地は今や 生き地獄

4

敗滅の報道 空を飛び

混沌と淆乱の 地に化しぬ

幕屋はいづこ 見えわかず
刺草・薊 焼けただれ
狼・梟 影見えず
莫々たりや 全世界

5

時は移りて 時期を呼び
壊滅の夜は 明け初めて
朝霧霞む 地の面に
朝日の光 指しそえば
小草の芽生 現はれぬ
ああ復活の 春は来ぬ

6

見よ曠野には 紅白の
サフランの花 咲き薫り
見渡すかぎり 楽園に

7

復活りたり あな不思議
いざ平伏して 聖名を呼び
声高らかに 讃美せん

8

レバノンの栄光 男の児らに
サフランの美は 女の子らに
輝き出でん あな嬉し
歌ひて舞えよ 乙女子よ
主の栄光を 身に浴びて
花サフランの 精の如
「遣れる民よ 汝らは
曠野の中に 恵まれぬ
わが窮り無き 愛により
救はれたるは 十字架の
碎けの愛の人々よ

民族の差別 絶えてなし」

9

時期は来れり 人よ聞け

盲者の眼 開かれぬ

聾者の耳 聞えたり

跛者の脚 立ちあがり

啞者の舌は もの言へり

主イエスのみ業 茲に成る

10

曠野に泉水 たばしりて

砂漠の中に 川流る

涸れたる丘は 緑して

羊の群が 牧はる

猛き獣の 影失せぬ

小鳥や蝶が 飛び交うよ

11

イエス・キリストに 救はれし

民らは今や 復活の

大地の人よ 歓びて

おのが天職 はげみつつ

交響楽を 編み成さん

神の聖旨の 成るままに

12

噫これ夢か 幼か

全地は今や 神仏に

伏しておろがみ 立ち帰り

かたみにゆるし 相抱き

愛の世界を 体現せよ

聖書の預言 畏るべし

A32

イスラエル・ユダの

(二九八二・八・二八作詞)

——イザヤ四〇——四八——

S 330 「うき世の嘆きも」

1

イスラエル・ユダの 罪はゆるされ
バビロンを出でて 帰りし如く、
我らも出我し み許に來たり
十字架・聖靈の 道につきけり。

2

宇宙を創造れる み神の眼には
諸々の民は 無きにもひとし、
あらがふ国々 塵にも似たり、
み神の靈知は 測りも知れず。

3

汝ら知らずや 耳にもせぬか、
み神はみ空ゆ 見おろし給ひ

4

地に住む者らを 蝗とぞ見る。
涯なきみ空は 神の幕屋ぞ。

5

み靈のみ神は 力の源ぞ
依り頼む者に 力を賜ふ、
晨に夕に いそしみたれど、
み力臨みて つかれを知らず。

6

「まことに我こそ 自らのゆえ
汝れらの罪過を 心に止めず
汝れらの罪過は 雲散霧消！
わが愛わが義を 与へて尽きず！
我は汝らを あがなへる神、
汝れらはわが有 名を与へたり。
水中を渡るも 溺れず水に

火中^{ひなか}を往くとも 燃ゆることなし。

7 キリストの僕 撰びの群よ、

預言者・使徒らの 道を受け継ぎ、

聖靈^みの幕屋を 張りける僕、

み霊の火となり 突き進めかし。

8 選びのみ民よ み霊の群よ、

汝れらは誰しも 愛の人たれ、

傷める蘆^{あし}をば 直く立たしめ

小暗き灯火^{ともしび} 燃え立たしむる。」

9 エホバのみ神は み民のうちに

み霊の主として 隠れて在ます

うつせ身われらにキリスト・イエスは

隠り身となりて はたらき給ふ。

10 「救をほどこす 我は義の神

胎を出でしより 汝は負へり

年齢^{よかい}の果てまで 荷ひて救はん

使命のかぎりまで 貫き果たせ！

11 我こそ今しも 汝に示さん

未だ告げざりし 世界の秘事を

わが名のゆえにぞ 怒りを抑へ

審判^との時期^{とき}をば 忍びに忍ぶ

12 われこそ歴史の 元始^{アルパ}と終末^{オメガ}

世界は今こそ 回帰せざれば

前代未聞^{カクモトコトナク}の悲劇^{トラジ}の終末^{フィニス}！

全地は地獄^{アヘム}に 変貌すべし！

A33

主なるキリストは

(一九八二・一一・五作詞)

——イザヤ書四九—五五——

S 調 「夕陽はかくれて」

1 主なるキリストは 選びの民の

救主なれど 彼らは受けず

さはあれキリスト 世の終末まで

彼らの帰るを 祈り待ち給ふ

2 「ああイスラエルよ 選びの民よ！

母親情なく その乳児を

忘るあるとも 我は忘れじ

永遠の愛に 抱かれざるや」

3 主は侮られて 人に棄てられ

苦患を知り給ふ 悲哀の人！

しかるに我らは 神に打たれて

苦しめられたる 人と思へり。

4 苦しみを忍び 口を開かず

屠場に向ふ 羔の如

我らの罪をば 荷ひて独り

十字架の上にて 碎かれ給ふ

5 復活の主は パウロを選び

聖霊の器に 翻へらしめ

異邦人への 栄光となして

世界にあまねく 道を伝へり

6 「わが義は来たり 我は救ぞ

この義を受くれば 救はれてあり

贖はれし者 讃歌を謳へよ

汝れらが胸には 歎び絶えじ」

7

み母の胎より 生れにし時ゆ

み神に護られ 育くまれたり

聖言聖霊は わが生命なり

イエス・キリストの 無者たる僕

8

「わが愛の幕屋 大胆なれよ

エホバの僕よ 時期は迫れり

身証の伝道 地道になして

幕屋を拡めて 網を延ばせよ」

9

実存主をたづねよ 日の暮れぬ間に

近くに居給う 主を求めよや

とやかく思はで イエスに帰れ！

み腕を拡げて 抱き給ふぞ

10

日の本の人よ 聖書に來たれ

神のドラマたる 現実の中に！

キリストの力 われらに迫り

思はず叫ばん ハレルヤ・アーメン

11

「渴ける人々 來たりて飲めよ

永遠の水を われは与へん

我は聖霊の バプテスマせん

歎び尽きせぬ 生命に溢れん。

12

わがエクレシヤよ 使徒らの如く

我れに立ち帰り 一如となりて

いづこも聖国の 現実となして

いづれの人をも 迎へ抱けよ！」

A34 み霊の主イエスに

(一九八一・八・一〇)

——イザヤ五六一六六——

S 57 「わが主のみに」

1 み霊の主イエスに 深く祈り入る

悲しみにかえて 歓喜の油

憂いの心に 讚美の衣を

与えてやまざる われらの義の主よ

2 願はくは汝 み空を裂きてぞ

天降りし給ひて 汝が義のみ霊を

霰と降らしめ 枯葉にも似たる

われらの空しき 義を吹き飛ばせよ

3 日の本の国の 義朝日の如く

大和民族の 救松火と

燃え輝くまで われらはみ霊の

炎をともして 休むことあらじ

4 われらキリストを 大いに喜び

われらの魂 主をたのしみとす

新郎が新婦を よろこぶが如く

キリスト我らを 喜び給ふぞ

5 主イエスのみ霊は わがうちに来たり

われらは福音を 語らざるを得ず

たましひを救ひ 心の呻きを

からだの痛手を 鎮めしめ給ふ

6 われは独りにて 酒槽を踏み

主キリストのみは 我を知り給ふ
主の義のゆえにぞ 憤りたれど
救贖かぐだみの故に 黙して荷へり

7
いつはりなき子ら 汝らわが民！

われに祈り入れ われに帰り入れ！

わが愛の腕かみ 抱きて荷はん

み霊の力は 汝れらに溢れん

8
天なるみ国の 幻の中に

第三イザヤの 見たるは何ぞや

み霊に満ちたる 永遠とこしえの乳房

父なるみ神の 恵みの徴ぞ

9
汝は我らの 衷なる神よ

我らは汝の 衷なる民よ

天地を新たに 創造り給ふ主よ
百年ひゃくねん生くるも 永遠とこしえの一日ひと

10
イザヤの預言は ひびきて新たに

ヨハネの黙示に 希望の花をば

咲かせて果てなき み国を現じて

み民に讃美の ハレルヤ挙げしむ

A35 み空を渡る雲

(一九八一・九・一作)

歌詞「ローレライ」
作曲（ジルヒャー）

1
み空を渡る雲 谷の流れ

翼をひろげて 風に乗る鷺

白帆をかがげて 滑りゆく舟

自然の法相^{すがた}の 美しさよ！

2 み空はかき曇り むら雨降る

小鳥はねぐらに かくれゆきたり

いなづま閃^{ひらめ}き 雷^{いかづち}鳴れり

自然の法相^{すがた}の 快^{こころよ}さよ！

3 人の世の道相^{すがた}は みだれたるか

無心の大道は 昔語^{いかり}りか

愛の深き影 いづこにある

キリストの道を 貫^{くわ}き往かん

4 今こそは世界の 政治家たち

心を注ぎて 手を握れかし

主義を立ち越えて 和をばはかれよ

若し然かせれば 世界破滅！

A36 涯しも知れぬ大宇宙

(一九八三・九・六作詞)

——最大の芸術家——

歌詞一高登歌「太平洋の波の翹に」(沢村貞二郎原曲)

1 涯しも知れぬ大宇宙 銀河の数は何億

か

何億光年走るとも 極まりなけれその

時空

夜空を仰ぎ言なし 神のみわざの神秘

さよ

2 太陽系のこの地球 その天然のゆたか

さよ

春夏秋冬めぐりゆき 花咲き匂ふ野山

あり

小鳥は舞ひて昆虫すたく 神のみ園の
美しさ

3

椿に梅と桃の花 海棠、連翹、山桜
朝顔 菫、百合、桔梗 尾花よ、萩よ、
藤袴

撫子、葛よ、女郎花 宇宙の影かコス
モスよ！

4

創造のわざ万象の いやはての傑作、
そは何ぞ

神の似姿人の影！ 文明文化極まりて
芸文の華咲き香る 芸術の源は神と知
れ！

5

大自然には国境なし 幼児らにも国境
なし

いづれの国も神の属 自国の使命自覚
して

大指揮者たる神に抛り 交響楽を奏で
ずや

A37 われはみ父の

(一九八四・三・八作詞)

ヨハネ福音書第五、第六章
歌詞 一高寮歌「そよぐ微風かほる」

1

われはみ父のなすを見て 行ふほかに
何ごとも

いかで自らなし得んや み父の力受く
るのみ

すべてを父は子に示す 愛すればこそ
いつにても

2 わが言をばよく聴きて この世に我を
つかはせし

父を信ずる人こそは いのちを得たり
水遠の

審判を受けず今にして 死より生命に
うつりたり

3 み神のパンは天降りして 生命をば世
に与ふなり

われは生命のパンなるぞ 我に来らば
亡びなし

我を喰へよわれを飲め わが血と肉に
生命あり

4 わが汝らに語りける 言は霊の生命な
り

わが血も肉もみ霊なる 愛の生命には
かならず

祈り入りてぞ身に受けて 我と一如に
生きよかし

5 イエスはみ神の無者なるぞ されば我
らは無者たれや

主の十字架の賜ひたる 無の現実に在
るなれば

かくてみ霊は天降りして 無量の力身
に溢る

A38 荒野の中に

(二九八四・九・四作詞)

——黙示録第17—18章——

歌詞「妙義山」田村虎蔵作曲

1 荒野の中に 我れ観たり

緋色の獣に またがれる

紫衣と 宝石を

からだにまとへる 大淫婦

2 いかなる女か この徴

驕れる妖婦の バビロンぞ

その酒杯は 聖徒らの

貴き証の 血にあふる

3 この世の富と 権勢なる

バビロン驕りて その元主

羔の君を あなどりて

サタンの軍備を 増しゆけり

4 力に満ちたる 御使が

礦臼の如き 大石を

抬げて海に 投げこみて

都の滅亡を表はせり

5 大なるバビロン 倒れたり

羔の怒 現はれぬ

狂へる迫害 つづけたる

王者の都は 滅びたり

6 禍なる哉 今世紀

み神にそむける 文明は

羔の審判 招くなり

世界は今こそ 危機なれや

7 禍なる哉 世紀末

悪魔の兵器の 生産に

狂へる世界よ クオヴァデイス？

世界よみ神に 立ち帰れ！

8 まことの靈止に 立ち帰り

イデオロギーを 乗り越えて

東と西の 為政者よ

心と心の 握手せよ！

A39 羔の婚姻

(一九八四・九・四作詞)

—— 黙示録第19—22章 ——

歌詞 一高登歌「ああ玉杯」

1 救済と栄光 神のもの

御審判義なり 真理なり

神の僕ら 報はれぬ

血の復讐は 果たされぬ

ハレルヤアーメン 僕たち

全能の主を 讃美せり

2 忍び待ちたる 時機は来ぬ

羔イエス 今こそは

エクレシヤなる 花嫁と

婚姻の座に つき給ふ

幸の極みの 時は来ぬ

み国の晨 明け初めぬ

3

嗚呼^{ようこひ}歡喜^{よろこび}の 徒^{としがら}盡^{がら}よ

聖名を讀^{よみ}へん 羔^かの

婚姻^{こんいん}の時期^{とき} 遂^{つい}に來^きぬ

新婦^{はなよめ}今^{いま}や か^かがやける

細布^{きぬ}を着^きて 備^いへせり

そは聖徒^{せいと}らの 行^い為^{わざ}なるぞ

4

白馬^{はくば}に驕^{おご}れる 神^{かみ}の人

炎^{えん}の如^{ごと}き 眼^めの光

衣^えの色^{いろ}は 血潮^{けうしほ}なり

「神^{かみ}の言^{こと}」は その聖名^{せいめい}ぞ

白^{しろ}き細布^{きぬ} まとひたる

天^{あま}の大軍^{たいぐん} 從^{したが}へり

5

騎士^{きし}の口^{くち}には 利^きき劍^{けん}

その聖手^{せいしゅ}の中 鉄^{てつ}の杖^{じょう}

神^{かみ}の烈^{れつ}しき み怒^{いか}の

血^ちの酒槽^{しゅそう}を 踏^ふみ給^{たま}ふ

その聖衣^{せいい}の 文字^{もじ}は是^{こゝ}れ

「王^{わう}の王^{わう}」なり 「主^{しゅ}の主^{しゅ}」なり

6

われまた見^みたり み使^しの

日影^{りかげ}の中^{なか}に 立^たちたるを

彼^{かれ}れ叫^なびたり 「鳥^{とり}どもよ

神^{かみ}の族^{うゑ}を 苦^{くる}しめし

王候^{わうこう}代官^{だいくわん} もろもろの

惡^{あく}の徒^と盡^{がら}の 肉^{にく}を喰^くへ」

7

われまた見^みたり 獸^けらと

地^ちの權勢^{けんせい}と その魔軍^{まぐん}

白馬の騎士と 天軍に

挑みかかれる 決戦を

ハルマゲドンの この戦

サタンの魔軍 敗れたり

8

我また見たり み使の

鍵と鎖を たづさえて

蛇なるサタン うち捕へ

陰府に投げ入れ 封ぜしを

千年の間 悪魔より

諸国の民を 護るべく

9

我れまた見たり キリストと

神の言を 証して

カイザル礼拝 拒みたる

殉道の士が よみがへり

10

千年王国 終りたり

ここにサタンは 放たれて

ゴグとマゴグを いざないて

悪の軍旅を 集はしめ

聖徒の陣営 囲みしが

神の火魔軍を 焼き尽す

11

ああ開かれぬ 新天地

聖なる都 エルサレム

新婦の如 準備して

神のみ許ゆ 天降りせり

大いなる声 聖座より

出づるを聞きて 歡喜せり

12

「神の幕屋は 人と偕

神は今こそ 霊止の中

人は今こそ 神の民

神は自ら 人に住む

今や死も無く かなしみも

くるしみも無し 涙無し」

13

「視よ我れすべて 新たにす

旧きは去りて 事成れり

我れアルバなり オメガなり

我は生命の 源泉よ

勝利の子らよ わが子らよ

来りて飲めよ 永遠に」

14

聖なる都 エルサレム

その光輝は 碧玉か

都の城の 石垣に

十二の門あり その上に

十二支族の 名を記す

十二の使徒の 名は礎石に

15

神の都の 石垣の

基を見よや さまざまの

光かがやく 宝石よ

あな美はしや み空なる

虹の光の 結晶か

十二の宝玉の 石垣よ

16

都の内に 宮を見ず

全能の神 羔は

天つシオンの 宮なるぞ

ああ日も月も 照らすなし
神の栄光^{さかへ}ぞ 光なる
羔はその 燈火^{とうし}よ

17

都大路の 真中には
水晶の如 透徹る
生命の水の 河流る
その兩岸に 樹々ありて
十二種の実^みを 結ぶなり
その樹々の葉も 妙葉ぞ

18

「この書^{よみ}の預言 封ずるな
不義をなす者 不義をなし
義に生くる者 義に生きて
黒白あらはに 現はれて
神のみ民と 陰府^{よみ}の子の

別るる時期^{とき}は 迫りたり」

19

「視よ速やかに 我れ到る
おのが衣を わが血にて
洗ひし者に 幸^{さいち}あれよ
われはダビデの 萌生^{ひげ}よ
輝く曙^{あけ}の明星よ！

我れ速かに 到るべし」

20

聖靈^{みたま}も新婦^{よめ}も 叫ぶなり

「新郎^{はなむこ}イエス 来たりませ！」

「われ速かに 到るべし」

「アーメン主イエス 来りませ」

天地に木霊^{こだま}す「マラーナタ、

アーメン イルクー クリエ イエ

ス！」 ハレルヤ

A40

キリストは地に在りて

(一九八五・二・二二作詞)

——キリストとペテロ——

作曲 市川りり子

1 キリストは地に在りて枕なき旅の人よ

キリストは罪の世に神のみ業神の言

ハレルヤ ハレルヤ 現はしませり

見よこの人!

誰か知らんこの真理を、身を提し来た

りて見よ!

2

主イエスは甦りテベリヤの湖^{うみ}辺近く

弟子どもに現はれて「舟の右手^{みぎ}に網を

下ろせ!

3

ハレルヤ ハレルヤあみに充ちたる大
漁なりき

誰か知らん主キリストの深き愛今も然
り

「ああシモン愛するや」「主よ然りわ
れは愛す」

主は三たび問ひ給ふ「主をば愛し聖名
を讀ふ」

ハレルヤハレルヤ「牧の羊を確^しかと飼^か

えよ

ああペテロ我と共に十字架の道を往け

よ!」

A41 十字架上の七言

(一九八五・三・一〇作詞)

S 136 「血潮したたる」

1 あやしき雲に空は暗み

ゴルゴタの上に立つは何ぞ

十字架は三基 何の徴

罪びと左右 義人真中

2 「汝はキリストか いざおのれと

我らを救へ」 かくうそぶく

声に応へて 「我らは罪！

汝畏れよ 神の聖名を」

3 「主よキリストよ 憶えたまへ

み国の旅に 昇るときに」

「よき告白ぞ、我と共に

汝れは今日しも パラダイスぞ！」

4 地の罪びとを 執りなしてぞ

十字架のイエス 叫び給ふ

「道に外れし 彼らなれば

ゆるしたまへや 父よ神よ」

5 ヨハネを見詰め マリヤに言ふ

「女よ見よや これは汝が子」

ヨハネに向ひ かくはさとす

「母のマリアは 汝が母なり」

6 天地海冥 午後の三時

「わが神、み神！ 何ぞ我を

見棄て給ひし！」 かく叫べば

電光雷鳴　これに応ふ

7　血潮したたり　地に泌み入る

「ああわれ喝く！」　血の呻きぞ

「事は畢りぬ」　愛の叫び！

あがなひの業　ここに成りぬ

8　「わがたましひを　ゆだねまつる

父よみ神よ！」　大音声！

聖所の幕は　震ひ裂けぬ

天地ともに　霊に震ふ

B類 日本キリスト召団特有讃歌

作詞 小池辰雄

番号

頭詞

その歌の頭詞

BS 1	東京召団	「小池政美は」	「花」 春のうららの
BS 2	京都召団	「聖名に在りて」	S 404 山路こえて
BS 3	大阪召団	「いとも靈すしや」	S 495 イエスこの身を
BS 4	埼玉召団	「イエス、カペナウムに」	聖歌 589 めぐみの高き峰
BS 5	裾野召団	「靈峰富士の」	「早春賦」 春は名のみの
BS 6	奈良召団	「聖武天皇創建の」	「浜千鳥」 青い月夜の
BS 7	栃木召団	「男体女峰の」	S 315 浮世のあら波
BS 8	岡山召団	「噫主よみ名ゆえ」	イギリス民謡 烈しき雨風
BS 9	札幌召団	「北斗の下」	ドイツ民謡 いかで君と別れゆかん
BS 10	鹿児島召団	「歴史はゆかし」	一高寮歌 緑もぞ濃き柏葉の
BS 11	信州召団	「城跡ゆかし」	S 243 ああ主のひとみ

〔註〕 BSはB類の中の各召団（S）特有讃歌の署名

B 1	君は葡萄樹	S 273	わがたましひを
B 2	使徒らの昔を	S 359	夕陽はかくれて
B 3	晨に夕に	S 319	わづらはしき世を
B 4	天なる母よ	S 519	わが君イエスよ
B 5	巷のをのこら	S 530	うき世の嘆きも
B 6	今はいづこで	「さすらひの歌」	行かうか戻らうか
B 7	都の西の	S 461	主我れを愛す
B 8	明治と大正	S 312	いつくしみ深き
B 9	春を迎へ	「青葉の笛」	一の谷の戦
B 10	主のみわざ慕ひて	S 331	主にのみ十字架を
B 11	塩の湖 うみ の	スコット作曲	春の夕、岡に海に
B 12	わが名のためには	聖歌 582	神の聖子に在す
B 13	東京駅頭	S 312	いつくしみ深き
B 14	ああ見晴るかす	S 515	十字架の血に
B 15	世界に名だたる	「追憶」	星影やさしく
B 16	炎の如く	S 514	弱き者よ

B 17 すべての人に

「浜辺の歌」

あした浜辺を

B 18 明治は三十七の年

一高寮歌

暁寄する新潮の

B 19 真白き峰の

S 214

北の極なる

B 20 イエス・キリストの

S 512

我が魂の慕ひまつる

番外 いつかは知らねど

聖歌 623

「新天地、再臨待望。イザヤ書第三十五章の預言」

〔註〕特別集会の終りには、いつもこの「いつかは知らねど」を合唱する。因みに、かの有名な「真白き富士の峰緑の江ノ島」はこの曲に由る。

BS1 東京召団
讃歌 小池政美は

(一九八二・八・二七作詞)
「花」(春のうらの隅田川)、瀧廉太郎作曲

1 小池政美は 北京にて

十字架荷ひて 仆れたり

その弔の 合戦を

我れ戦はんと 決意せり

2 武蔵野村に 幕屋張り

小さき集会を はじめしは

世紀の四十路 秋のこと

コスモスの花 咲き匂ふ

3 阿蘇の深山の 祈禱にて

聖霊降れり 天裂けて!

次元は変り たましひは
靈氣を吸ひて よみがへる

4 星霜降りて 世は変り

人の去来は 満干潮

十字架の許に 祈りつつ

ひたすら我は 進みけり

5 聖書旧約 二十年

詩篇五年 祈りけり

新約聖書 十五年

生涯のかぎり 聖書なり

6 教員生活 五十年

破れ器を 主は棄てず

「エン・クリスト」の 旗かかげ

全召団と 進み往く

7

破れ幕屋の 破れ目に
星のきらめく 影宿る
福音のため 助け合ふ
聖霊の愛は ここに在り

8

『無の神学』は 来し方の
苦節五十路の 血涙の
滴る文字の 告白よ
汝れ知り給ふ 我は伏す

9

『無の神学』は 叫ぶなり
「十字架・聖霊の焦点の
楕円軌道を めぐりゆく
無者キリストの 無者たれよ」

10

北の島より 列島を貫き
南の島へ 連ねゆく
全召団の 連関よ！
聖名讃へつつ 進まん。

BS2

京都召団
讃歌

聖名に在りて

(一九七九・一二・四作詞)

S 444 「山路こえて」

1 聖名に在りて 古都京都に

四方^{よしも}より集ふは み霊の子ら

2 鴨の流れ 比叡の峯

窓べに眺めて 尽きぬ想ひ

3 春はみどり 萌ゆる若葉

希望^{のぞみ}の光に 胸は躍る

4 秋はもみぢ 燃ゆる紅葉^{べにば}

愛の篝火^{かがりび} 胸^{とも}に点す

5 聖書^みを読み 祈り入りて

み霊の力を 受けて歌ふ

6 十字架されし み霊の身よ

我らかくて生く とこしなへに！

7 力に満ち 愛に溢れ

聖名を讀へつつ 再^{また}た会^あふ日まで

BS3

大阪召団
讃歌

いとも靈すしや

(一九八二・一二・八作詞)

S低「イエスよこの身を」

大阪召団創立六周年に際して

1 いとも靈すしや 神の選び

比叡山麓 住まひし時

われは聞けり 神の声を

そのとき以来 祈り入れる

2 東を指して 旅に出でぬ

天つ幕屋の 門を叩く

われは聞けり 主の御声を

わが魂は 力を得ぬ

3 浪花の里に 帰り来たり

円現塾を うち開けり

われは聞けり 主のみ声を

「わが円現は 汝れに成らん」

4 大阪城は 神の徴

仁徳御陵 世界無比ぞ

近松、西鶴 かの夕霧

「潮の遠鳴り」 縁の地ぞ

5 我らはイエスの 勇士なり

み霊の力 われらに満つ

我れは聞けり 主の呻きを

み霊に在りて 深く祈る

6 「エン・クリストの 現実なれよ

カイロス来れば 爆発せん

われは進む 汝れら進め、

証人たれ 世の終末まで」

7 聖名讃へつつ 進み往かん

聖名うたひつつ 道を伝へん

我は聞けり 主のみ声を

友らよ往かん 十字架道を！

BS4 埼玉召団
讃歌 イエス・カペナウムに

(一九八二年春作詞)(マタイ八・一一三)

聖歌88「めぐみの高き峰」

埼玉召団創立五周年に際して

1 イエスカペナウムに 入り給ひし時

百卒長来て 中風の僕の

苦しみを述べて 主に求めたれば

主イエス憐みて 「われ往きて癒さん」

2 百卒長言う 「わが屋根の下に

主を入れまつるに われはあたえせず

ただみ言にて わが僕癒えん!

み脚運ぶには 及ばぬわれなり」

3 「わが兵卒^{つはしつ}らは「ゆけ!」と言へば往き

「来たれ」と命ぜば 直ちに馳せ来る」

イエスこれを聞きて 「かかるあつき信

全イスラエルに 一人すらも無し!」

4 「多くの人々 西と東より

聖国の宴^{うたげ}に つくとも、汝ら

アブラハムの子ら 哀哭^{なげき}、切齒^{はがみ}せん

かく主は語れり 群居る者らに

5 キリストは長^{おさ}に 腹の底べより

「往け! 汝に成れ 汝^なが信の如く」

イエスの言下にぞ 僕は癒えたる

ああ主のみ力! ああ無的の信!

6 かかる信仰は われらの心ぞ

埼玉召団 勇みて進まん

賑う巷の ただなかに在りて

聖霊^{みたま}の力の 証人たらん

BS5

裾野召団
讃歌

霊峰富士の

(一九八二・三・二一作詞)

「早春賦」「春は名のみの」

裾野召団創立三周年に際して

1 霊峰富士の 朝日に映ゆる

妙なる影に 心躍りて

東山荘に 聖名を叫ぶ

裾野召団の 意気や高し

2 春には霞み 夏は峙ち

秋には澄みて 冬は輝く

神秘の富士と 共に祈る

裾野召団の 魂や深し

3 秀麗無比の 世界の富士の

裾野に張れる 聖霊の幕屋に

4

噫キリストの 聖霊の愛

各召団を 一つに包み

主の栄光を 現はし給ふ

我ら平伏し 聖名を讃ふ

臨む霊夢を 胸に抱く

裾野召団の 気宇や広し

BS6

奈良召団
讃歌

聖武天皇創建の

(一九八三・四・一三作詞)

歌調(青い月夜の)

「浜千鳥」 弘川竜太郎作曲

1 聖武天皇 創建の

面影映す 東大寺

迷へる人を 極楽へ

導く慈悲の 廬舎那仏もしゃなぶつ

2 仏心ほとけこころの いと深き

光明皇后 癩病らいびょうを

接吻くちづけをもて あはれめば

病者は化して あな菩薩

3 古き文化の 宝庫たる

正倉院を 訪ねれば

4

采女うねめの悲恋こいを 秘ひむる池

猿沢の水 澄みがてか

柳の葉影 揺れ動き

五重の塔は 動かじな

5

三笠の月を 偲おもびてし

仲麿の歌 忘れめや

優雅なる山 若草は

奈良の徴しるしぞ 永遠とこしへに

6

奈良の心は 萬葉よ

聖書の魂は 詩篇なり

祈りの女性むすめぞ 此処ここに在る

奈良召団の 心臓なり

7

胸の病の 仁術を

ほどこすなべに 福音を

身証する人 此処に在り

奈良召団は 愛の里

BS7

栃木召団
讃歌

男体女峰の

(一九八一・二・一二作詞)

S 315 「浮世のあら波」

1 男体女峰^{にょ}の高峰^ねを望みて

栃木召団は 成れり建国日

2 召団^{さうだん}の成りたる その前^{さき}の夜^{よる}の

祈^{つとむ}りの集^{あひ}会^ひに 十字架^{じゆうじふ}霊現^{れいげん}す

3 戦場^{せんば}ヶ原^{がはら}に 万人^{ばんにん}の救済^{きうさい}を

冥想^{めいぎやう}してける 内村鑑三

4 雪^{ゆき}の日光^{にっこう}の 山路^{さんろ}を辿^{たど}れば

樹氷^{じゆへい}の花咲^さき 虹^{にじ}と輝^{かがや}けり

5

清^{きよ}き中^{ちゆう}禅^{ぜん}寺^じ湖^こ 神^{かみ}さびたる湖^{うみ}
静寂^{じやうじやく}破^{やぶ}りて どよもすは華^{はな}厳^{げん}

BS8

岡山召団
讃歌

噫主よみ名ゆえ

(一九八一・四・一二作詞)

「烈しき雨風」イギリス民謡

1 噫主^{あゐ}よみ名ゆえ 岡山なる

我らの櫓^{やぐら}は「玫瑰^{マローズ}」芸房

うれしや名にし負ふ「火を噴く珠玉^{たま}」

七宝^{ななたま}創作の 召団なり

2 キリストの力 我れに満ちて

我れ無く世もなく み業は成る

見よ見よ芸術^{たくみ}は 妙^たへに靈^くすし

ただ平伏してぞ 聖名を讃ふ

3 キリストの聖名は アルファ・オメガ

(α ω)

われらの芸術^{たくみ}の 象徴^{しるし}なれや

神技の証者に 与へらるる

み霊の桂冠 天降^{あし}り来たる

4 白波蹴立てて 六口^{むくち}島へ

われらは勇みて 舟路を往く

み空に星影 沖には漁火

集会^{つどひ}はみ霊の 火に燃えたり

5 春風そよげる 島の晨^{あした}

桜花^{さくら}は満開^{さかり}よ 胸は踊る

集会^{つどひ}はみ霊の あらしに泣き

岡山召団 叫ぶハレルヤ!

BS9

札幌召団
讃歌

北斗の人

(一九八二・八・一五作詞)

„Ach wie ist's möglich dann“ 作曲 E. Klichen
[いかで君と別れゆかん]

1 北斗の下 幕屋張れる

札幌召団 ハレルヤ

いざやわれら 祈り深く

聖書^み誦^ずして 生かまし

2 イエス・キリスト 聖名は力

集ふわれら たのしや

ああ聞かずや 福音(よきおとづれ)

われらは待つ 世人^よを

3 今は昔 札幌バンド

士気烈々 蹶起せり

4

広大無辺 北海の島

歩むはこれ 伝道

あつきねがい み霊に在り

札幌召団 ハレルヤ

BS10

鹿児島召
団讃歌

歴史はゆかし

(一九八三・四・九作詞)
一高嶺歌「緑もぞ濃き柏葉の」

1 歴史はゆかし 鹿児島

外様大名 島津家は

三百余年 貫きて

文武両道 健やかに

明治維新を 迎へたり

その貢献は 偉大なり

2 敬天愛人 一如なる

維新の大人 西郷は

火山の如く 今もなほ

われらが胸に 燃ゆる哉

南洲は生く 城山の

悲劇を越えて 永遠に

3 「皇国の 興廢は

此の一戦！」と叫びける

司令長官 東郷の

かの海戦を 忘れめや

旅順、遼陽、奉天の

大山元師 偲ぶなり

4 黒田、藤島、和田画伯

彫刻家には 新納あり

文化の世界 花咲けば

森有礼は 教育の

先駆者として 散り果てぬ

多士済々の 鹿児島や

5

天なる時期に迫られて

鹿兒島は西 長島の

森蔭深き 避所

永田邸の 座敷にて

集会を開き 聖名讀ふ

鹿兒島召団 ここに成る

エン・クリストの 現実を

今日といふ日に 生き貫かん

燃えよ若人 キリストの

聖靈の火にて 烈々と

6

福音の 奥義にて

活人の武道 究めゆく

剣士天剣 祈り入り

堅忍不拔 水茎の

写経は聖書 全巻ぞ

瑞雲立つや 筆の跡

7

楼花爛漫 此処彼処

噴煙濛々 楼島

BS11

信州召団
讃歌

城跡ゆかし

(一九八三・一一・一三作詞)

S 243 「あま主のひとみ」

1 城跡ゆかし 櫻咲く

丘に登れば 春霞

小鳥さえずり 蝶は舞ふ

自然と共に 聖名を讀む

2 浅間の夏の 集会^{つどひ}にて

祈り入りたる まなかひに

白き衣の みすがたの

噫主のひとみ まなざしよ

3 千曲^{ちくま}に浮ぶ もみぢ葉の

かげにきらめく 魚^{うを}の影

見よや回帰の 徴^{しるし}なり
われらも帰らん 主のみ許

4 浅間の心 君知るや

雪の衣を まとひたる

すがたはこれぞ 羔^かに

あがなはれたる 徴^{しるし}なる

5 浅間の煙 君見ずや

火山国なる み民われ

胸にみ霊の 火を宿し

炎々たれや 主の僕

B類 折にふれての特殊讃

歌

作詞 小池辰雄

B1 君は葡萄樹

(一九七七年春)

S 3/4 b 曲 「わがたましひを」

1

君は葡萄樹 われらその枝
いのちの君に 連りあれば
つねに緑し 枯るるを知らず
花咲き香り ゆたかに実る

2

祈りて在れば み霊の光
わが身にそそぎ 力は来たり
愛の燈火 心に點り

3

われを貫き み業は進む

わが葡萄園 わが召団!

みたまの力 いのりに受けよ
十字架を負ひて われに従へ
使徒の昔を 今とし生きよ

4

わが主イエスよ われらの幹よ
み霊の愛に われら生きん
大和島根に 若枝を伸ばし
葡萄の房を領ちて与へん

B2 使徒らの昔を

(一九七九・一二・九作詞)

S 30 「夕陽はかくれて」

1 使徒らの昔を 慕ひて我は

聖書に読み入り 祈りてあれば

《おりかへし》

み霊の我が主は わが身を抱き

十字架に耐え得る 力を賜ふ

2 聖書の現実^{うつつ}は 次元の高き

み霊のたばしる 生命^{いのち}の世界

3 主の日を^{あした}遵^{したが}りて 戦ひあれば

聖霊も呻^{うな}きて 執り成し給ふ

4 聖旨^{みことば}のまにまに わが業^{わざ}をなし

主に在る生きざま 貫き往かん

5 わが世の旅路も 日暮を迎へ

夕^{ゆづ}の鐘^{かね}の音^{おと} 暮韻^{はくいん}颯々^{さつさつ}

6 終末^{しゅうまつ}の峠^{とうげ}を 踏み越え進み

星のしるべにて 嶮路^{けんろ}を往かん

7 常世^{とこよ}の晨^{あした}の 明^あくるときには

天使^{てんし}天降^{てんかう}りて 昇らせ給へ

B3 晨に夕に

(一九七九・一二・一一作詞)

S 319 「わづらはしき世を」

1 晨^{あした}に夕に 朝日夕陽を
胸^{みみち}中に迎へん み民われらは

2 浮世の渦^{うず}より わが家に帰り
しばし休らひて 聖書^{みふみ}を開く

3 聖書^{みふみ}の光は われをばとらへ
み神のドラマに ひき入れ給ふ

4 祈^{いのり}りの魂^{たましひ} 神に迫られ
み言さながら み霊^{いのち}の生命

5 はらわたの嘆きを 主は知り給ふ

友らはいづこぞ 独り祈る

6 されどみ空には 使徒らの萬軍

看護りてあれば 孤軍安けし

B4 天なる母よ

(一九八〇・一・一九作詞)

S 519 「わがきみイエスよ」

1 天なる母よ 汗と涙の

幾十年^{いくとせ}をば 勤勞^{つとめ}め給へり

〈おりかへし〉

主よ主よ 愛を尽せし

すべての母を ねぎらひたまへ

母 小池みつ子の召天23周年記念日に

2 天なる母よ 北支の古都に
子を失ひて 帰途に失明

3 天なる母よ 闇の旅路を
かこつことなく 忍び給へり

4 世の母たちよ 子女らの胸に
信望愛の 花を咲かせよ

5 世の母たちよ 世界に平和
もたらすものは 愛の力よ

6 世の母たちよ 讃歌を合唱ひて
愛の虹をば 世界に架せよ

B5 巷のをのこら

(一九八〇・二・一七作詞)

S 530 「うき世の嘆きも」

1 巷ちまたのをのこら 求めは何か

家路の乙女ら 何をか語る

君らの心の 求むるものは

聖書みよみにあるなれ ひもときてみよ

2 「喫茶のお店に 立ち寄る人よ

たのしく語らん わが体験を

心を開きて 聴きたまへかし

いのちの言は よろこびとならん」

3

「聖書の話は 奇すしきドラマ
からだに受けたる 生命のひびき
そのときにわかに 歓びに満ち
わが身は生きたり 何にかたとへん」

B6

今はいづこで

(一九八〇・三・一四作詞)

「行こうか戻ろうか」(中山晋平作曲)

1

今はいづこで 暮しておるや
星は移るも 忘れめや
美しき想ひ出 かぎりもあらじ
おみなおのこら 今いづこ。

2

あつき祈りを ひとりで祈り
十字架のもとで われは待つ
岩にせかるる 谷川の如
流れ流れて 会ふときを

3

受けしみ恵 忘れておらじ
聖書みよみひもとき 祈れかし
昔を今の み霊の愛よ！
いつか集会つどひに 馳せて来よ

B7 都の西の

(一九八〇・一一・三〇作詞)

S 46 「自我を愛す」

1

都の西の 武さしの村に

幕屋を張りて 四十歳^{よそとせ}を経ぬ

《おりかへし》

わが主イエス 救ひ主！

われら生く エン・クリスト！

2 わが兄政美 北京の地にて

十字架を負ひて いのちをすてぬ

3 その死の祈り われをば打てり

われはめさめて 主を信じたり

4 無教会なる 群に育ちて

十字架を仰ぎ みたまを知らず

5 時は満ちたり 阿蘇の山にて

友の手島と 主に叫びたり

6 み霊は降り^{くだ} バプテスマされ

われらは使徒の 信に帰りぬ

7 三十年^{みそとせ}経たる 滝見荘にて

昔を偲び 感慨無量！

8 使徒らの次元 ああ慕はしや

キリスト召団 進みゆくなり

9 東京・京都 大阪と奈良

埼玉・裾野 増えよ召団

10 我らは聖名に 栄光^{さかへ}を帰して

無的実存 貫き往かん

(武蔵野幕屋四十周年記念歌)

B8 明治と大正

(一九八一・二・一作詞)

S 312 「いづくし深き」

1 明治と大正 昭和五十六

はやくも過ぎにし 七十七路よ
辿りける路は 惨めなれども
み恵みは深く 胸中にぞある

2 わが兄政美と 内村・藤井・

塚本の師恩 など忘れめや
友なる手島と 阿蘇の山にて
受けたる聖霊は 我らを変へぬ

3 かるときこのかた み霊は宿り

使徒らの次元に つらなりたれば
霊すしきみわざは 破れ器に
現はれ給へり ただ聖名を讃む

4 旧約新約 神のドラマぞ

聖書の焦点は 無者キリストぞ
彼は無私の人 神はすべてぞ
神秘のこの無に 漲る聖霊

5 十字架・聖霊 この福音の

証者となりてぞ 今こそ我ら
使徒らの一路を 貫き往かん
キリスト召団 勇みて進め

6

病患ある者に 手を按ぎ癒し

求むる者には 聖書を語り

迷う人々に 道をば示し

苦しむ人をば 祈り助けん

7 世紀の終末は ややに近づく

我らは各々 聖名にありてぞ

天賦の仕事に 力を尽し

主のため世のため 生涯を捧げん

〔註〕 七十七路（一九八一・二・七）の峠にさしかかりしかば

B9 春を迎へ

（一九八一・三・一七作詞）

——イスラエル旅行歌——

「二の谷の」（音楽の笛） 田村庄蔵作曲

1 春を迎へ イスラエルへ

テマサトラベルの 同行の群

今や出で往く 聖地への旅

この空路み旨かしこみて往く

2 音に聞きし 約束の地

今こそ希望は満たさるるなれ

わがキリストの み跡慕はし

この旅路すべてみ腕のうち

3 アブラハムの 旅路のあと

イサクとヤコブの面影しのび

エレミヤ、イザヤ 預言者の声

そのひびきこそは新たなれや

B10

主のみわざ慕ひて

(二九八一・五・七作詞)

——伝道の使命——

S 331 「主にのみ十字架を」

1 主のみわざ慕ひて み霊により

人のため世のため 力尽くさん

2 原始なる福音 力に満つ

使徒たちの如くに 道を伝へん

3 無限無量なる この福音

いついづこにても 語りつたへん

4 この福音を身に つけし我ら

ひとつたへざれば 禍なり

5 誰しも伝道の 使命ぞある

召団の兄弟姉妹 大胆なれ！

6 聖名のためなれば み名に在りて

み名のみ力をば 体現せん

7 聖名のためなれば 十字架を負ひ

アナテマ魂 貫き往かん！

B11 塩の湖

(二九八一・五・七作詞)

——聖地旅行記念——

「春の夕、岡に海に」スコット作曲

塩の湖の黄昏とき

み空翻る虹の弓！

死海の西 赤き山は

自然の要塞マッサダ

砂漠つづく丘の腹に

クムラン写本の穴あり

叢葉むらばの蔭ヨルダン見ゆ

長程サマリヤ越えゆく

湖うみの面に帆影うごく

噫なつかしやガリラヤ湖

「深みに往け！ シモン・ペテロよ」

主イエスの御声の聞こゆる

B12 わが名のためには

(二九八一・八・三二作詞)

——黙示録第二、第三章——

聖歌 聖歌「神の聖子に在す」

1 わが名のためには 耐え忍べよ

原始はじめの愛なる 我と共に

勝利を得れば バラダイスなる

生命の樹の果を 汝れに与へん

2 我はアルファなり オメガなるぞ

汝苦難にも 主を欣喜

死を越ゆるまで 忠実なれよ

汝はうち勝つ 第二の死にも

3 愛する召団 勇み進め

両刃の剣の 閃く下

勝利を得れば 神秘なるマナ

新しき名をぞ 汝れらに与へん

4 光まことの眼の神の子なり

人の心賜を見給ふ君

「汝れの信望 愛を知るなり

曙の明星は 汝が光なり」

5 汝が眼を覚まして 帰り来たれ

み霊の衣着て 進み往けよ

勝利を得れば 汝の名をば

生命の書にぞ われは記さん

6 ああ全世界に 戦争あらん

核の爆弾も 降らば降れよ

主は避けどころ み霊は力！

聖国に帰らば 栄光の柱石

7 アーメン主キリスト 根源者よ！

み霊は火の如 燃えて熱し

主は扉を叩く 開けて愛餐！

主と一つなるぞ すべての召団

13 14 15
B B B は三重奏 (TRIO)

B13 噫小池政美

(一九八一・九・一六作詞)

S 312 「いづくしみ深き」

1 東京駅頭 見送りてける

兄の面影は 髣髴として

わがまなかひにぞ 今も浮びて

時の流れをば 忘れしむるか

2 噫、小池政美 胸底深く

十字架を荷ひて 独り北京に

キリストに在りて 戦ひ貫けり

誰かは知らんや 彼の涙を

3 この世を去るとき 白き衣の

キリスト現はれ 彼を呼びけり

「主は招き給ふ 我を聖国へ

さらば母上よ ゆるし給へや！」

4 秋はまだ浅き 九月二十二

北京の上空へ 天翔けりける

時しも青春 二十路七つ

彼の生涯こそ 永遠の星なれ

5 星霜は移り 六十路を経たる

この秋奇しや 今ぞ北京へ

われは旅に立つ 福音のゆえ

七宝の道の 桂子女子らと

6 われらのキリスト！ 我らの力

道伴れとなりて 助け給へよ

聖霊の愛は われらに満ちて

中国の人を 抱き包まん

7 七宝の道の 個展は北京

洛陽二都にて み霊の作品の

証しを立ててぞ 中日間に

文化の虹をば 永遠に架けなん

B14 ああ見晴るかす

(一九八一・一〇・九作詞)

——長城と天壇——
S 515 「十字架の血に」

1 ああ見晴かす 北の尾根の

万里の長城 何を語る

登り往き 筆を執る

わが後べに 誰か迫る

2 振り向き見るに 誰も居らず

み霊に震へて 筆は走る

ささやくは 誰なるや

振り向きけるに 人影なし

3 ああ霊しきかな 小池政美

われらと呼びてぞ 黙示しける

鳥の如 城を越え

天壇指して 魂は飛べり

4 大理石なる 天壇の蔭

犠牲^{いけにえ}焼く爐の ほとりに坐し

主に歌ひ 祈り入る

仰げば月と 宵の明星

5 見よ天壇の 眞中の上

白妙^{しろたへ}の天女 舞ひ昇れり

われらの主 キリストよ

この霊徴に 我ら應^{こた}へん

B15 世界に名だたる

(一九八一・一〇・二四)

——中国の旅——

歌詞「追憶」——「星影やさしく」

1 世界に名だたる 北京の故宮に

宝玉^{マイユ}玫瑰^{メイユ}の 輝く宝力

見出でしわれらは よろこびに酔へり

その道しるべは 小池政美なり

ああ夢路の啓示！

2 北京と洛陽の 七宝芸術展覧

いづれも中国の 胸に泌み入る

われらの女史の 芸術の源こそ

主のみ力なり 聖名に栄光あれ

ああ友好の虹よ！

3

中国の古都西安 神秘の華清池

水面に映りし 楊貴妃の影

水もたゆたふや 月影ゆれたり

悲劇に終りし 玄宗の姫

ああ東洋の華よ！

4 李白、杜甫、楽天、詩人の都

洛陽の河べ 岩をうがてる

天つ龍門の 佛像の御影

歴史を貫き そのみ魂は生く

ああ霊すしや如来！

5 曠漠涯てなき 中国の南

心を躍らす 奇峯連なる

八重に疊なはる この大景觀

大空を指してぞ 雄叫ぶ姿よ

ああ素晴らし桂林！

6

そびゆる豊采山 晨に登れば

眼下の漓江は 紺碧の流れ

夕に登れば 陽光にかけろひ

山嶺は妙へに 彩どられゆけり

ああ忘れじこの日！

7

漓江の河くだり 爽快なりけり

芽船往き交ひ岩間に舳

船路は龍の如 神秘のパノラマ

創造のみ神の このみ業奇すし

ああ世界の桂林！

8

朝霧たなびく 山影の下

漁 船往く 暁の湖

東雲を破り 赫き陽昇れば

黄金の小波 きらめきわたる

ああ太湖の晨！

9

長江と黄河を 結びて延びる

運河は萬里の 水路なるかな

旧りにし船体をば 家とし生くるや

原始の相の 素朴の人々

ああ運河の生命！

10

幼き時より 音に聞きたる

華やかなる市 上海の夕

汽船を眺むる 人々の群

あこがれの胸に 幸あれかし

ああ東洋の港！

11

長程日日なべて 三十日に近き

中国の旅路

感慨無量！

百聞一見に 如かずと悟る

親しみ深めん 中国の人と

ああ神の子らよ！

B16

炎の如く

(二九八・一一・一〇作詞)

S 54 「弱き者よ」

1 炎の如く み霊燃えて

全召団に 霊火をともし

キリストは 力なり

エン・クリストの 現実なれや！

2

み空翔ける み霊の翼

全召団に天降りし給へ！

祈り入る キリストに

主と一つなり あなうれしや！

3 噫この世紀 危機を孕む

宇宙を抱く 主キリストよ

天を裂き 闇の世に

霊光投げて めさましめよ！

B17

すべての人に

(二九八・三・三一作詞)

——我は罪びとの首なり——

(テモテ前書一・一五)

「あした浜辺を」曲

1

すべての人に 救ひあれ！

然かあらざれば 如何にせん

罪びとらの 首こそは

この身なれば パウロの如。

2

主のみ声あり 「我れこそは

十字架に在りて 汝がために
罪びとらの 首となり
あがなひたり 汝がすべてを

3 主は知り給ふ いと深く

われは黙して 主にゆだね

見よ、キリスト 来たり給ひ

われを抱く、エン・クリスト！

4 主に在りて 我れ十字架と

み霊の愛に 生くるなり

主のステイグマ わが身にあり

噫、主の愛 極み無けれ

5 主のみ光を 身に浴びて

主のみ力に 満たされぬ

主と一如に 無者とされて
主の身証を 生きて往かん

〔注〕この歌は合唱すべきものに非ず。

B18 八十路の峠

(一九八四・一・一〇作詞)

一 高寮歌「曉寄する新潮の」

1 明治は三十七の年 日露開戦その前夜

如月の星閃めけば 彌生が岡に産声を

あげて生れにし吾れなるか

2 幼き時に父は去り 母は五人の遺児抱へ

お茶の水なる女子校に 教育の道励みつ

つ

われらをよくぞ育てたる

3

我は弱虫泣虫の 寢「づくなき」児なり
けり

さはれ真善美に対し 感激性の浅からぬ
夢ゆたかなる少年よ

4

同心町の二階屋に 舎兄政美と暮しける
附中時代の生きざまが 髣髴として目交
に

現前するかな感無量！

5

長兄北京に仆れたり 母は船路に失明す
次兄の忍苦いかばかり わが青春の暴風
雨なり

天地晦冥どん底よ！

6

水戸高校の時にして 大手町なる内村の
聖書の講義胸をうち 光を浴びて信ぜし
は

二十歳に満たぬ時なりし

7

病の波に襲はれて 惨澹たりし四年間
聖書とルッター、ヒルティーを 灯火と
して辿りける

独り旅路を忘れめや

8

東大独文学窓は 古典の粹たるゲーテ、
シラー
ダンテとミルトン、欧米の 詩歌の世界
に憧憬れて

日に夜を継いで読み耽る

9

藤井の門下五星霜 主の日遵りて貫きぬ
噫、千九百三十年 内村、藤井仆れたり
み空に點る巨星二つ

10

阿蘇の深山の瀧見莊 聖靈降臨、新生
よ！

使徒らの次元慕はしや 十字架・聖靈の
現実を

生涯を賭けて生き貫かん

11

大道無門キリストの 無者たる実存賜り
て

左顧右眴なくわれは往く 万人を抱くキ
リストの

無量の愛ぞ力なる

12

八十路の峠を迎へたり 無尽の涙を靈泉
とし

漲る血潮を靈火とし 吹き捲く聖靈を
台風とし

一大詩篇は成りゆかん！

B19

真白き峰の

(二九八四・五・一七—二八作詞)

——キリスト受難劇への旅——

S 714 「北の極なる」

1

真白き峰のアラスカを越え

北の極なる星を仰ぎ

西へ西へと我らは飛べり

その旅心 妙へなるかな

2 世にも名だたる ロマン街道

ヴェルツブルクに そびゆる城

クレクリンゲン 噫マリア像よ!

往けども尽きぬ 緑の原

3 ローテンブルク 中世の市街^{まち}

昔を今の そのゆかしさ

大都ミュンヘン、ピナコテークよ!

ノイウルムには 百歳^{しじき}嫗^{おば}

4 ヴィース教会 ロココ芸術^{たくみ}の

最美の型と 瞠目^{めくら}せり

ロマンの権化 白鳥の城

夢か現か 外観^{そと}も城内^{うち}も

5 上部^{かみ}のアンメル 救済^{すくい}を祈り

村人こぞり 受難劇^{じゆなんぐわく}を

創始^{はじ}めて年は 三百五十

観劇^{くわんぐわく}の客 全世界^{せかい}ゆ

6 演ずる人は みな素人

そのコーラスの 神さびたる

ひびきは山に 飮^{のみ}する^たか

観劇^{くわんぐわく}の客 しづもりたり

7 十字架上の キリストの影

棄身の演技 胸に迫る

復活の主と マグダレナの

出会ひの場面 あなうれしや

8 インスブルクよ ザルツブルクよ

歴史を語る 教会堂

今の世の人 祈り心を

忘るる勿れ 生ける神に

9

列車は走り スイスに向ふ

窓べの景観^{なづみ} 忘れがたし

湖畔の市は^{まち} ルツェルネなり

アルプスの国 ああ美はし

10

旅の果てなる ユングフラウよ

霊視せよとて 雲に隠る

グリーンデルより アイガー仰ぐ

「愛^{アイ}がある会」再た会ふまで。

B20 イスラエルの旅

(一九八五・二・一七作詞)

S 512 「わがたましひのしたひまつる」

1

イエス・キリストの み跡したひ

はるかなるイスラエルへ

われら旅せん 旅心に

世界平和祈りつつ

ゲッセマネの森、ゴルゴタにて

あがなひの愛を浴び

園の御墓^{みほ}より よみがへりし

キリストに今日も会はなむ

2

ああベツレヘムよ 救主の

生れましし星^{ほし}の夜よ

聖子^{みす}のみ光 今日も明日も

旅路を照らし給へよ

クムラン、エリコ、サマリヤを^へ経

ガリラヤ湖に出づれば

今もキリストの み声聞こえん

山上の大告白！

3

ガリラヤのカナ かの婚宴

招かれしマリヤ、イエス

饗宴^{うたげ}のさなか 葡萄酒^{ぶどう}尽き

すべもなきにキリストは

瓶^{かめ}に満ちたる 水を視^みつめ

祈^{いの}りにて酒^{さけ}に化す

キリストの愛は み力あり

主の愛に今日も生きなむ

B21 雪の夜の

(二九八五・六・一二作)

ノンゲル走破千余料

歌調「あした浜辺を」

1 雪の衣の 山々は

おちこちにあり 目^{*}のあたり

みどり萌ゆる 松や杉よ

去来するか バスは走る

2 神は牧人 道のべの

野良の緑を 羔^かの

喰^くむにまかせて 育てたもう

すがたこそは かの詩篇よ

3

道は羊腸 九十九折^{つづら}り

峠^{たて}をのぼり くだりゆく

バスの眺め 海か湖か

ああフヨルドの 奇しき国よ

4 ノルゲの国の 西岸の

フヨルドのごしき岸壁を

瀧は流れ 樫は岩に

根をばおろし 雄々しく生ゆ

5 船はしづけく 入江なす

フヨルドを往く その深さ

そこひ知れぬ 神秘の海

船に添ひて 鷗舞うよ

6 オスローを出で 北の方

リレハムマーと ロームを経て

西へ走り ガイランガー

そのフヨルド 奇景なりし

7 転じて南方 ゾグンダール

大フヨルドを 渡りゆき

ヴォス、ベルゲン ああ長程！

千余料を 走り貫けり

〔註〕 原作一―五節はノルゲを走るバスの中にて

八
獨
和
對
照

„ Deutsche Frauen, deutsche Treue,
Deutscher Wein und deutscher Sang
Sollen in der Welt behalten
Ihren alten, schönen Klang,
Uns zu edler Tat begeistern
Unser ganzes Leben lang.
Deutsche Frauen, deutsche Treue,
Deutscher Wein und deutscher Sang!“

「ドイツの女性、ドイツの信実、
ドイツの葡萄酒とドイツの歌曲は
昔ながらの美しいひびきを

世界の中に保持してくれよ。

われらの全生涯に靈感を与え

崇高な行為をなさしめよ。

噫ドイツの女性、ドイツの信実、

ドイツの葡萄酒とドイツの歌曲よ！」

獨
和
対
照

季刊『エン・クリスト』誌巻頭の詩と短文集
自 一九八〇年 夏季号

〈EN CHRISTO〉

„Er hat den, der von keiner Sünde wußte, für uns zur Sünde gemacht, auf daß wir würden in ihm die Gerechtigkeit, die vor Gott gilt. (2. Kor. 5 : 21.) “ „So ist nun nichts Verdammliches an denen, die in Christo Jesu sind. Denn das Gesetz des Geistes, der da lebendig macht in Christo Jesu, hat mich freigemacht von dem Gesetz der Sünde und des Todes. (Röm. 8 : 1, 2.) “ „Ich bin mit Christo gekreuzigt, Ich lebe aber : doch nun nicht ich, sonderner lebt in mir (Gal. 2 : 20).“

In den Briefen Pauli gibt es viele Beispiele solcher Ausdrücke : „ich in Christo, im Herrn, in ihm, Christus in mir,“ die sich das Ineinander=Verhältnis zwischen Christo und uns jedem oder die geistige Wirklichkeit der Einheit mit Christo äußern.

Wenn der heilige Geist beim Gebet unter dem versöhnenden Kreuz in uns hereinkommt, beginnen wir in der geistigen Wirklichkeit des Glaubens 〈*εν χριστω*〉 zu leben.

Das ist das Wesen apostolischen Glaubens. Als Zeugen dessen wollen wir leben und das Evangelium verkündigen. Ehre sei dem Namen des Herrn ! (Sommer 1980) (T. KOIKE)

エン・クリスト〔獨和対照〕 天韻

「神は罪を知り給はざりし者を我らの罪となし給へり。これ我らが彼に在りて、神の義となるを得んためなり」(コリ後五・七六)。「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解放したればなり」(ロマ八・一、二)。「我れキリストと共に十字架せられたり、最早われ生くるに非ず、キリストわが内に生くるなり」(ガラ二・二〇)。

パウロの手紙には、「我れキリストに在りて」「主に在りて」「彼に在りて」「キリストわが内に」等の、キリストと我々各人との内在関係やキリストとの一如の霊的現実を表はす用例が多々ある。十字架の贖罪に與かる祈りで聖霊が降臨してくると、〈エン・クリスト〉「キリストの中に」という信仰の霊的現実で生き始める。

これが使徒的信仰の本質である。我々はこの信仰の証者として生き且つ福音を伝へよう。栄光、主の聖名にあらんことを！

(季刊「エン・クリスト」誌 一九八〇年 夏季号 創刊号巻頭)

Göttliches Drama ist die Bibel.

(Herbst 1980)

Der Kanon des Christentums ist die Bibel, die man gewöhnlich als Lehre von Gott und Christo meint. Solange man aber unter der Bibel nur solches Buch religiöser und moralischer Belehrungen versteht, kann man nicht das Wesen der Bibel begreifen.

Der eigentliche Charakter der Bibel ist dramatisch, ob sie wohl literarisch kein dramatisches Werk ist. Denn die Bibel ist das Buch der Offenbarung, daß Gott auf den Grund der dramatischen Geschichte des Volkes Israel mit dem Brennpunkt Christo die Menschheit retten will. Das ist das Drama, daß Gott der absoluten Dimension in die Welt der relativen Dimensionen eingreift, und daß das göttliche Licht ins Dunkel hereinbricht, um die dunkle Welt in die des Lichts zu verwandeln. Es ist immer eschatologisch gegenwärtig, weil es die Offenbarung Gottes in jener dramatischen Geschichte gewesen.

Man lese also die Bibel auf solche Weise, wie man sich in das Drama hineinwirft, Gottes Worte mit Augen hört und Gottes Werke mit Leib sieht ! Dann wird man erst von Kraft und Licht, von Leben und Liebe aus Gott und Christo begeistert ergriffen.

Wahrlich ist die Bibel das uns belebende Drama Gottes.

聖書は神劇である [獨和対照]

キリスト教の經典は聖書で、通常、人はこれを神キリストに就ての教への書と思っている。しかし聖書を單にそのような宗教的・道德的な教への書と見なす限り、聖書の本質を把握することはできない。

聖書は文学上の劇的作品ではないが、その本来の性格は劇的なものである。聖書はキリストを焦点としたイスラエル民族の劇的な歴史を土台として神が人類を救済せんとする啓示の書であるからである。絶対次元の神が相対次元の世につかみかかり、神の光が闇に臨んでこれを光の世界に化せんとする劇である。これはかの劇的な歴史における神の啓示であつたのでつねに終末的現在的である。

だから読者は劇中に自らを投じて、神の言を眼で聞き、神の業を体で見て、身読せよ！ そのとき始めて神・キリストの靈的な力と光、生命と愛に撃たれる。

聖書はまことに人を活かす神劇である。

(一九八〇年 秋、第二号)

ANATHEMA=GEIST

(Winter, Febr. 1981)

Paulus, der einst eine Hauptperson der Pharisäer gewesen, wollte die Juden aus dem Pharisäismus ins Evangelium retten, nachdem er von dem heiligen Geist ein ganz anderer Mensch geworden war.

So seufzte und rief er aus :,, Ich habe gewünscht, verbannt zu sein (=Anathema, *αναθεμα*) von Christo für meine Brüder. “(Römer 9 : 3). Noch jetzt wird er doch von den Juden als Anathema verachtet. Ja, eben Christus bleibt noch jetzt Anathema auf dem Kreuz ! (Gal. 3 : 13) Wahre Christen, die wirklich von oben von dem heiligen Geist getauft (Röm. 8 : 9), sind auch von der wenig begeisterten Christenheit im Allgemeinen etwa als Anathema behandelt.

Man tadle, wie man wolle.

Man lache, wie man möge.

Gott kennt ja mein Innerstes.

Keinen Wunsch, erkannt zu werden.

So dichtete Zohzan Sakuma, der größte prophetische Geist in der letzten Zeit des Tokugawa=Shohgunats. Ja, „Gott kennt mein Innerstes.“ Zu Gott bete ich auch im Anathema=Geist. (Luk. 6 : 28—36).

アナテマ魂〔獨和対照〕 天震

パリサイ派の一首魁であつたパウロは、彼が聖靈によつて全く別人となつてから、ユダヤ人をパリサイ根性から福音へ救ひたいと思つた。

それで彼は呻いて叫んだ、「わが同胞のためならんには、キリストに呪はれたる者（アナテマ）となるとも、我自ら願ふところなり」と（ロマ九・三）。しかし彼は今もなほユダヤ人からアナテマあつかいにされている。否、実にキリストこそは今もなほ十字架のアナテマである（ガラテヤ三・一二）。

聖靈のバプテスマをキリストから受けたまことのキリスト者が（ロマ八・九）、聖靈の体験なきキリスト教界一般において謂はばアナテマとなされている。

謗者任^{ルハス}ニ汝^{ノルニ}謗^{ヲハセン}。
嗤者任^{ヲハセン}ニ汝^{ノルニ}嗤^{ヲハセン}。

天公本^{ヨリル}知^レ我^ヲ。不^{モトメ}見^ニ他人^{ノルヲ}知^レ。

幕末の大先覚佐久間象山はこのような詩句を吐いている。まことに「天公本知我」。
アナテマ魂で祈らんのみ（ルカ六・二八―三六）。
（一九八一年 二月冬、第三号）

QUO VADIS, NIPPON ?

Nach dem zweiten Weltkrieg ist in Nippon die sog. „DEMOKRATIE“ weit verbreitet. Kaum behalten unterdessen die Japaner sowohl Vater- und Kindschaft, als auch Lehrer- und Schülerschaft. Es sind zu viel Univeresitäten gewachsen, wie Bambus=sprößlinge nach dem Regen. Wegen der häufigen und heftigen Konkurrenzen der verschiedenen Eintrittsexamen von Kindheit bis Jugendzeit werden die Jungen in Geist und Körper so innerlich wie äußerlich verletzt. Solche allgemeine Lage der Schulwesen Japans wäre der Grund der geistigen Abweichungen der jungen Leute.

Im Wagen der Stadt=Bahn gibt es „Silver Seat“ für die Alten und die Leute der Körperschwäche. Doch ohne Rücksicht darauf, wörtlich ohne Vor=sicht sitzen gewöhnlich die Jungen. Das beweist symbolisch die Haltung des sog. „Demokratie“ in Japan. Das müßte man sagen „Falsche Freiheit“ des Eigennutzes. Es gibt viel Überflüssiges, Unorganisches, Unordnungen und Widersprüche im Leben der Japaner.

Quo vadis, Nippon ?

Japaner, bekehren wir uns zur Urquelle des Geistes !

Japaner, stürzen wir uns nieder vor Gott !

Gemütvolle Brüder, leben wir mit Nächstenliebe

Miteinander und auch mit jedem Volk !

Demokratie ohne Liebe ist Unsinn.

Werfen wir uns in Gott hinein,

Um Liebeskraft zu empfangen !

日本よ、何処へ往く？ 「獨和対照」 天韻

第二次大戦後日本には所謂「民主主義」が拡まった。その間日本人は孝道も師道も殆どこれを保持しなくなった。

雨後の筍の如くあまりにも多くの大学が出来た。幼少年期から青年期に互つての度重なる烈しいさまざまな入学試験競争のために、若者たちは心身共に内的にまた外的に害はれている。日本の学校諸制度のこのような一般状況が若者たちの精神的なさまたの逸脱の原因をなしていると思はれる。

国電の車内には「シルバースーツ」「銀席」が老人や身体障害者のため備へられてある。ところが若者たちが顧慮することなく、文字通り「前方不注意」で腰かけているのが一般である。これが日本の「民主主義」のすがたを象徴的に証しているものである。これはしかし利己的な「まちがった自由」といふべきもので、謂はば身勝手主義である。日本人の生活には、多くの無駄ごとや非有機体的なもの、無秩序や矛盾の諸相がある。

日本よ何処へ往く？

日本人よ、いざ、たましひの源泉に立ち帰ろう！

日本人よ、いざ、神の前に平伏そう！

情緒ゆたかな同胞よ、我らは隣人愛に生きよう。

おたがいに、そしてどの民族とも！

愛なき民主主義は無意味である。

神に投げ身して愛の力を受けよう！

（一九八一年三月臨時特輯号、第四号）

NACH ISRAEL

1.

Nach Israel, dem Heiligen Land
Machen wir uns, unser Temasa-Travel's Band.
Jetzt im Frühling auf die Luftreise
Dank der Vorsehung glücklicherweise.

2.

Nach dem bekannten Land der Verheißung zu fahren,
Dieser Wunsch ist im Begriff zu erfahren.
Nach Christi Spuren sehnen wir uns herzlich,
Die ganze Reise sei in Seinem Arm geistig.

3.

Wandern wir auf Abrahams Spuren,
Isaaks und Jakobs Schatten werden sich rühren.
Jeremias und Jesajas prophetische Worte
Werden neu ertönen in manchem Orte.

イスラエルへ〔獨和対照〕

一、春を迎へ イスラエルへ

テマサ・トラベルの 同行の群

今や出で往く 聖地への旅

この空路 み旨 かしこみて往く

三、アブラハムの 旅路のあと

イサクとヤコブの 面影しのび

エレミヤ、イザヤ 預言者の声

そのひびきこそは 新たなれや

二、音に聞きし 約束の地

今こそ希望^{のぞみ}は 満たさるるなれ

わがキリストの み跡慕はし

この旅路 すべて み腕のうち

〔註〕 この「イスラエルへ」は召団讃歌B9である。

（一九八一年五月、春、第五号）

EIN WEIB ZU BETHANIEN

1. Ein Weib zu Bethanien
Zerbrach ihr Alabastron-Gefäß,
Goß auf des Herrn Haupt
Köstliches Nardenöl herzlich.
2. Sahen das seine Jünger,
Murrten sie als Vergeudung :
„Das Öl hätte mögen verkauft
Und den Armen werden gegeben.“
3. Sprach er : „Sie hat mit Tränen
Meinen Leib gesalbt
Zu meinem Begräbnis,
Da ich verlasse bald die Welt.
4. Wahrlich sage ich euch, wo
Das Evangelium auch gepredigt,
Da sagt man in aller Welt
Diese Tat zu ihrem Gedächtnis.“

ベタニヤなる或る女〔獨和対照〕 天韻

一、ベタニヤなる ある女

石膏壺^{アラバストロン}を

うち割りて

主の首^{こうべ}に

心こめて

ナルドの香油を

注ぎけり

二、主の弟子どもは これを見て

勿体なやと 憤る

「それを売りて 貧者のため

施しごとを なすべきに」

三、主は言ひ給ふ 「この女

葬りのため わがために

涙ながら 注ぎたるぞ

我れほどなく 別れゆく

四、まことに告げん 全世界

いづこなりとも 福音の

伝へらるる ところにては

憶えらるべし この女！」

(一九八一年八月、夏季号、第六号)

〔註〕 この「ベタニヤなる或る女」は召団讃歌A 28である。

MEIN HERR DES GEISTES

1. Nach der Zeit der Apostel sehne ich mich brünstig.
In der Bibel lesend bete ich innerlich.

(Wiederholung)

|| Mein Herr des Geistes meinen Leib umarmt,
|| Gibt mir die Kraft und Macht, mein Kreuz zu tragen.

2. Der Bibel Wirklichkeit ist die lebendige Welt,
Wo hoch in der Dimension der Geist Gottes Funkelt.
3. Kämpfe ich den Tag des Herrn treu haltend geistig,
So legt ein ja Fürbitte seufzend der Geist für mich.
4. Gottes Willen befolgend leiste ich meine Pflicht.
Ich bin, lebe und webe <EN XPIΣΤΩ> im Licht.
5. In den Dämmer in der Welt führt mich die Reise,
Die Töne der Vesper verklingen leise.
6. Über den letzten Bergpaß eile ich doch hinweg,
Unter der Sterne Führung wandre ich den steilen Weg.
7. Tagt der ewigen Welt Morgen in dem Schimmer,
Kommet bitte, Engel, herab, traget mich gen Himmel!

(T. KOIKE)

★和詩も独逸語の詩も歌調：359「夕陽はかくれて」で唱へ得る。

使徒らの昔を

四、聖旨のまにまに わが業をなし

主に在る生きざま 貫き往かん

一、使徒らの昔を 慕ひて我は

聖書に読み入り 祈りてあれば

《おりかへし》

み霊のわが主は わが身を抱き

十字架に耐へ得る 力を賜ふ

六、終末の峠を 踏み越え進み

星のしるべにて 嶮路を往かん

二、聖書の現実^{うつつ}は 次元の高き

み霊のたばしる 生命の世界

七、常世^{とこよ}の晨の 明くるときには

天使^{みっかい}天降りて 昇らせ給へ！

三、主の日を導^まりて 戦ひあれば

聖霊も呻きて 執り成し給ふ

(一九八二年 二月 第八号)

〔註〕 召田讃歌B2である。

IN CHRISTO, DEM AUFERSTANDENEN.

In Christo am Kreuz schon

Ist das alte Ich vernichtet.

In Christo, dem Auferstandenen,

Lebt das neue Ich innig schön.

Die Taufe vom Heiligen Geist macht

Tod und Leben,

Kreuz und Auferweckung

Zum Erleben wie Tag und Nacht.

Das Ich zerbrochen, lebt das Du doch.

Das Herz zerrissen, brennt der Geist hoch.

Der Geist macht uns frei von des Gesetzes Joch.

Christus lebt ja im Himmelreich noch.

Er beherrscht sonst und jetzt, fern und nah,

Durch die Geschichte die geistige Welt.

Hinter chaotischen, widersprechenden Lagen da

Liegt geistiger Wirklichkeiten Zelt.

復活のキリストに在って〔獨和対照〕

十字架のキリストに在ってすでに

旧き「我」は滅ぼされている。

復活のキリストに在って

新しき「我」は内的に美しく生きてい
る。

聖霊のバプテスマこそ

死と生を

十字架と復活を

夜と昼のように体験させる。

「我」が砕かれて、「汝」こそ生き給う。

心が裂かれて、み霊が崇高く燃えてい
る。

み霊は律法おきての枷なせから我らを自由にした。

キリストはげに今も天界に生き給う。

彼は、昔も今も、遠くまた近く

歴史を貫き靈界を統べ給う。

混沌と矛盾の状況の奥には

靈的根源現実の幕屋が張られている。

（一九八二年五月 春 第九号）

DIE BRENNPUNKTE DER THEOLOGIE DES NICHTS

14. Juli 1982 (T. KOIKE)

„Selig sind, die da geistlich arm sind ;

denn das Himmelreich ist ihr.“ (Mt. 5 : 3)

Das deutet mir des Herrn Geist wie folgendes :

„Selig bist du, der du durch mein Kreuz in geistige Wirklichkeit der Selbstlosigkeit hereingeführt worden. Mein Geist ist in dir.“

Auf solche Weise ist meinem Glauben Kreuz und Geist des Herrn die untrennbaren zwei Brennpunkte der Ellipse geworden.

So bekenne ich : ich bin geistig ganz arm, d.h. Nichts im Kreuz des Herrn, dann unermeßlich reich im Geist des Herrn.

Das ist meine Urwirklichkeit durch die absolute Gnade Christi. In dieser absoluten Dimension ist Nichts Alles, Tod Leben, Verloren Gewonnen. Ich bin Nichts Christi, so brennt in mir des Geistes Liebe.

Jesus äußerte : „Ich bin gekommen, daß ich ein Feuer anzünde auf Erden : was wollte ich lieber, als es brennete schon!“ (LK. 12 : 49)

無の神学の焦点〔独和対照〕 天韻無鐘

一九八二年七月十四日

「恵福なるかな、たましひの貧しき者、

天国はその人のものなり」(マタイ

五・三)

主の御霊はこのことを私に次のように謂い給う、

「恵まれたるかな汝、汝はわが十字架によりて無私の霊的現実に導き入れられたり。わが霊は汝の中に在り。」

かくて主の十字架と聖霊は、わが信に於て、楕円の不可離の二焦点となった。

それで私は告白する、私は主の十字架に在って霊的に全く貧しくある。というこ

とは、無者である。そして主の御霊に在って無量にゆたかである。

これがキリストの絶対恩寵による私の根源現実である。この絶対次元に於ては、無即全、死即生、喪失即獲得である。

私はキリストの無者である。それゆえ御霊の愛が私の中で燃えている。イエスは宣うた、「我は地に火を投ぜんとて来れり、この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」(ルカ一二・四九)

(一九八二年八月夏、第十号)

NIPPON von Christo berufene Gruppen (Shodan)

(T. KOIKE) 28. Aug. 1982

Gottes Kinder von Sapporo, Tochigi und Saitama,
Dergleichen Knechte von Tokyo und Susono,
Gesellen von Kyoto und Ohsaka,
Geschwister von Nara und Okayama!
Jawohl, in Kagoshima, dem Süd = Ende!
Oh! Schwankende Gestalten für unsre Gruppen
In Shinshuh und in Kagawa!
Drehen wir uns um die Brennpunkte
Kreuz und Geist Christi auf der Ellipse Bahn!
Unsere Gaben wären wie bunte Blumen in Berg und Feld.
Oder wie jeder Ton in dem Pastorale.
Existenz sei eins: Leben in Christo.
Zweck sei eins: Beweisende Ausbreitung der frohen Kunde.
Ach, Nippon von Christo berufene Gruppen!
Kleine Herden unter der Hütte Christi!
Jeder der Gruppe wandre sein Kreuz tragend,
Gestalten wir mit ein Ring in der Geschichte Gottes!
Stricken wir zusammen Blumenkranz und Strahlenring!
Die Ehre sei dem Namen des Herrn!

日本キリスト召団〔独和対照〕 天鐘

一九八二年八月二七日午前十時

札幌、栃木、埼玉の子ら、

東京、裾野の僕たち、

京都、大阪のともがら、

奈良、岡山の兄弟姉妹よ！

然り、南の涯の鹿兒島に、

やよ、信州と香川に

揺蕩うわれらが群の僚友よ！

楕円の二焦点たる十字架と聖霊を

めぐりてわれらは馳場を走らん！

賜は色とりどりの山野の花か、

「田園交響曲」の幾許の音調か。

実存は一つ、エン・クリストの生命。

目的は一つ、福音の身証伝道。

噫、日本キリスト召団！

キリストの幕屋の小さき群よ！

群の誰しもおのが十字架を負いて、

相共に神の歴史の一環と成らん！

相共に花輪、光輪を編み成さん！

栄光は聖名に在れかし！

（一九八二年十月 秋 第二一号）

OFFENE WEITE — NICHTS VON HEILIG

(TATSUO KOIKE)

„Wu-Di von Liang fragte den Großmeister Bodhidharma :
Welches ist der höchste Sinn der Heiligen Wahrheit? Bodhi-
dharma sagte: offene Weite—nichts von heilig. Der Kaiser
fragte weiter: Wer ist das Uns gegenüber? Bodhidharma
erwiderte: Ich weiß es nicht.“

(verdeutsch von Dr. Wilhelm Gundert)

Offene Weite—nichts von heilig: Offene Weite bedeutet
unendliches Weit-und-Breit. Wahre Religion macht keinen
relativen Unterschied, also deutet nichts von profan. Reli-
giöses Urwesen besteht in was Selbstloses, Überbegriffliches,
Unendliches, Allumfassendes.

Jesus sagte auch: „Was heißest du mich gut? Niemand ist
gut als allein Gott?“ Das Ur=Bewußtsein Jesu beruhte auch
auf „Nichts von gut. In dieses Nichts von Jesu kam ganz
Alles von Gott herein. So konnte Christus bekennen: „Wer
mich sieht, der sieht den Vater.“ und auch: „Ich und der Vater
sind eins.“ Folglich ist Jesus als Fleisch Nichts. Christus
der Gesalbte als Geist ist Alles, Unendliches, Unmeßliches.
So nenne ich Jesus Christus Nichts=Alles, Nichts=Unendliches.
Amen!

廓然無聖〔独和対照〕 天韻無鐘

「梁の武帝、達磨大師に問ふ、如何なる
か聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝
曰く、朕に對する者は誰なるぞ。磨云く、
不識。」

（上掲のこの部分はウィルヘルム・グン
デルト博士の独訳）

廓然無聖、廓然とは廣大無辺なこと。
本當の宗教は相対的な區別をしない。で
あるから無聖はまた無俗をも示唆する。
宗教的根源存在は、無私、超觀念、無限、
萬象抱攝といったところにその本質があ
る。

イエスも言った、「おまえは何で私を
善いなどと言うか。神ひとりの他に善い
ものはない」と。イエスの根源意識は
「無」善に根をおろしていた。イエスの
この「無」に神の「全」がそのまま入っ
て来た。だからキリストは「我を見し者
は父を見しなり」とか、「我と父とは一
如なり」と道うことができた。

それゆえ、肉なるイエスは無者であり、
靈なるキリストは無限無量者である。そ
れで私はイエス・キリストを無即無限無
量者と呼びまつる。 合掌。

（一九八二年十二月臨時特輯号 第十二号）

The White Hole (Die Weisse Höhle)

(T. KOIKE)

Es gibt im Weltall solche <Black Hole> genannten Sterne, welche auch mit astronomischem Fernrohr nicht zu sehen sind, indem sie wegen ihrer ungeheuer hohen Dichtigkeit sogar das Licht einsaugen.

Man sagt, es gebe ein solches <Black Hole> auch im Sternbild Nordkreuz. Das Nordkreuz in der geistigen Welt ist Christus, so möchte ich ihn The White Hole (Die Weiße Höhle) nennen. The White Hole hat auch Gestalt ohne Gestalt. Er läßt weiße Strahlen des Heiligen Geistes mystisch schießen. In der Gestalt des Kreuzes steht er vor dem Tor des Geistes jedes Menschen jedes Volkes. Sobald dieser seinen Namen aus ganzem Wesen ausgerufen hat, da kommt er herein. Kaum hat Christus seine Hand auf ihn gelegt, als sein Leib geistig zittert, mit der Liebe des heiligen Geistes warm erfüllt wird.

Dann fühlt er sich, ein neues Leben komme herein, geistiges Licht zünde, er sei selbst ein <white hole> geworden, indem er Nichts in Christo geworden. Aus diesem kleinen <white hole> wird aber sein eigenartiges Licht schön strahlen.

ホワイト・ホール [独和対照] 天韻無鐘

宇宙には望遠鏡でも見えないブラック・ホールと呼ばれている星がある。彼らは超高度の密度のために光をも吸収してしまうからである。

北十字星座にもそういうブラック・ホールがある。霊界の北十字星はキリストである。私は彼をホワイト・ホールと呼びたい。このホワイト・ホールも無相の相である。彼は聖霊の白光を神秘的に注いでいる。それであるからキリストは聖霊として遍在し給う。十字の相で彼はどの民族のどの人の魂の扉の前にも立つ

ておられる。全存在を以て彼を呼べば直ちに entering 来られる。キリストがその人に按手し給うや否やからだは靈的にしびれ聖霊の愛で全身が熱く充たされる。

するとその人は新生命が入って来たことを感じ、霊火が点じ、彼自身がホワイト・ホールになったことを覚える。それはキリストの中で無者とされたからである。この小さなホワイト・ホールからその人特有の光が美しくかがやく。

(一九八三年二月 冬 第十三号)

SABBATTAG ZU BEFOLGEN

Nach dem Mythos des 1. Kapitels der Genesis ruhte Gott am siebenten Tag nach den sechstägig schöpferischen getanen Arbeiten. Die Juden haben solches Zeit=Gefühl „Abend und Morgen“, daß man in Israel die Zeitdauer vom Abend des Freitags bis zum Abend des Sonnabends als den Sabbattag (= Ruhetag) bestimmt. Sie befolgen streng das Gebot des Sabbattags. Das vierte Gebot der „Zehn Gebote Mosis.“ lautet so : „Gedenke des Sabbattags, daß du ihn heiligest.“

Beim Christentum macht man den auferstandenen Tag Christi, nämlich den dritten des gekreuzigten Freitags zum Sabbattag.

Also gedenken wir des Sonntags (des Sabbattags) als des Tages, geistige Auferstehungskraft zu empfangen, indem wir geistigen Vortrag aus der Bibel und geistiges Gebet halten. So wandern wir mit auf jedem Lebensweg immer fort.

Am Sonntag ruhen wir von allem Beruf nach dem geistigen Gesetz Gottes, indem wir uns in die Wirklichkeit : „En Christo“, in die Kraft des Herrn hineinwerfen, alle relativen Fragen durchbrechend. Es ist unser Lebensgrundsatz, auf solche Weise den Sabbattag zu befolgen. Sonntag ist der Brunnen der Kraft und Freude unseres Lebens. (T. KOIKE)

安息日を遵る〔独和対照〕 天晨

創世記第一章の神話によれば、神は六日間創造の業をなして七日目に安息したとある。ユダヤ人は「夕あり朝あり」という感覚であるので、イスラエルでは金曜の日没から土曜の日没を安息日として、この律法を厳守している。即ち「モーセの十誡」の第四則は次の如くである。

「安息日を憶えてこれを聖とせよ」（出エジプト二〇・八）だがキリスト教では十字架の金曜日の三日目なるキリストの復活の日を安息日としている。

であるから我々は安息日（日曜）を霊

的な聖書講筵と霊的な祈りを通してキリストの霊的な復活の力にあづかる日と心得ている。かくて我々は人生の旅路を共に前進してやまない。

日曜日は神の靈法に則してあらゆる職業を休んで、エン・クリストの現実に身を投じてキリストのみ力にあづかり、あらゆる相対的問題を突破して進む。

このように安息日を遵ることが我らの生活の原則である。日曜は我らの生活の力と歓喜の源泉である。

（一九八三年五月 春 第十四号）

LUTHER UND GOETHE (T. KOIKE)

Ich kann nicht umhin, Luther und Goethe zwei übermenschlich menschliche Geister zu nennen, die Deutschland in die Welt erscheinen ließ. Diesen beiden bezeuge ich unendliche Ehrebiegung.

Die Glockentöne der evangelischen Freiheit, die Luther anschlag, werden nie verklingen. Deren Tonqualität ist Gerechtigkeit.

Und was Goethe mit seinen inhaltreichen Dichtungen ausdrückte, ist die Welt der kosmischen, harmonischen Einheit. Deren Tonqualität ist Liebe.

Luthers Charakter wäre etwa vertikal, der Goethes dagegen horizontal. Wenn Luther dreieckig ist, so ist Goethe kreisförmig.

Diesen Mai (1983) machte ich eine Reise nach Ostdeutschland, wobei ich Luther in der Veste Wartburg im Zimmer, wo er sein „Neues Testament Deutsch“ geschrieben, geistig sah, und Goethe zu Weimar im Goethe-Haus am Schlafzimmer. Es waren so eindrucksvolle Augenblicke, daß ich mir Meditationszeit ohne andere hätte nehmen mögen. Luther bekennt sich aus ganzem Geist zu seiner deutschen Bibel, Goethe aus dem Innersten zu seinem lebenslänglichem Drama „Faust.“

In Christo bin ich ganz frei mit Luther, universal mit Goethe.

ルターとゲーテ〔独和対照〕 天韻

ルターとゲーテは独乙が生んだ超人的にして人間的な偉人と私は言はざるを得ない。この両者に限らない敬意を表する。

ルターがうち鳴らした福音的自由の鐘の音は決して鳴りやまないであろう。その音色は義である。ゲーテがその内容豊かな詩を以て表現したものは、宇宙的調和、統一の世界。その音質は愛である。

ルターの性格は謂はば垂直的、ゲーテのそれは水平的である。ルターが三角形ならば、ゲーテは円形である。

この五月に（一九八三年）、私は東ド

イツへの旅をした。その際私はヴァルトブルク城でルターが彼の『ドイツ語新約聖書』を書いた室で、彼に靈的な出遭いをした。またゲーテにはヴァイマルでゲーテ・ハウスの彼の寝室で。何れも極めて印象深い瞬間であった。もし人が居なかったら私は瞑想の時を有^もちたかった。ルターは彼のドイツ語の聖書に全霊を以て告白している。ゲーテは彼の全生涯を以て書いた『ファウスト』劇で全存在の奥から告白している。キリストに在^あって私はルターと共に自由無碍であり、ゲーテと共に宇宙的である。

（一九八三年八月 夏 第十五号）

GABE UND BERUF (T. KOIKE)

Ein Schüler hat Stärke und Schwäche beim Erlernen der Lehrfächer. Wo man beliebt, da wird man geschickt, so sagt man. Ein Schüler muß sich also mit Leib und Seele seinem liebsten Lehrfach widmen und dabei mit diesem in enger Beziehung stehende Bücher mit Lust und Liebe lesen, Dann muß er auch mit dem Lehrfach wieder in enger Verbindung stehende andere Lehrfächer fleißig lernen. Ich glaube, jeder Schüler solle solchen Grundsatz zum Erlernen haben.

Eltern und Lehrer müssen solches Grundprinzip zum Erlernen erkennen und Söhne und Töchter dazu fördern. Also muß es so viel Fachschulen und Hochschulen geben wie jeder Student seinen Lieblingsfach immer weiter studieren und forschen kann, damit er sich seiner Lebensaufgabe hingeben und einen treffenden Beruf bekommen dürfe.

Wenn dieses Prinzip zum Erlernen im allgemeinen herrscht, so wird falsche Erscheinung wie <Ochikobore>(d. h. Abfallen od. abfällige Schüler) abfallen. Es ist zu tadeln, dass solches Wort, wie man die Persönlichkeit eines Schülers beleidigt, in der japanischen Erziehungswelt ohne Schande gebraucht wird.

Es ist sehr wünschenswert, daß Eltern und Lehrer tiefe religiöse Gesinnung und warmes Herz für Ausbildung ihrer Kinder haben.

天賦天職 「独和対照」 天鐘

(一九八三年十月 秋 第十六号)

生徒には学科の習得に得手・不得手がある。「好きこそものの上手なれ」と謂はれている。それ故自分の最愛の学科に

全身で打ちこまねばならない。その際の学科に密接な関係のある諸書を愛読しなければならぬ。それからまたその学科と連関の密ないくつかの学科を勤勉に学ばなければならぬ。どの生徒もこのような学習の原則を有つべきである。

両親も先生も学習のこのような原則を認識し子弟をこれに向って促進しなければならぬ。それゆえどの学生も自分の

好きな学科をいよいよ勉強し研究することができるだけ専門学校や単科大学がなければならぬ。斯くて学生は自分の生涯の課題に打ちこみ、然るべき天職を得ることができよう。

この学習の原則が一般に行きわたるなら、「おちこぼれ」の如きまちがった現象が消え失せよう。「おちこぼれ」というような生徒の人格を損なう言葉がわが国の教育界で恥もなく用いられているのは非難さるべきである。

両親と先生が子弟の教育のため深い宗教的思念とあたたかい心情をもつことが極めて望ましい。

IM ANFANG WAR DAS PATHOS. (T. KOIKE)

„Im Anfang war das Wort“ (Joh. 1:1). Der Logos, das Original des „Wortes“ bedeutet im Allgemeinen: Vernunft, Recht, Wahrheit, Gesetz, Wort. Johannes versteht unter diesem Logos: das Wesen des geistigen Wortes. Auf unserer früheren Bibel steht: der Weg. Bei einer Übersetzung Anfang Meiji Ära lautet so: „Im Anfang war das Geist=Wort.“

Goethe, Genius des Wortes, war befriedigt, als er durch den Helden des großen Werkes „Faust“ Faust mit Hilfe des Geistes so übersetzte: „Im Anfang war die Tat.“ Germanisches Denken hat nämlich inniges Interesse an Willen, Tat, dem praktischen Ethos. Daraus schließt sich Ethos=Christus.

Da ich ein Japaner bin, möchte ich vielmehr so bekennen: „Im Anfang war das Pathos.“ Geistige Existenz <pros ton theon> wäre pathetisches, leidendes Wesen.

Wie der griechische Logos=Christus, so der japanische Pathos=Christus—Christus der geistigen, großen, ursprünglichen Liebe.

Logos: Vernunft, das Wahre. Ethos: Wille, das Gute. Pathos: Gefühl, das Schöne. Vernunft, Wille, Gefühl, das Wahre, das Gute, das Schöne. Solche drei Phasen müßte man einheitlich haben. Am wichtigsten hat man aber Liebe.

元始に根源愛^{パトス}があった〔独和対照〕 天愛

「元始に言ありき」（ヨハネ一・一）。

「言」の原語ロゴスは「道理」の意が一般的と思うが、ヨハネは「靈言者」といった内実で用いた。日本語の元訳には「道」とある。明治初年の訳には「元始に靈言がござる」とある。

言の天才ゲーテは靈感を以て大作『ファウスト』の主人公ファウストにより「元始に行為があった」訳して満足した。即ちゲルマン的思惟は意志、行為、実践的なエトスと関わりが深い。だからエトス・キリストである。

私は日本人であるので、むしろ「元始にパトスありき」と言いたい。神に對面して実存する靈的実存者は神に愛されているパトスの実存ではないか。ギリシヤ的ロゴス・キリストがあるように、日本的パトス・キリストもあろう。靈愛、大愛、根源愛のキリストである。

ロゴスは知・真。エトスは意・善。パトスは情・美。知意情、真善美、人間のこの三相は全一的に備っているべきである。而も愛が人間に最も大切である。

（一九八四年二月 冬 第十七号）

AUF DEM BERGPASS DES 80. LEBENSALTERS

(T. KOIKE)

(1984. 3. 20) Frühlingsanfang — Sonett —

Fünfzig Jahre war ich als germanistischer Lehrer tätig.

Vier und vierzig wandre ich als Prediger geistig.

Auf letztes Jahr traf uns goldene Hochzeit günstig.

Jetzt erreiche ich den Bergpaß des Alters achtzig.

Ach Bruder ! Du starbst in Peking als siebenundzwanzig.

Ach Mutter ! Du verlorst Gesicht rückwegs im Schiff blitzig,

Wegen langjähriger Mühe und der Trauer der Seele.

Da fühlte ich mich wie gestürzt in tiefe Höhle.

Des Bruders Tod und der Mutter Blindheit !

Das war der Grund, worum ich mich bekannte

Zu Christo direkt wie der Apostel Geistigkeit.

Über dem Bergpaß beginnt die Sonne

nach Schneesturm zu scheinen,

Wie geistiges Symbol der Dichter : Goethe und Dante.

Ende Jahrhundert wird ein dramatisches Epos erscheinen.

八十路の峠にて〔独和対照〕 天 韻

——ソネット——一九八四年三月二十日 春分

独乙学の教員生活五十年。

靈的伝道の旅路四十四年。

去年は金婚の幸にめぐりあい、
今や八十路の峠に辿りついた。

兄よ！御身は北京で仆れた、二七の期。

母よ！御身は帰りの船路で突如失明、

長年の労苦と魂きはる悲しみのため。

その時私は奈落の底へ突き落された。

兄の死と母の失明！

これが基因でわが信仰告白は

キリスト直結、使徒らの靈性の如く。

峠の上では太陽が吹雪の後で照り始め

た、

芸天・断天、両詩人の靈的象徴の如く。

世紀の終末に劇的な叙事詩が成ろう。

（一九八四年四月 春 第十八号）

DIE ERSTE LIEBE

(T. KOIKE)

1984. 6. 23

—Sonett—

Die erste Liebe kam vom Herrn und Gott
Als ich Kind, doch wußte ich's nicht.
Zweite Liebe floß aus der Mutter,
Die mich erzog mit Lieb' und Licht.

Dritte Liebe fühlte ich im Bruder,
Als ich Knabe von ihm gelehrt.
Vierte Liebe kam vom Dichter,
Der sonntags die Bibel tief erklärt'.

Die letzte Liebe kam vom Himmel,
Als ich im Berg Aso Andacht gemacht,
Daß in mich der heilige Geist brach herein.

Die erste Liebe von Chsisto hat immer
Meinem Geist und Leib Kräfte gebracht,
So komme ich in dessen Liebe immer hinein.

初めの愛〔独和対照〕 天韻

—ソネット—1984. 6. 23

元始の愛は主と神から来ていた
幼いときに、だがそれは知らなかった。
第二の愛は母から流れて来た。
彼女は私を愛と光で育ててくれた。

第三の愛を兄に感じた、
少年のときに彼から学んだ際に。
第四の愛は詩人から来た、
彼は日曜に深く聖書を説いた。

最後の愛が天降りした。
阿蘇山で祈っていたときに、
聖霊が私の中に突入した。

キリストの初めの愛はいつも
私の霊と体に力を賜うた、
私はその愛の中に絶えず帰入する。

(1984年7月 夏 第19号)

DAS LICHT DES NICHTS

(T. KOIKE)

1984. 8. 4.

— Sonett —

Gelingen oder Mißlingen nicht achtend,
Nur Arbeiten zu lieben.
Bestehen oder Durchfallen überwindend,
Nur das Beste auszuüben.

An Gewinnen oder Verlieren im Sport nicht denkend,
Nur mit ganzem Wesen sich zu messen.
Den Werfer und dessen Ball ins Auge fassend,
Mit ganzem Geist und Leib den fliegen zu lassen.

Auf solche Weise tue alles in selbstlosem Dasein !
Dabei wird das Ich ohne Ich brennen.
So zeigt sich fein : Nichts ist alles.

In geistigem Leben, Weben und Sein
Im Verein mit Gottes Urbrunnen
Erscheint das Licht des Nichts des Weltalles.

無の光〔獨和対照〕 天韻

——ソネット——

一九八四・八・四

ことの成否を顧みず、

ただ仕事を愛する。

合格・不合格を乗り越えて、

ただ最善を尽すのみ。

競技の勝敗を念とせず、

ただ全存在で自己と戦う。

投手と投球を凝視して、

全霊全身でかつ飛ばす。

斯く何ごとも無私の存在で為せよ！

そのとき我れ無き我れが燃えるのだ。

こうして無即全が妙へに現ずる。

神なる源泉と一如なる

靈的な生と動と存在に於てこそ

宇宙の無の光が現はれる。

(一九八四・十月 秋 第二十号)

〔註〕「生と動と存在」は使徒行伝一七・二八参照。

この宇宙的な無の光の全的な体現者はキリストと釈迦である。

HUNDERT TATEN GLEICHEN EINEM TOD NICHT.

(T. KOIKE)

(15. JAN. 1985)

— Sonett —

Hundertmaliges Hören gleicht einem Sehen nicht.

Hundert Worte gleichen einer Tat nicht.

Hundert Taten gleichen einem Tod nicht.

Dieser Tod verleiht anderen Lebenslicht.

Ich wußte, wie schön die Berge der Schweiz sich richten,

Durch das Drama Schillers über Tells Geschichten,

Auch durch Bilder der schönen Ansichten.

Hundertmaliges Hören gleicht doch

einem Sehen mitnichten.

Die Bibel ist ein Drama von Tod und Leben.

Drum lese ich darin mit Leib und Erleben,

So erkenne ich : Hundert Worte gleichen einer Tat nicht.

Ich sah des Bruders herrliches Leben und Wesen,

Sein Tod ist mir immer mehr wirksam gewesen,

So gleichen seinem Tod dessen hundert Taten nicht.

百行一死に如かず〔独和対照〕 天韻

——ソネット——

一九八五年一月十五日

百聞一見に如かず。

百言一行に如かず。

百行一死に如かず。

此の死は他者に生命の光を与える。

聖書は生死を賭けてのドラマである。

だから私は体からだと体験でこれに読み入る。

かくて識る、百言は一行に如かざるを。

私は見た、兄の素晴らしい生きざまを。

彼の死は常に新あらたに私に能あたきかけていた。

かくて彼の死はその百行を絶する。

またその美景の絵画によって。

だが百聞は到底一見に及ばない。

(一九八五年二月 冬 第二号)

EIN LEBEN EIN WERK

(T. KOIKE)

20. Febr. 1985

— Sonett —

„ Um eines sorgend, nach einem trachtend,
Für eines duldend, alles hingebend für eines,“
So war ihm Musik durchs Leben ganz seines,

Der ganzen Welt gewidmet <Die Neunte> betend.

„ Hast du dich eines als das erste im Leben entschieden,
So sollst du keines andere im Sinne haben,
Und dich aufs beste diesem einem ergeben.“

So steht im <Tsuresuregusa> fest geschrieben.

Dantes Werk <La Divina Commedia>

glänzt wie Gestirne im Himmel.

Miltons Werk <Paradise Lost>

blüht wie Blumen in den Wüsten.

Goethes Werk <Faust> scheint wie die Sonne über der Welt.

Jeder Junge hat seine Gabe aus dem Himmel.

Jedes Mädchen erhält ihre Begabung aus Mutterbrüsten.

So werde jedes Leben wie ein Werk in Gottes Zelt.

一生一作〔独和対照〕 天韻

——ソネット——

「一つを念ひ、一つを追ひ求め、
一つの為に忍び、すべてを一つの為にうち棄てて」
かくて音楽こそは生涯を貫きて彼のものなりし、
《第9》を祈りもて全世界に彼は捧げぬ。
「汝一生のうち第1のことを案じ定め、
その他はすべて思ひ棄てて
この一事をはげむべし」
斯く《徒然草》に確かと記されてあり。
ダンテの《神曲》はみ空の星辰と輝きてあり、
ミルトンの《楽園喪失》は曠野の花と咲き乱る、
ゲーテの《ファウスト》は世を照らす太陽の如くなり。
いつれの青年も天賦の才幹をもてり、
いつれの乙女も母の乳房よりぞ天資受く。
いつれの生涯もされば神の幕屋の作たれよ！

(1985年4月 春 第22号)

〔註〕 本詩第1節前半の句は1827年晩秋ベートーヴェン記念碑除幕式での詩人
グリルバルツェルの名演説の片言。第2節の句はかの兼好法師の名作
『徒然草』第188段の隻句。

BEI DER 45. STIFTUNGSFEIER
DER TOKYO CHRISTI-EKKLESIA (SHOHDAN)

— Sonett — 22. Sept. 1985

Eben vor fünfundvierzig Jahren.

Am 22. September neunzehnhundertvierzig,

Dem Gedächtnistag meines Bruders MASAMI günstig,

Der in Peking am Tage im Jahre 1921 gen Himmel gefahren,

Habe ich eine Hütte im Namen des Herrn errichtet

Im Dorf Musashino im kleinen.

Seit ich im Herbst 1950 vom Geist getauft zum Seinen,

Bin ich von gewissen Kopf-Christen als heterodox gerichtet.

Indem ich so von solchen Christen verworfen,

Bin ich immer mehr von Christo geliebt worden,

Und mit den Aposteln geistig verbunden.

Ich fühle mich selig, so mit ihnen weggeworfen.

Wie ich auch mit ihnen zum Eckstein geworden,

Daß ich bin mit seistig Erlösten durch mich gebunden.

(T. KOIKE)

東京キリスト召団創立四十五年祭に際して〔独和対照〕 天震

——ソネット—— 一九八五年九月二十二日

正に四十五年前

一九四〇年九月二十二日、

北京にて一九二一年同日に召天したる

わが兄政美の記念日に、折りも好く

かかる基督者どもに見棄てられしかば、

いよいよ以ってキリストに愛されたるぞ、

かくて使徒らと靈的に結ばれてあり。

恵まれし哉、使徒らと共に棄てられて、

この身亦使徒らと共に

主の聖名にあつて一つの幕屋を
武蔵野村にささやかに創立したり。

一九五〇年秋聖靈みたまの属もつたる受洗みづの方

ある観念的基督者等に異端視されぬ。

隅の首石おきと成りたれば、

我を通して靈的に救はれし人々と

結ばれてあり。

NEUE REFORMATION

27. OKT. 1985

—Sonett 1.—

(T. KOIKE)

Luthers Reformation gegen den Katholizismus

Hatte ihren Erfolg in der Geschichte wie gemeint,

Ob es schon beide Bekenntnisse geben muß.

Doch habe ich Glauben und Tat neu vereint.

Der Glaube selbst ist mir nämlich eine innere Tat,

Indem ich mich werfe in Christum mit ganzem Wesen.

Der Glaube ist mir Heimgehen in die Geist=Heimat,

Wie das Gebet für mich Zurückkehren ins Urwesen.

In solcher Glaubenstat vereinen uns Du Christus und ich.

Aus solcher Glaubenstat folgt im Geist äußere Tat.

Ich bin Nichts, Geist=Christus ist mein Alles.

Die Frage: „Glauben und Tat“ ist aufgehoben für mich.

O Christusmystik! Es braucht keinen Rat.

So der Glaube wie die Tat ein und alles.

新宗教改革〔独和対照〕一九八五・一〇・二七

天 鐘

~~~~~ソネット第一~~~~~

ルターのカトリックへの宗教改革は

史上にその効果をもった、意の如く。

どちらの信条もあるにはあるが。

だが私は信仰と行為を新たに

一如となした。

信仰自身が即ち内的行為なのである、

全存在を以て基督の中に

己おのれを投入するからだ。

信仰はみ霊の故里に入りゆくことだ、

祈りが原存在に帰入する

ことである如く。

かかる信行で汝キリストと

私は一如となる。

かかる信行から外的行為が靈然と生ずる。

私は無者。み霊のキリストが

わが一切である。

「信仰と行為」の問題は揚棄された。

噫、キリスト神秘よ！ 審議は無用。

信即行、信行即如一切である。

## NEUE REFORMATION

morgens 7. FEBR. 1986

—Sonett 2.—

(T. KOIKE)

Durchs Kreuz liebst Du mich Sünder.

Aus dieser Liebestat quillt in mir Glaube.

Meine Glaubenstat kommt daher aus Deiner Kraft.

Ach, ich bin durchaus Nichts im Erfinder.

Meine Tat ist im Licht der geistigen Taube.

Immer sauge ich gern Deine Lebenssaft.

Aus der gefährlichen Kultur

Möchten wir zuweilen hineindringen

In die Brüste der Natur,

Um frisches Wasser zu trinken !

Versenken wir uns geistig

In die biblische Welt,

Daran teilzunehmen lustig

Und aufzuschlagen des Geistes Zelt !



## 新宗教改革〔独和対照〕一九八六・二・七 朝

~~~~~ソネット第二~~~~~

十字架で汝はこの罪びとを愛し給う、

この愛の行為から信行が衷に湧き立つ、
わが信行はそれゆえ汝の力から生じる。

噫、私は創作者の中の無者に過ぎない、
わが行為は御霊の鳩の光の中である。

いつにても私は汝が生命の汁を

吸って嬉しむ。

この危険な文化から立ち出でて

我らは時折りわけ入りたい

天然の乳房の中に、

さやけき水を飲まんがために！

御霊に在って我らは沈潜しよう

聖書の世界に。

この世界に楽しく参じて、
御霊の幕屋を張らん哉！

NEUE REFORMATION

abends 7. FEBR. 1986

—Sonett 3.—

(T. KOIKE)

In der Welt gibt es manche Religionen,
Und der Geist lebt in jedem der Millionen.
Der Mensch wäre eigentlich an die Religion gebunden,
Denn der Geist sollte sein mit dem Urwesen verbunden.
Das Urwesen wäre unsagbarer Urgeist :
Gott, Jahweh, Allah, Atman, Vater, wie man ruft dreist.
So darf man nennen das Gebiet des Urgeistes Urreligion.
Wo einer lebt im Geist, da hegt ihn des Urgeistes Dimension.
Wo der universale Urgeist schwebt,
Was herrscht da für Atmosphäre ?
Man fühlt da an Leben, Licht und Liebe reich.
Wenn man wirklich in dieser Dreieinigkeit webt,
Wäre es einerlei, an welche Religion man sich kehre.
So wird die ganze Welt zu Frieden, Freude
und Himmelreich !

新宗教改革〔独和対照〕一九八六・二・七 晩

~~~~~ソネット第三~~~~~

世界には宗教が多々たる。

億萬の人々の誰れにも霊は生きている。

人は本来宗教人ではないか、

霊が根源存在と結合しているはずだから。

根源存在は言ひ難き根源霊ではないか、

神、ヤハウエ、アラール、アートマン、

父、と大胆に叫ぶ。

だから根源霊の領域を根源宗教

と呼んで好い。

人が霊的に生きているから、

根源霊の次元に抱かれる。

宇宙的な根源霊が漂うところ、

そこにはどんな雰囲気が増っているか。

人々はそこに豊かな生命・光明・

愛憐を体感する。

この三相一如の中に本当に

動いて在るなら、

どの宗教に帰依して居るも同然だ。

かくて全世界は平和と歓喜と

天国に現成する。

## 跋

「人類の母語は詩である」とドイツ古典初期の鬼才ハーマンが言った。また歌は音楽を伴った詩であるから、人類のハートの叫びである、と言って可いであろう。とにかく詩歌は私にとって魂の故里である。

八項から成る本書を編みながら、私は現実界にしながら永遠界を歩いている気がしていた。否あるときは永遠界を靈翼で飛んでいる想いがした。

本巻棹尾の三連ソネット「新宗教改革」は天翔けるハレー彗星に照応して叫ぶ天鐘の悲願靈願である。

召団讃歌B 18番「八十路の峠」で告白しているように、いよいよ私は詩の国の本格的な旅路を跋涉しなければならない。ひるは太陽の、夜は月や星の路しるべによって。

ともあれ、地上の生涯の果てるまで、詩歌は私の告白として、路傍の石に、野べの草の葉に、森の樹幹に記されるであらう。

# ●著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大、早大、東海大等の講師。一九六一・六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功勞十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講義を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖書の本格的体験以來、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成し、その代表者となる。

著作活動、皆て「旧約知識」誌、「キリスト教常識」誌の同人。後に「曠野の愛」誌、「曠愛新書」。現在「エン・クリスト」誌の主筆。そしてこの「小池辰雄著作集」の著者。訳書は、白水社版の「眠られぬ夜のために」（ヒルティ著作集第四巻）、「神と人間の実存的弁証法」（ベルジャーエフ著作集第六巻）等。

◎一九八四  
小池辰雄著作集 第八巻

## 詩歌集

初版印刷 一九八六年四月二十五日  
初版発行 一九八六年四月三十一日

著者 小池辰雄

発行 小池辰雄著作刊行会

東京都武蔵野市吉祥寺東町  
四ノ一五ノ一九（〒一八〇）  
TEL 〇四二二〇三三三  
（振替） 東京五一六一三一八

（責任者） 奥田昌道

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

装幀 前野洋一

頒価 三五〇〇円（送料不要）

●小池辰雄著作集（全十二卷）

改正頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。

\*印は既刊

- \*第一巻 無者キリスト（一九七五）……………（三版）
- \*第二巻 芸術のたましい（一九七六）……………（再版）
- \*第三巻 無の神学（一九八二春）……………（初版）
- \*第四巻 詩篇珠玉集（一九八〇）……………（再版）
- \*第五巻 百世の師ヒルティ―（一九七七）……………（再版）
- \*第六巻 随想集（一九八二暮）……………（再刊）
- \*第七巻 聖書の人ルター（一九八四）……………（初版）
- \*第八巻 詩歌集（一九八六春）……………（初版）
- 第九巻 紀行と感想（一九八六暮）……………
- 第十章 旧約聖書抜粹（一九八七）……………
- 第十一章 新約聖書抜粹（一九八八）……………
- 第十二巻 一日千年（一九八九）……………

|      |                |
|------|----------------|
| 口座番号 | 東京 5—6 1 3 1 8 |
| 加入者名 | 小池辰雄著作刊行会      |

●申込みは郵便振替にて